

hyphen no. 5

【年次報告】

佐原浩一郎 DG-Lab, 2019 ⇄ 2020.....1

【特集：『意味の論理学』50周年記念特別企画「『意味の論理学』を本質変形する」】

小倉 拓也 導入——『意味の論理学』の地図作成.....4

内藤 慧 海の原理とストア派——LS動的発生論のストア派的読み替え.....9

平田 公威 動詞的になること
——『意味の論理学』におけるアイオーンの現在にかんする文法論的考察.....18

江川 隆男 〈批判／臨床〉の平面論——『意味の論理学』と一義性の思考について.....26

【論考】

財津 理 初期ドゥルーズにおける精神分析への対応.....36

得能 想平 『ドゥルーズ 流動の哲学』と『ドゥルーズ 解けない問いを生きる』を読み直す
——合理性の観点から.....45

小林 卓也 『ドゥルーズの自然哲学：断絶と変遷』合評会コメントへの応答.....53

【イベント報告】

小倉 拓也 『意味の論理学』出版50周年記念特別企画
「『意味の論理学』を本質変形する」.....60

hyphen

no. 5

[Annual Report]

Koichiro SAHARA DG-Lab, 2019 ⇔ 2020.....1

[Feature Articles : 50th Anniverssary of Publication of *The Logic of Sense*]

Takuya OGURA Introdcion: A Cartography of *The Logic of Sense*.....4

Satoshi NAITO Principle of the ocean and the Stoics -the dynamic genesis from the viewpoint of the Stoics-.....9

Kimitake HIRATA Becoming Verbal: A Grammatical Approach to the Present of Aion in *The Logic of Sense*.....18

Takao EGAWA Critical and clinical plane theory : On the thought of univocity in *The Logic of Sense*.....26

[Articles]

Osamu ZAITSU Approach to psychoanalytic theories in early Deleuze36

Sohei TOKUNO Rereading the two interpretations of Deleuze : *Deleuze, The Philosophy of Flux* and *Deleuze, Living the Unsolvable Question*--from the perspective of rationality.....45

Takuya KOBAYASHI A Reply to the Comments in the Book Review Session of *the Philosophy of Nature of Deleuze*.....53

[Event Report]

Takuya OGURA 50th Anniverssary of Publication of *The Logic of Sense*.....60

【年次報告】

DG-Lab, 2019 ⇄ 2020

佐原浩一郎

偶然と必然にかかわらず、誰かがある場所を訪れ、一定の時間そこにとどまり、そして去っていく、こんなふうに極度に一般化して語ったほうがいいのか、そうではなく、ドゥルーズとガタリにかかわる研究会およびイベントが開催され、大学や学会に所属していなくても参加可能であるということを理由に、あるいは関西で開催されているということを理由に、もしくは別段の理由なしにそうした催しに参加する、というふうに、ある程度特殊化して語ったほうがいいのか。あるいはまた、この程度の特特殊化ではまったく十分ではなく、より多くの言葉を費やす必要があるのか（より多くの言葉を費やすことがより高度に特殊化することによってそのまま相当するわけではありませんが）。いずれにしても、わたしはいま、DG-Lab が 2019 年度もいくつかの研究会およびイベントを開催し、いずれの催しも例年どおり多くの参加者にめぐまれた、ということをおうとしています。

DG-Lab の 2019 年度のテーマは『意味の論理学』でした。この年に限ったことではありませんが、扱う題材が題材だけに、研究会の内容は、ある程度は仕方ないにしても、それなりに専門性の高いものになります。アカデミズムの外で、ドゥルーズとガタリに関心のある人たちが必然的に意見交換することになるような場となる、ということがこの研究会の設立された一つの理念だったことを思えば、そうした専門性の高さは当初の理念を退けてしまいはしないか、といった議論も一回りして、今では専門性が高くなってしまふ理由を考えるよりも、アカデミズムの外にそういう場があるということ、つまり、ドゥルーズとガタリの哲学が一般化されすぎず、正確な読解が望まれ、それなりに高度な議論が確保されるような場が大学や学会とは無関係に成立しているということ、そうしたことが求められているのかもしれないと思ったり、思わなくなったりしています。そして、今後 DG-Lab がより開かれたラボになっていくとするなら、このようなあ

る意味での難解さを足がかりにしてこそなのではないかと思えます。

2019 年度の研究会は例年どおり六回開催され、読書会では毎回晦渋なテキストに取り組みながらも、その時々発表者のテキスト読解に導かれながら、そして、参加いただいた方々の寛容さ、我慢強さに助けられながら、基本的にはやわらかく飄々とした雰囲気の中にありました。12 月には、立教大学の江川隆男先生にお越しいただき、イベント『『意味の論理学』を本質変形する』を開催しましたが、こちらは、近年のドゥルーズに対する関心の高さを改めて実感させられるような盛況ぶりでした。登壇していただいた江川先生、このイベントの実現に奔走してくださった秋田大学の小倉先生、そして参加いただいたみなさまにあらためて感謝したいと思います。

2020 年度は『哲学とは何か』をテーマに据え、すでに最初の読書会は終えています。その後情勢が変化したため、この先の定例会のあり方などを再考しているところです。どのようなかたちになるにしても、読書会は開催されるだろうし、研究発表の場が設けられるだろうし、ドゥルーズやガタリに関心のある方がそこに参加するということになります。あるいは、誰かによって何かが開催され、何らかの場が設けられ、誰かが参加するということになります。例えば、集い、座り、読み、聞き、考え、話すということになります。少なくとも、見かけのうえでは、つまり、そうしたことが執拗に反復され、反復の下では、非常に緩慢でありかつ絶え間ない変化がついてまわり、何かはもう生起してしまっていて、その何かを認識するときにはすでに何か別の生起の中にあるということになります。もちろん、DG-Lab の定例会の今後のあり方について、反省し、工夫し、よりよいものにしていく必要があるとは思いますが、そうしたことにかかわらず、夢のなかでは、ある系列が連続していくことになります。

第二十五回 DG-Lab 研究会

- 【日時】2019年1月19日(土) 14時～19時(*13時5分からミーティング)
【場所】長岡京市生涯学習センター(バンビオ1番館内)、6階・会議室2
【読書会】『意味の論理学』第2セリー;第3セリー;第23セリー;第26セリー(担当:平田公威)
【研究発表】内藤慧「『意味の論理学』と物体・非物体の哲学」

第二十六回 DG-Lab 研究会

- 【日時】2019年3月9日(土) 14時～19時(*13時5分からミーティング)
【場所】長岡京市生涯学習センター(バンビオ1番館内)、6階・会議室3
【読書会】『意味の論理学』付録「クロソウスキー、あるいは身体一言葉」(『意味の論理学 下』pp.185-224)(担当:得能想平)
【研究発表】伊藤幸生「ドゥルーズにおける法論の位置づけと射程～判例/法解釈論を核心として」

第二十七回 DG-Lab 研究会

- 【日時】2019年5月25日(土) 14時～19時(*13時5分からミーティング)
【場所】長岡京市生涯学習センター(バンビオ1番館内)、6階・会議室3
【読書会】『意味の論理学』第18セリー～第21セリー(担当:内藤慧)
【研究発表】得能想平「最初期ドゥルーズの哲学」

第二十八回 DG-Lab 研究会

- 【日時】2019年7月27日(土) 14時～19時(*13時5分からミーティング)
【場所】長岡京市生涯学習センター(バンビオ1番館内)、4階・学習室3(13時5分～15時)、4階・学習室2(15時～19時)
【読書会】「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」(『意味の論理学 下』所収、小泉義之訳、河出文庫)(担当:伊藤幸生)
【研究発表】佐々木晃也「ドゥルーズにとってのスピノザ」

第二十九回 DG-Lab 研究会

- 【日時】2019年9月28日(土) 14時～19時(*13時5分からミーティング)
【場所】長岡京市生涯学習センター(バンビオ1番館内)、4階・学習室2
【読書会1】『意味の論理学』第30セリー～第32セリー(担当:内藤慧)
【読書会2】78年のスピノザ講義「情動と観念」を読む(担当:佐々木晃也)

第三十回 DG-Lab 研究会

- 【日時】2019年11月30日(土) 14時～19時(*13時5分からミーティング)
【場所】長岡京市生涯学習センター(バンビオ1番館内)、6階・会議室3
【読書会】『意味の論理学』第16セリー;第17セリー(担当:佐原浩一郎)
【研究発表】強度としての「第3ソナタ」——ネオ・バロック試論 発表:F.アツミ(Art-Phil)

関連イベント

『意味の論理学』出版 50 周年記念特別企画 『『意味の論理学』を本質変形する』



『意味の論理学』出版 50 周年記念特別企画
『『意味の論理学』を本質変形する』

日時 : 2019年12月7日(土) 13:00-18:00 (12:30開場)
場所 : 慶応大学三田キャンパス 大学院校舎5階352教室
定員 : 40名
入場 : 無料、予約不要 (座席がなくなり次第立ち見になります。ご了承ください)
主催 : 秋田大学教育文化学部地域文化学科国際文化講座 小倉拓也研究室
DG-Lab (ドゥルーズ・ガタリ・ラボラトリ)

タイムテーブル

13:00 導 入 小倉拓也 (秋田大学)
導入—『意味の論理学』の地図作成
13:20 研究発表 内藤 慧 (東京大学)
海の原理とストア派—『意味の論理学』動的発生論のストア派的読み換え
14:05 研究発表 平田公威 (大阪大学)
動詞的になること—『意味の論理学』におけるアイオンの現在の文法論的考察
15:00 講 演 江川隆男 (立教大学)
〈批判/臨床〉の並行論について—『意味の論理学』の一義性の思考 (仮)
16:50 全体討議
18:00 閉 会

日時 : 2019 年 12 月 7 日 (土) 13:00-18:00 (12:30 開場)

場所 : 慶応大学三田キャンパス 大学院校舎 5 階 352 教室

主催 : 秋田大学教育文化学部地域文化学科国際文化講座 小倉拓也研究室、DG-Lab (ドゥルーズ・ガタリ・ラボラトリ)

導入 : 小倉拓也 (秋田大学) 「導入—『意味の論理学』の地図作成」

研究発表 1 : 内藤慧 (東京大学) 「海の原理とストア派—『意味の論理学』動的発生論のストア派的読み換え」

研究発表 2 : 平田公威 (大阪大学) 「動詞的になること—『意味の論理学』におけるアイオンの現在の文法論的考察」

講演 江川隆男 (立教大学) 「〈批判/臨床〉の並行論について—『意味の論理学』の一義性の思考 (仮)」

【特集：『意味の論理学』を本質変形する】

導入——『意味の論理学』の地図作成

小倉 拓也

はじめに

2019年は、ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』（1969年）刊行50年にあたる年だった。日本では、1987年に法政大学出版局より岡田弘と宇波彰による翻訳が、2007年に河出文庫より小泉義之による翻訳が刊行されており、とりわけ後者の刊行以降、『意味の論理学』をめぐる研究、『意味の論理学』に触発された思考が、それ以前に比して盛んに展開されるようになったように見受けられる。『意味の論理学』で展開されている様々なテーマ（意味、出来事、身体、etc.）、そしてそれらの哲学的（ストア派、ライプニッツ、ニーチェ、etc.）、文学的（キャロル、ルーセル、アルトー、etc.）、言語学的（ソシュール、バンヴェニスト、ギョーム、etc.）、精神分析的（フロイト、ラカン、クライン、etc.）な文脈あるいは星座は、そのポテンシャルを消尽することなく、むしろ絶えず再形成しながら、今日に至るまで私たちの思考を突き動かし続けていると言えるだろう

本特集は、2019年12月7日（土）に慶應義塾大学で開催された『意味の論理学』刊行50周年記念特別企画「『意味の論理学』を本質変形する」にもとづくものである。この企画は、『意味の論理学』をめぐる研究や思考の展開の現在地点を測定し、その先へ進むことを目指したものである。企画では、小倉拓也による導入、内藤慧と平田公威の研究発表、江川隆男の講演、そして全体討議が行われた。多数の参加者を迎えることができ、会場は超満員、質疑応答も活発に行われ、企画は盛況となった。以下では、企画と同様、まずは特集の導入として、『意味の論理学』についての簡単な地図作成を行うことにしたい。もちろんそれが、後続する各論文と読者によって、捻じ曲げられ、変形されることを期待して。

1. 位置づけ

『意味の論理学』は、国家博士号請求主論文である『差異と反復』（1968年）と同時期の著作であり、特定の哲学者や作家をめぐるモノグラフではなく、むしろそれらの成果が動員され総合された書物であること、そして、後に展開するフェリックス・ガタリとの協働作業以前の仕事であることから、ドゥルーズ独自の優

れて「哲学的な」仕事の代表作のひとつと目されてきた。内容の面においても、潜在性の存在論、超越論的経験論、それらを強くインスパイアしている同時代の構造主義への哲学的応答といった、しばしばドゥルーズ哲学がそれによって形容され、代表される問題構成において、主著『差異と反復』と共通する部分が多い。また、構造主義を「時代の精神」⁽¹⁾、「新たな超越論的哲学」⁽²⁾と規定する、1967年執筆の論文「何を構造主義として認めるか」（1972年）と記述上オーバーラップする部分が多いことも、『意味の論理学』が同様の問題構成を有することを示している。このように、『意味の論理学』は、ドゥルーズが哲学史や個々の作家に関するモノグラフ的研究を積み重ねながらおのれ自身の体系的な哲学を構築し展開した⁽³⁾、1960年代の仕事の重要な一部を構成しているのである。

2. 否定的な評価や処遇

しかしながら、それにもかかわらず『意味の論理学』はドゥルーズの仕事のなかで評価が難しい一冊とされ、ときに「黙殺」⁽⁴⁾されてきた。鈴木泉も「呪われた書物、孤独な書物」⁽⁵⁾と評するように、『意味の論理学』はドゥルーズ研究およびドゥルーズをめぐる言説のなかで、例外的とも言うていほど否定的に評価され、処遇されてきたと言える。その表向きの理由としては、次の二点をあげることができるだろう。

第一に、『意味の論理学』は、形式面において体系的な章立てを行っていない、やや特殊な構成を有している。それは、収束することのない34本の短いセリーと、古代哲学と現代文学に関する5本の補論から構成されており、その理路を首尾一貫した仕方で辿るのは容易ではない。そして、このような構成を、ドゥルーズは意図的に、ある意味でパフォーマンスに行っているふしがある。というのも、特権的なセリーがなく、セリーが収束せずに発散し、それらのあいだに出来事として意味が浮かび上がるという論理こそ、まさに『意味の論理学』で探究される「意味の論理」そのものだからである。つまりドゥルーズは、書物のなかで探究され解明される意味の論理を、当の書物の構成において実演してみせるとみなすことができるのである。これを体系的な仕方

で読み解くのは難解を極める作業となるだろう。

第二に、『意味の論理学』は精神分析を肯定的に援用している。単に援用しているどころか、ドゥルーズ自身がこの書物を「論理学のおよび精神分析的なロマンの試み」⁽⁶⁾と規定している。よく知られているように、後にドゥルーズはガタリとともに、精神分析を厳しく批判する内容を含み、世界的に大きな反響を巻き起こした『アンチ・オイディプス』(1972年)を上梓しており、その観点から『意味の論理学』を「いまだ精神分析に対する無邪気で恥ずべき迎合を示していた」⁽⁷⁾と自己批判しているのである。とりわけ、『意味の論理学』において、意味の論理の核心部分に位置づけられるセリーの発散の契機が、精神分析的な去勢を介した非物体的な幻想の発生の契機と重ねられていることに鑑みれば、『アンチ・オイディプス』の観点からの自己批判は、単に精神分析に賛成するか否かの問題ではなく、自身の意味の論理の理解、あるいはその問題構成そのものに関わっているとさえ言える。このような事情から、『意味の論理学』は、後に明示的に放棄されたいわゆる「黒歴史」的な試みとみなされてしまう傾向があったと言える⁽⁸⁾。

3. 後の仕事との関係

しかし、『意味の論理学』の試みが後に完全に放棄されたかという点、必ずしもそうではない。むしろ、そこでは、ドゥルーズの後の仕事との関係から見てもきわめて重要な議論や概念が提出されているのである。ここでは、そのいくつかを書き出してみよう。

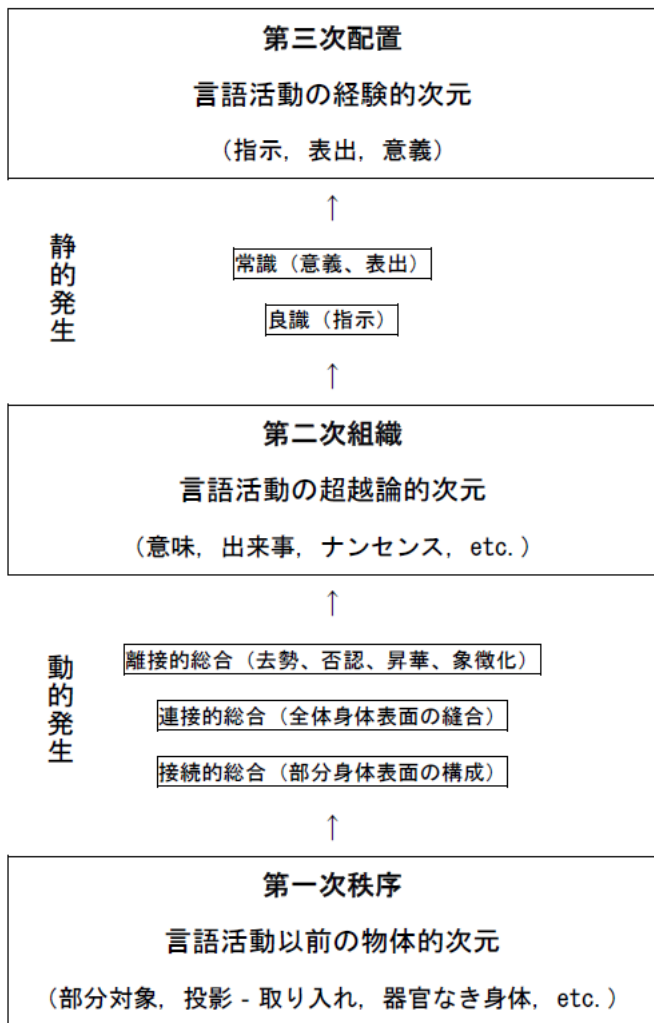
ドゥルーズは『意味の論理学』で、ストアの二元論に由来する「物的なもの」と「非物的なもの」の二元性を提示し、物的なものには還元されない非物的なものの存在論的身分——その「優位」——を論じている。その際ドゥルーズは、それを形象化するものとして、ルイス・キャロルにおける猫本体が消えても存続する「猫の微笑み」を引き合いに出している。物的なものには還元されない非物的なものの存在論的身分、そしてその形象としての「微笑み」は、ドゥルーズが最晩年まで繰り返し用いるものである。例えば、後期の仕事に位置づけられるフランシス・ベーコン論『感覚の論理学』(1981年)では、論究されるべき感覚の概念の一例として、「身体の消滅の後にやってくるだろうと感ぜられる」ものとしての、ベーコンの絵画の「ヒステリー

性の微笑み」⁽⁹⁾が引き合いに出されるが、ドゥルーズはこれを、まさにキャロルの「猫の微笑み」と重ね合わせている⁽¹⁰⁾。この議論は、晩年の『哲学とは何か』(1991年)における、「感覚」がその支持材に還元されずに存続する権利上の身分を持つという芸術作品論とも通底している。そこでも、そのような感覚の例として言及されるのは、キャンバスに描かれた「若者の微笑み」⁽¹¹⁾なのである。今後書かれるはずの、ドゥルーズにおける「微笑み」(sourire)の問題は、このように『意味の論理学』で大々的に展開される物的なものとの非物的なものとの二元性の問題系に位置づけることができるのである。

いくつかの主要概念についても、『意味の論理学』をひとつの重要な源泉としている。例えば、『アンチ・オイディプス』や『千のプラトー』(1980年)など、精神分析に批判的な中期の仕事で大々的に展開される「器官なき身体」の概念は、登場するたびにその内実を大きく変えていく難解な概念だが、それがはじめて案出され、提出されるのは、『意味の論理学』のアントナン・アルトール論である⁽¹²⁾。同様に、『アンチ・オイディプス』や『千のプラトー』では、構造主義的な構造概念に取って代わるものとして「機械」概念が前景化されるが、それは『意味の論理学』においてすでに構造概念との関係のなかで——構造＝機械という等式のもとではあるが——萌芽的に提示されている⁽¹³⁾。また、ドゥルーズ最後の著作となる文学論集『批評と臨床』(1993年)のタイトルを構成する「批評」と「臨床」は、他の著作でも断片的に触れられてはいるが、それらの本格的な定義が試みられているのはやはり『意味の論理学』である⁽¹⁴⁾。もちろん、時期や文脈によるこれらの内実の異同を解明することも肝要だが、それらが、後に厳しく自己批判される『意味の論理学』をひとつの震源としているということ、そして『意味の論理学』がなければ後にも存在しえなかつただろうということは強調されるべきである。

4. 内容の図式化

ここからは、『意味の論理学』の内側について見ていこう。以下に、ジョー・ヒューズによる『意味の論理学』の図式化⁽¹⁵⁾に、若干の変更を加えたものを提示しておく。網羅的な図式化ではないが、『意味の論理学』の基本構造をうかがい知るには有益なはずである。



『意味の論理学』は、何よりもまず、言語活動の経験的次元から、その超越論的形態を峻別し、後者の領野の論理と構造を探究するものだと言える（第三次配置-第二次組織）。このとき、言語活動の経験的次元を特徴づけるのが「指示」、「表出」、「意義」である。これらはそれぞれ、個体化された事物の状態、人称的な主体性や意図、一般概念に関わっている。これに対して、言語活動の超越論的形態は「意味」と規定される。経験的次元が、個体化されたもの、人称的なもの、一般的なものに関わるのに対して、超越論的形態である意味は、一見してそれらの否定態を文字どおりに示すように、「前個体的」で「非人称的」な「特異性」に関わるとされる。それは、対応する現実も、主体性や意図も、文法的・論理的な無矛盾性もいまだない、いわばそれらによって汚染されていない、純粹言語活動の領野において生起する「出来事」である。それゆえドゥルーズは、出来事としての意味を論じる際に、具体的文脈によって限定されない（例えば、帰属する主語による活用や、能動や受動といった状態を持たない）動詞の不定法や、キャロル、ジェイムズ・ジョイス、レーモン・ルーセルなどのナンセンス文学の類を引き合いに出すのである。精神分析的な無意識がここに重ねられるのも、それゆえ当然のことだと言える

う。そして、このような物理的実在やそれに固有の論理とは混同されることのない、その表面上で展開される領野が、非物的な「表面」と名指される。その上で、第二次組織から第三次配置への発生が、「静的発生」論として探究されていくことになる。

次いで、『意味の論理学』は、そのような超越論的次元が、言語活動以前の物的＝身体的な次元から発生する論理と機制の探究へと進む（第二次組織-第一次秩序）。この物的＝身体的な次元は、指示、表出、意義からも、さらには意味からも区別される、まったく無意味の領域である。注意しなければならないのは、この無意味が、表面の意味について引き合いに出されたキャロルのナンセンスとはまったく異なるものであり、むしろ、その文学的形象がアントナン・アルトーの「叫び」に見いだされるものだというのである。このような、言語活動の経験的次元からすればいずれも括弧つきの意味で「異常」と言いうるような二つの形態を、さらに本性の差異にしたがい分割することを、ドゥルーズは「批評」と「臨床」の問題だと言う。キャロルとアルトーの差異は、文学的にはナンセンスとまったく無意味の差異であり、それと並行して、精神分析的には倒錯とスキゾフレニアの差異であり、これらを明確に鑑別しなければならないのである。こうして析出されるスキゾフレニア的な物的＝身体的な無意味の次元を、ドゥルーズは表面に対して「深層」と呼ぶ。そして、この深層の世界が、メラニー・クラインの理論における、現実と幻想が混淆した幼児の部分対象の世界と重ねられ、そこから出発して、全体身体表面、全能的な内面性を構成しようとして、しかしそれに失敗することで、現実と幻想のセリーが分岐し、非物的なものの領野が開かれるまでのプロセスが、今度は「動的発生」論として探究されていくことになる。

このように、『意味の論理学』は、言語活動の経験的次元である第三次配置、その超越論的次元である第二次組織、そしてそのいずれからも区別される物的＝身体的な無意味の領域である第一次秩序という、三つの領域を峻別、提示し、それらの関係を探究する批評的で臨床的な超越論的哲学の企図だと言える。ドゥルーズは、これら三つの領域とその関係を、ストア派に由来する物的なものとの非物的なものとの二元論、そして、イデアと内的関係を有する存在者といかなる関係も有さないシミュラクルをめぐるプラトンの分割をとおしてトポグラフィ化しているが、ここでこれ以上その複雑な内実について紹介する余裕はない⁽¹⁶⁾。後続する各論文に、そしてそれらと合わせて読者諸氏の思考にまかせたい。

おわりに

以上、導入として『意味の論理学』のささやかな地図作成を行っ

た。しかし、ドゥルーズとガタリが言うように、地図作成が単なる「複写」ではありえず、絶えず引き裂かれ、裏返され、変形されることを必要とする以上⁽¹⁷⁾、この導入が言葉の真の意味で地

図作成たりうるためには、後続する各論文によって引き裂かれ、裏返され、変形されなければならない。地図作成の終わりは、その都度つねに、はじまりでしかないのである。

注

1. Gilles Deleuze, « A quoi reconnaît-on le structuralisme ? », in *L'île déserte. Textes et entretiens 1953-1974*, Minuit, 2002, p. 239. (ジル・ドゥルーズ「何を構造主義として認めるか」小泉義之訳、『無人島 1969-1974』小泉義之監修、稲村真実ほか訳、河出書房新社、2003年、60頁)
2. *Ibid.*, p. 244. (同書 67頁)
3. 『差異と反復』に結実する1960年代のドゥルーズの仕事は、ドゥルーズにとって記念碑的なものだった。「私に熱狂的な感動を与えたヒューム、ニーチェ、ニーチェ、ブルーストを研究した後、『差異と反復』は、私が「哲学すること」を試みた最初の書物となった」。Gilles Deleuze, « Préface à l'édition américaine de *Différence et répétition* », in *Deux régimes de fous. Textes et entretiens 1975-1995*, Minuit, 2003. (ジル・ドゥルーズ『『差異と反復』アメリカ版への序文』江川隆男訳、『狂人の二つの体制 1975-1982』宇野邦一監修、宇野邦一ほか訳、河出書房新社、2004年、157-158頁。)
4. Jean-Jacques Lecercle, "Preface," in *Gilles Deleuze's Logic of Sense: A Critical Introduction and Guide*, Edinburgh University Press, 2008, p. vii.
5. 鈴木泉「ドゥルーズ『意味の論理学』を読む——その内的組合せの解明」、『神戸大学文学部紀要』第27号、神戸大学文学部、2000年、47頁。
6. Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969, p. 7. (ジル・ドゥルーズ『意味の論理学』上、小泉義之訳、河出文庫、2007年、14頁)
7. Gilles Deleuze, « Note pour l'édition italienne de *Logique du sens* », in *Deux régimes de fous, op.cit.*, p. 60 (ジル・ドゥルーズ『『意味の論理学』イタリア語版への覚え書き』宇野邦一訳、『狂人の二つの体制 1975-1982』宇野邦一監修、宇野邦一ほか訳、2004年、87-88頁)
8. スラヴォイ・ジジエクによる露悪的な(?)『アンチ・オイディプス』批判と『意味の論理学』称賛も、読者に後者を敬遠させる一因となったかもしれない。Slavoj Žižek, *Organs without Bodies: On Deleuze and Consequences*, Routledge, 2004, pp. 21-22. (スラヴォイ・ジジエク『身体なき器官』長原豊訳、河出書房新社、2004年、51-52頁)
9. Gilles Deleuze, *Francis Bacon. Logique de la sensation*, Seuil, 2002, p. 34. (ジル・ドゥルーズ『フランス・ベーコン——感覚の論理学』宇野邦一訳、河出書房新社、2016年、44-45頁)
10. *Ibid.*, p. 33-34, n. 21. (同書 45頁、215頁註 21)
11. Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Qu'est-ce que la philosophie?*, Minuit, 1991, p. 154. (ジル・ドゥルーズ+フェリックス・ガタリ『哲学とは何か』財津理訳、河出文庫、2010年、274頁)
12. Gilles Deleuze, *Logique du sens, op. cit.*, p. 108. (ジル・ドゥルーズ『意味の論理学』上、前掲書、162頁)
13. *Ibid.*, p. 102. (同書 154頁)
14. *Ibid.*, pp. 88-90. (同書 134-137頁)
15. Joe Hughes, *Deleuze and the Genesis of Representation*, Continuum, 2008, p. 46.
16. そのひとつの解釈は、小倉拓也『カオスに抗する闘い——ドゥルーズ・精神分析・現象学』人文書院、2018年、112頁で提示している。
17. Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille plateaux. Capitalisme et schizophrénie 2*, Minuit, 1980, p. 20. (ジル・ドゥルーズ+フェリックス・ガタリ『千のプラトー——資本主義と分裂症』上、宇野邦一+小沢秋広+田中敏彦+豊崎光一

+ 守中高明訳、河出文庫、2010年、34頁)

※ 本稿は秋田大学令和元年度秋田大学若手研究者支援事業の支援を受けた研究成果の一部である。

【特集：『意味の論理学』を本質変形する】

海の原理とストア派——LS 動的発生論のストア派的読み換え

内藤 慧

0. はじめに

『意味の論理学』（以下 LS）は一般に、そのタイトルに則して「意味」ないし「出来事」、そして「表面」を巡る哲学が展開された著作とみなされている（1）。だが、例えば『アンチ・オイディプス』において「唯物論的精神医学」の重要概念である「器官なき身体」の初出が LS であることから明らかなように、LS の身体論・物体論的な側面は否定し得ない（2）。LS がエミール・ブレイエを経由したストア派由来の物体・非物体論を採用していることからして、非物体的次元と同様に物体の次元のプレゼンスは明らかなものと思われる。それではなぜ解釈上、「出来事」論の側面に力点が置かれるのか？これは何よりも、ドゥルーズ自身が一貫して、LS においてストア派の独創性を、非物体的なもの＝出来事の領域の発見として紹介しているからである（LS 第 18 セリー）。また、ドゥルーズが特に物体の深層領域として提示する第 1 次秩序を巡る議論は、明示的にはジゼラ・パンコフやメラニー・クラインによる精神分析の議論を参照しており、この観点からの第 1 次領域への分析は近年目覚ましい進展がみられる（3）。

しかし本稿としてはむしろ、ストア派のプレゼンスは第 1 次秩序と呼ばれる物体の深層領域にまで及んでいるものと考えたい。本稿が目指すのは第 1 次秩序における「器官なき身体」という物体の様態、およびそこにドゥルーズが導入する「海の原理」なる概念である。われわれはまず LS の基本的な構造を整理した後、第 1 次秩序がまずどのような物体的領域であるのか確認しつつ、そこにどの程度、どのような形でストア派のプレゼンスを認め得るのか、明らかにしたい。

1. LS の図式的整理

まず本稿の議論に必要な範囲で、簡単に LS という著作の基本的な図式を提示しておく。

LS は、基本的に 3 つの領域間で議論を展開している。

第 3 の配置から、第 2 の組織にまで遡らなければならない。その次に、力動的な要請に従って第 1 の秩序にまで遡らなければならない。（LS, 286）

①第 1 次秩序 *ordre primaire* : 物体的深層の混合状態。表面はここから形成されるが、また常に表面はここへと墮ちるリスクを孕んでいる。原初的な原因。②第 2 次組織 *organisation secondaire*: 表面とも言い換えられる、非物体的な出来事の領域。ここにおいて、実現の裏地としての反実現が成立し、思考が確保される。準一原因。③第 3 次配置 *ordonnance tertiaire* : 個体化され、命題によって指示される物体の領域。規定された「事態」。まず単に序数ではなく *primaire, secondaire, tertiaire*, という語が採用されている点に着目したい。これらの語はそれぞれ古生代・中生代・第三紀 (*Ère primaire, Ère secondaire, Ère tertiaire*) という地質学的な含意が認められ、そのことからある種の歴史的(人間的営みの範疇を超えた)な諸態勢として、この 3 領域が構想されていると考えることができる（4）。引用部にある通り LS の前半部(特に第 13 セリーまで)は、まさに第 3 次配置から第 2 次組織を浮上させ、さらに第 1 次秩序の存在を浮き彫りにする「遡り *remonter*」の過程として展開される。またそれが「遡り」である以上、事柄の順序としてはむしろ第 1 次秩序から第 2 次組織を経て、第 3 次配置へと至るとすることも明らかである。簡単に要約するならば、LS とは物体の深層のカオス的な領域(第 1 次秩序)から、規定され命題によって指示され得る経験の一般的な領域(第 3 次配置)が成立する歴史を、非物体的な出来事の領域(第 2 次組織)を介して考察するものだと言えるだろう。さて、この 3 つの領域について指摘される「物体」や「非物体的」とはどういうことなのか。ドゥルーズは LS 第 2 セリーにおいて、エミール・ブレイエに依拠しつつ、ストア派における物体と非物体的なものとの区別に言及する。

物体の厚みに対して、草原の霧のように表面でだけ上演される非物体的な出来事を対立させる時、ストア派は何を言わんとしているのか？物体の中、物体の深層の中にあるものとは、混合である。ある物体は別の物体に入り込み、そのあらゆる部分において共存する。海の中のワインの一滴、あるいは鉄の中の火のように。…混合は一般に、量的かつ質的

な事態を規定する。…しかし「拡大すること」「減少すること」「赤くなること」「緑になること」「切ること」「切られること」などによってわれわれが言わんとしているのは、別の事柄である。それはもはや事態や物体の底での混合ではなくて、混合に由来する、表面における非物体的な出来事である。(LS, 14-15)

まず物体として考えられているのは「混合」と、それが規定する量・質的な「事態」とである。まず簡単にストア派において、これらの語がそれぞれどのような事柄に対応しているのか確認しておきたい。ストア派の自然学において、物体は受動的な原理としての質料と、それに形を与える能動的な原理としてのロゴス＝神からなる(SVF, II, 300.=HP, 44B.)。前者に対する後者の働きかけから宇宙が構成される(SVF, II, 309-310.=HP, 45H)。さてここで、受動的原理としての質料と能動的原理としてのロゴス＝神は、後者が前者の内に混じり合っていると説明される(5)。しかし、同じく物体である2つの原理が相互浸透し混じり合うことがいかにして可能なのか？同じ座標上に異なる物体が同時に存在することがどうして可能なのか？これを説明するのが、この2つの原理の間に指摘される「混合」という状態である(SVF, II, 473.=HP, 48C)。例えば、大量の水に溶けたワインを油に浸した海綿を用いて抽出できる、という事例が説明するのは(SVF, II, 471.=HP, 48D.及びSVF, II, 473.=HP, 48C)、ワインと水とが同じ場所であって浸透しつつも互いの特性を維持し続ける、という「混合」概念の様態である。さて、2つの原理の結び付きを語る「混合」について、ドゥルーズはそれが「事態」を規定すると考える。確かに物体が量的質的な状態を持つのは、能動的原理と質料とが「混合」を成すことを通じて、ロゴス＝神によって質料が規定されるからだと考えれば、「混合」が「事態」を規定する、という説明はある程度理解できるだろう(6)。LSにおける物体にはこのように、量的質的な「事態」と、それを規定する「混合」とが考えられる。

「非物体的」と言われるものは、これらの物体とは徹底的に区別される。例えば「メスが肉を切る」という命題が指し示す事態を考えてみよう(7)。まずメスや肉はそれぞれ量的質的な物体であり、メスに肉片が付着しているという状態、肉が切られているという状態も同様に物体である。ところでブレイエによれば、メスと肉の物理的な接触、およびそこから生じた各々の新たな状態(肉片の付着、切られている)は、何か新しい物体(状態)を生み出しているわけではない。それではこの事態にとっての結果とは何なのか？ブレイエによれば、それはメスや肉、物体同士の運動から引き続く各々の物体の状態とは区別される、「切られる」とい

う、非物体的な「新たな属性」である(8)。この「新たな属性」はメスや肉に直接作用するものではなく、ドゥルーズはこれをある種理念的な「出来事」だと語っている。LS第8セリーで「理念的なプロテスタンティズムと現実のルター主義」という対比を挙げながら、ドゥルーズは量的質的に実現された事故と、それとは区別される理念的なものとしての「出来事」とを区別しつつ(LS, 68-69)、後者の領域を前者の産出に関わる超越論的領域として規定する。量的質的なものが経験的な次元に位置付けられ、対して超越論的なものがそれと類似しない、という教説は『差異と反復』を中心にドゥルーズ哲学の基本的な立場だと言えるが、LSにおいては物体と隔絶した「非物体的」なものというカテゴリーが、経験的なものと類似しない超越論的領域へと重ね合わされているのである。

ストア派並びにブレイエを経由してドゥルーズは以上に物体と、非物体的なものとを区別していたわけだが、これらは先に確認したLSの3領域とどのように対応するのか？まず、既に確認したように、第1次秩序および第3次配置は共に物体の領域であり、第2次組織は非物体的なものの領域とされる。第3次配置が物体における量的質的な実現の領域であり、第2次組織は出来事の属する超越論的領域に該当しているため、一見するとこれら3領域は徹頭徹尾ストア派的な物体・非物体論の観点から整理することができるように思われるかもしれない。しかしとりわけ第1次秩序を巡って、このような単純な対応関係を指摘することは難しくなる。序で言及した通り、第1次秩序を舞台に展開される「動的発生」論にあって、ストア派ではなく精神分析の枠組みが前面に押し出されていることから明らかのように、ストア派の自然学とドゥルーズが第1次秩序として描き出す物体的深層の世界は、そのまま対応しているとは言い難い。次章では、まず精神分析的な枠組みにおいて論じられる第1次秩序としてのカオス的な物体的深層の領域について、その構成を確認する。この中で本稿が目指す「海の原理」概念が登場する。

2. 第1次秩序と「海の原理」＝「湿の原理」の機能

さて、われわれは第1次秩序に関して、簡単にカオス的な物体的深層の領域として規定したが、ドゥルーズが明示的にこの領域に言及するのは第13セリー及び第27セリーである。本稿ではこの2つのセリーにおける当該領域を巡る記述を確認することで、まず第1次秩序とはどういう領域で、どのような構成になっているのか、整理する。その上で、そこで「海の原理」概念がどのような機能を果たしているのか確認する。

アルトー曰く、それは表面でしかない。アルトーの天才に命

を吹きこむ啓示、どんなに些細な分裂症者でも認識し、自分のやり方で生きている啓示とは、「自分には表面がない、もはや表面はない」だ。アルトーからみて、キャロルが底のあらゆる問題から保護され気取っている少女と映らぬはずがあるか。分裂症的な最初の明証とは、表面が裂けたということである。もはや事物と命題の間に境界はない。(LS, 106)

LS の議論は文学と密に結び付いており、先の3領域にはそれぞれ異なる言語的形態が対応させられる。ここでレイス・キャロルの詩や言葉遊び(例えばカバン語「スナーク」)は第2次組織、つまり表面ないし出来事の領域に対応し、第1次秩序に位置付けられたアルトーの言語がこれに対立させられている。ただの音声何がしかの言語として聞き取られるような、経験的な領域としての第3次配置が成り立つのは、事物と命題の間に境界があるからである。表面と呼ばれる第2次組織は、物体のみが存在する世界において、非物体的なものの領域、言い換えれば意味の領域を確保することで、この事物と命題の間の境界を設定し、われわれの一般的言語的な経験を成り立たせている。分裂症者アルトーに托される第1次秩序は、第3次配置を成り立たせる第2次組織である「表面」が、ない、という啓示によって特徴付けられる。それでは実際、「表面がない」領域とはどのような領域なのか? 第13セリーは、もはや物体と区別されない言語様態を2つ提示し、第1次秩序を描き出している。

①ざる (9) 状の身体 (寸断された身体)

分裂症的な身体の第1のアスペクトとは、ある種のざる状の身体 *corps-passoire* である。フロイトは分裂症者の特質として、表面と皮膚に無数の小さな穴が開いていると捉えることを強調していた。この帰結として、身体はもはや深層以外のものではなく、あらゆるものを、基礎的な退行を表象する大口の深層へと運び去り、捕えてしまう。一切が物体であり、物的であり、一切が物体の混合であり、物体の中へのはめ込みと浸透である。(LS, 106)

「表面がない」分裂症的な第1次秩序はまず、「ざる状の身体」として提示される。フロイトが「無意識について」で紹介する「表面と皮膚に無数の穴が開いている」という感覚を、ドゥルーズは表面をなくした第1次秩序における分裂症的な啓示として文字通りに捉える。つまり無数の穴が開き、ざる状になった皮膚はもはや一身体と他の物体とを事実上、言語上区別する境界としては

機能せず、それゆえにあらゆる物体は、相互に嵌り込み浸透する混合状態を呈することになる。その結果として第1次秩序においては、「いつも別の身体が、われわれの身体の内浸透し、その諸部分と共存する」と語られる。「ざる状の身体」として語られる第1次秩序の第1のアスペクトとは、言うなればカオス的な、一切の物体の混合状態である。そして、崩壊したのは身体表面であると同時に言語的表面でもあり、ドゥルーズは同時に言語の問題としてこの混合状態を記述する。ドゥルーズによれば、第1次秩序において「あらゆる語は物理的で、身体を直接触発する」(LS, 107)。例えば第3次配置において「やあ! ディオン。」という呼びかけの命題は(10)、ディオンの人物に差し向けられた言語として聞き取られる。ストア派はここに非物体的なものとしての「レクトン」の作用を指摘し、ドゥルーズはこの非物体的なものを第2次組織として、第3次配置の成立を物語るのだが、表面がなくなった第1次秩序においてこの命題は「yah·di·on」という音の連なりに解体され、もはや言語として聞き取られることはない。このように単なる音に解体された言語は、他の物体と同様に身体を直接的物理的に触発することになる。それゆえドゥルーズは第1次秩序に関して、「木や花が身体を貫いて伸びる」と語ると同時に、「語の断片が身体の内押し入る」とも語るのである(LS, 106-107)。このように、言語をも巻き込んだ物体のカオス的な混合状態、これが第1次秩序の第1のアスペクトとしての、「ざる状の身体」である(これは第13セリーにおいて「寸断された身体」*corps-morcelé* とも言い換えられており、本稿で以降両者を同じものとして扱う)。

②器官なき身体

このとき、分裂症者にとっての問題とは、意味を修復することよりも、常に裂けた表面の下にある深層にあって、語を破壊すること、情動を払いのけること、物体の苦しい受動を勝ち誇る能動へと変容させること、服従を命令にすることである。…今では勝利は、そこですべての文字価値、音節価値、音韻価値が、書かれることのない音調的価値によって置き換えられるような、語一息、語一叫びを創設することによってのみ獲得され得る。この音調的価値には分裂症的な身体の新次元としての栄光の身体、一切を送風、吸気、気化、流体伝動によって行方部分なき有機体に対応する(アントナン・アルトーの高次の身体 *le corps supérieur* ないし器官なき身体 *corps sans organes*)。(LS, 105)

さて、「寸断された身体」としての第1次秩序において、言語もろ

とも一切の物体が混合状態に陥った時、分裂症者にとって問題となるのは「意味を修復すること」、つまり事物と命題の境界を再建することではなく、「身体の苦しい受動を勝ち誇る能動へと変容させること」である。この問題設定の先に、「分裂症的身体の新しい次元」としての「器官なき身体」が位置付けられている。それでは、この「受動を能動へと変容させる」という操作はどのような事柄を指して語られているのか？語一息、語一叫びの創設、とは何を意味しているのか？ドゥルーズが参照しているのは、アルトーによるキャロルの翻訳の試みである。

この能動の方式は以下のものによって実践的に定義される。子音、喉音、有気音を過剰に詰め込むこと、内部省略記号と内部アクセント、呼吸音を入れること、音節を区切ること、一切の音節価と文字価を置き換える抑揚。語を分解不可能、崩壊不可能にするように、語によって能動を為すことが問題である。分節なき言語。ここで、セメントとは非一有機的な湿の原理、海のブロック、海の多量である。(LS,109)

アントナン・アルトーが、彼の「ジャバウオック」で *Jusque-là où la roughe est à rouarghe à rangmbde et rangmbde à rouarghambde*: と語るとき、問題となっているのは語を活性化し、語に息を吹き込み、語を滞らしたり燃やしたりして、語が寸断された身体の受動にならずに、部分なき身体の能動になるようにすることである。(LS,110)

« *Jusque-là où la roughe est à rouarghe à rangmbde et rangmbde à rouarghambde*: »とは、アルトーがレイス・キャロルの「ジャバウオック」を翻訳する中で、明確に文章構造を逸脱し始める点に位置する文章であり、キャロルの原文に対応する文章は存在しない。この文章が、「寸断された身体」に対置される「器官なき身体」としての分裂症的身体ないし言語の様態を示しているとされる。ドゥルーズが指摘するのは、この文章を構成する造語(例えば *rouarghe* や *rangmbde* など)に関する子音等々の「過剰な詰め込み」 *surcharges* であるが、この操作が目指しているのは、「語を分解不可能、崩壊不可能にする」ことであり、それが「分節なき言語」とも呼ばれる「器官なき身体」状の言語様態を形成すると考えられる。先に「やあ！ディオーン。」が「yah・di・on」に解体される、という例で示した通り、「寸断された身体」において語は他の物体と同様に、解体され、境界を失い、一切の物体との混合状態を呈するのであった。対して「器官なき身体」状の「分節なき言語」において強調されるのは、「分解不可能性」であり、ここに両者の対立点がある。つまり一口にカオス的

な物的深層といっても、第1次秩序にはバラバラに解体された「寸断された身体」と、分解不可能にされた「器官なき身体」という、対立する2つの極が認められるのだ。ところで、本稿では「器官なき身体」の分解不可能性を成り立たせる「セメント」として、「湿の原理」なる概念が登場することに着目したい。この語は直前の箇所では「海の原理」として登場しているが、一切の物体が断片的な「寸断された身体」と、「器官なき身体」の間、前者を経て後者が獲得される過程において、後者を特徴付ける「分解不可能性」の原因と目される以上、重要な概念だと考えられる。実際ドゥルーズは、2つの極を対置しつつ、以下のように述べる。

分裂症には、変質させる部分的混合と、身体を手付かずのままにする全体的で流体的な混合という、2つの物的混合の間のストア派的な区別を生きる仕方というものがある。流体的な要素ないし吹き込まれる流体の内には、「海の原理」である能動的混合の書かれざる秘密があり、はめ込まれた部分の混合に対置される。(LS,109)

「ざる状の身体」は部分的混合、「器官なき身体」は流体的混合に対応し、この2つの極の間には「ストア派的な区別」があるとされる。ドゥルーズは十分な解説を行っていないが、ストア派の物体論には受動的原理としての質料と、能動的原理としてのロゴスの対立がある。2つの極の「受動」、「能動」の対立が「ストア派的区別」と呼ばれているのは、このような事情によってであろう(11)。この流体的混合にとっての「書かれざる秘密」として「海の原理」が言及され、先に見たように、これが分解不可能性を生じさせるセメントと呼ばれているからには、少なくとも2つの極の間で「海の原理」が転換点を為していると考えべきだろう。つまり、これを介して受動的混合から能動的混合としての「器官なき身体」が成り立つ、というべきだろう。強く言えば、LSにおける「器官なき身体」の成立には、「海の原理」の存在は不可欠である。

一旦整理する。第3次配置を成り立たせる第2次組織たる表面は確固たる不変の秩序などではなく、この表面が崩壊した領域として第1次秩序は考えられる。アルトーになぞらえて分裂症的とも形容されるこの物体の領域には2つの極があり、その一方はまさに皮膚表面に無数の穴が開き「ざる状」になってしまった結果、語もろとも一切の物体が解体しバラバラになって混合をなす「寸断された身体」として提示される。対するもう一方の極は「器官なき身体」と呼ばれるが、それは特殊な操作を経て分解不可能性を獲得することで、「寸断された身体」において置かれていた諸々の物体の受動状態を、能動状態へと変容させることで獲得される

のであった。本稿ではこれから、第1次秩序における2つの極の間で機能する、「海の原理」ないし「湿の原理」に着目し、論述を進めたい。

3. 「海の原理」 = 「湿の原理」とストア派的混合

さて、「海の原理」を巡ってはいくつかの参照項が想定される。①キャロル翻訳の試みに関して、アルトー自身が「海の原理」という語に言及している(12)。:第13セリーにおける当該概念の参照項としては、最も直接的なものと考えられる。とはいえ本稿としては、文学的な参照項をどの程度哲学の文脈において価値付けてよいのか、という方法論的な問題に対して筆者は解答を持ち合わせていないため、扱わない。②メラニー・クラインに代表される「尿道期」のテーマ。:第27セリー以降、つまり「動的発生」論までを視野に、「海の原理」・「湿の原理」を説明するならば、まずクライン的な枠組みを採用することが自然に思われる。本章でも簡単に言及する。③ストア派における混合概念との関わり:本稿が強調したいのは、この立場である。ドゥルーズは「海の原理」を巡って、いかなるストア派のテキスト、ならびにストア派研究も参照先として明示してはいない。しかし第1次秩序の2極性を巡って「ストア派的区別」なる表現が用いられ、その直後に流体的混合の「書かれざる秘密」として「海の原理」が言及されている以上、本稿としてはストア派的な文脈からの説明を試みる価値はあるのではないかと考える。実際ドゥルーズ自身が言及していないとはいえ、ブレイエの『哲学史』にはストア派の物体論を巡って「海」を巡る記述が存在している。「器官なき身体」が「流

体的」混合と語られる点には、クライン的な尿道の主題と別に、ストア派的な「海」の主題を指摘することができると考えられる。本章はまず②の観点から、第1次秩序を精神分析的な枠組みに置き直して「海の原理」ないし「湿の原理」を巡る記述を整理する。その上で③の観点から、その背景に指摘されるストア派的な文脈を再構成し、LS全体におけるストア派のプレゼンスを見積もりたい。

まず前提として、ドゥルーズが第13セリー註10(LS, 111)においてジゼラ・パンコフ『身体像の回復』に言及している点を確認しておきたい。ここに、第1次秩序における2つの極の概念化に際して、パンコフが紹介する2つの身体像がベースになったことが窺える。その一方は「花の姿をとった人間の像」と呼ばれる、性的に未分化の身体と花と結合像であり、これに「対応する極」として胸部以下の存在しないのっぺらぼうの頭部像が紹介される。パンコフは前者の内に展開可能性を見る一方、後者には「何者かになるという可能性を失ってしまっている身体」という否定的な評価を与えている。つまりパンコフの議論において「器官なき身体」に該当する身体像は否定的にしか評価されていないのだが、上述の註においてドゥルーズはパンコフによる「器官なき身体(頭部)」に対する過小評価に批判を加えている(13)。パンコフとドゥルーズの間で、2つの身体像の価値付けは反転しており、このことから、2つの極がパンコフの2つの身体像に由来するとしても、「海の原理」を介した前者から後者への移行という議論を肯定的に論ずる観点を、パンコフに還元することはできない。



(パンコフ邦訳 p.107 及び p.115)

さて第27セリーを確認すると、ドゥルーズは「動的発生」論

の第1段階として、第1次秩序をメラニー・クラインにおける妄

想一分裂ポジションに引き付けて論じている。LS における妄想一分裂ポジションの定義とは「部分対象の世界」「シミュラクルの世界」である(LS, 218)。妄想一分裂ポジションの主人公は乳幼児であり、彼／彼女にとって世界に存在するものは摂取の対象としての食べ物だけである。とはいえ一切がニュートラルに価値付けされるのではなく、部分対象は幼児を養い、快を与えるか否かという規準で、善い対象と悪い対象とに区別される。もっとも、妄想一分裂ポジションにおいて幼児は差し出される諸々の部分対象を結合して、一つ的人格へと結び付けることはできないため、自身に快を与える善い対象を、それが存在しなくなり自身に快をもたらさなくなれば、悪い対象とみなしてしまう(14)。例えば乳の出る乳房は善い対象、出さなければ悪い対象であり、同じ一人の母親の部分としての認識は成立しない。加えてドゥルーズは、妄想一分裂ポジションにおいて、摂取されるものは等しく悪いものであると断定する。「完備なものだけが善いものであり、摂取はまさに無傷なものをそのまま存続させない」(LS, 219)とある通り、ドゥルーズはもはや善い対象を単に快を与えるものをとみなすのではなく、摂取され得ないものとして考える。つまりクラインにおける2つの対象の善悪が快を規準としているならば、ドゥルーズはこれを摂取の可否という規準から考えている。妄想一分裂ポジションが摂取される部分対象の世界であるならば、ドゥルーズにとって善い対象は端的に妄想一分裂ポジションの外に位置付けられると言えるだろう。そして、快不快から摂取へと軸をずらすことで、善い対象はもはや妄想一分裂ポジションの外に位置付けられるに際して、悪い部分対象に対置されるのは、一切の摂取を放棄した身体としての「器官なき身体」である(15)。「器官なき身体」は摂取を放棄し、悪い対象から身を守り、完全性を維持することで、妄想一分裂ポジションの外、高所に位置付けられた善い対象に対して、「完全性と統一性」という形態を与えることになる(LS, 221)。ここから抑鬱ポジションへの移行が可能となるため、動的発生論には「シミュラクルの世界」から「器官なき身体」への移行が論じられていると言える。このように、対象の善悪を巡って「摂取」に注目した読み換えがなされているとはいえ、「寸断された身体」から「器官なき身体」へのベクトルは、悪い部分対象と、善い対象に完全性を与える器官なき身体との対立に対応しているように思われる。

さて、それでは「動的発生」論において、「海の原理」ないし「湿の原理」の位置付けはどうなっているのか？ドゥルーズは摂取される部分対象と、摂取を放棄した器官なき身体との対立を以下のように言い換えている。

対立するのは2つの混合、すなわち硬く堅固だが、変質す

る断片の混合と、溶解し接着する特性を持つが故に、部分も変質もない完全な液体的流体的な混合である。(LS,220)

断片の混合は悪しき部分対象に対応し、かつ第13セリーにおける「寸断された身体」に対応する一方で、流体的な混合は摂取を放棄した「器官なき身体」に対応すると同時に、これは第13セリーにおいて「海の原理」をセメントとして分解不可能性を獲得した「器官なき身体」でもある。「動的発生」論では肛門期に対する尿道期の区別という観点から、尿が摂取による断片化を乗り越えるための「湿の原理」を立証するとされる(LS, 220)。しかし、クラインの議論のみからでは、なぜ2つの混合の間の移行を「湿の原理」が可能とするのか、立証することは難しい。そもそも、尿道期にこのようなカオス的な物体次元における意義を与える読み筋は、どこに起源を求めべきか。われわれはこれを、ストア派における「海」の主題へと連結したい。動的発生論においてストア派は後景に退いたかに見えて、実際のところ2つの混合の間の「書かれざる秘密」としての「海の原理」という観点こそが前提として機能しているのである。

さて、ストア派における混合とは、先述の通り、異なる物体間での相互浸透を説明するものであったが、この相互浸透が、互いの性質を維持したままに混合をなすという点がその独創性として指摘される。

それらがその通りである以上、ある種の物体もまた、その団塊が比較的小さくてそれ自体ではそれほど広がりつつ固有の本性を維持することができなくても、互いに助けを受け合うことによって、それ自体固有の性質とともに維持されつつ、全体が全体にわたって相互浸透する仕方、互いに完全に一体化していることに何の不思議もないと彼らは言うのである。それと同様に、柄杓に一杯のワインが大量の水で薄められても、水の助けを得て広範囲に延び広がるのだから。(SVF, II, 473.=HP, 48C)

ドゥルーズが「海の中のワインの一滴」として語ったのは、上記の断片に示された水とワインの関係についてであり、このように異なる物体が性質を維持したままに相互浸透することができるが故に、スポンジを用いてワインと水を分離することができる、とする断片も存在する(SVF, II, 471.=HP, 48D)。「海の原理」なる概念がストア派の以上のような混合概念を示唆しているとすれば、第13セリーにも、第27セリーにも登場する「流体的混合」という概念は、ストア派における上述の混合概念と一致すると考えてよいだろう。断片的な混合に対置される、分解不可

能性を獲得した混合とは、このような混合概念における相互浸透の教説の観点から読み解くことができるだろう。「寸断された身体」から「器官なき身体」の獲得、受動から能動への変様とは、このようなストア派的混合の獲得の試みだった、と言えるのではないか。

一つ注意すべきこととして、少なくともこれらのストア派の断片の原文において、ワインが溶ける先はあくまで水であって、それが「海」であるとは明言されていない。なぜドゥルーズはこれらの教説を「海の中のワインの一滴」として語っているのか？つまり「海」という文言はどこに由来するのか？本稿はここで、LSにおいて直接参照されているわけではないのだが、ブレイエの『哲学史』における以下の記述を提示したい。

ワインは、大量の水に混ぜられ、浸透する。たとえ大量の水というのが海の全体だとしても。(Histoire de la philosophie 1, Antiquité et Moyen Age, PUF, 1931. p.274.)

この記述では、上述の断片を参照先として提示しながら、ブレイエ自身によって「海」という文言が付け加えられている。そうすると、ドゥルーズ自身はストア派の原文ではなく、ブレイエの上述の記述を通じてストア派の混合を巡る教説を、「海」の主題の基に理解している、という推測が成り立つ。ストア派の物体論を「海」の問題として解釈すること自体が、ブレイエを通じて可能となる視点なのであり、かつこれがLSにおける「器官なき身体」として不可欠の項であるならば、改めてわれわれはLSにおけるストア派のプレゼンスを、出来事論や表面論を超えて認める必要があるだろう。第27セリーにおいてドゥルーズは註の中で、やや唐突に以下のような記述を残している。

器官なき身体と液体的な特殊性が結びつくのは、湿の原理が、断片がブロックになるのを保証するという意味においてである。例えばそれが「海のブロック」だとしても。(LS,220)

文脈としては肛門期と尿道期の差異を主張し、先のパンコフと同様にクラインをも批判する註であるが、ドゥルーズはここで「湿の原理」が保証する断片からブロックへの移行に関して、「海」という文言を付け加えている。まず「湿の原理が、断片がブロックになるのを保証する」という文言は、第13セリーにおいて語られた、「海の原理」をセメントとしてバラバラになった語が分解不可能性を獲得する、という事柄と同一のことを語っていると考えられる。さて、ここでブロックを巡って「海」なる文言が敢え

て付け加えられる理由を、精神分析の文脈から説明することは可能だろうか？「たとえそれが fût-ce」云々と「海」を付言するドゥルーズに、同じく「たとえそれが fût-ce」云々と「海」を付言するブレイエが重なりはしないだろうか？基本的に精神分析の枠組みにおいて展開する「動的発生」論の註に、唐突に登場した「海」の文言は、ブレイエを通じてドゥルーズの内に刻まれたストア派的混合概念の痕跡だとは言えないだろうか。そうであれば、第1次秩序における一つの極としての「器官なき身体」を理解する上で、例えばそれがどれほどに精神分析の枠組みにおいて語られているとしても、やはりストア派的混合概念のプレゼンスは疑いようもない。精神分析の用語のみを以って、LSにおける「器官なき身体」を定義するとすれば、当該概念の深い含意を見落とし単純化することになりかねないだろう。

4. まとめ

本稿が問題視したのは、LSを出来事論ないし表面論としてのみ評価する立場、そしてLSにおけるストア派のプレゼンスを、表面ないし超越論的領野を巡る議論へと矮小化する立場である。本稿はこれに対して、表面の破れた深層の物体領域である第1次秩序、そこにおける「器官なき身体」を巡る議論に、ストア派のプレゼンスをどれほど認めることが可能化、検証することを以って対立した。第1次秩序には対立する2つの極が見出され、その一方から他方へ、「寸断された身体」から「器官なき身体」への移行という論点が提示されていた。この移行に際してのキータームが「海の原理」であり、この文言は表面的にはクラインを参照項として解釈することができるが、その実態はブレイエを通じたドゥルーズのストア派受容に由来するものであった。それゆえ、この観点から、「器官なき身体」を巡ってストア派のプレゼンスを疑いようがない。

本稿は以下の補足的研究を必要としている。第18セリーから第21セリーにおいて、ドゥルーズは古代の自然哲学者たち、プラトン、そしてストア派をそれぞれに論じ、あたかもLSにおける3つの領域に対応しているかのように論ずる。深層、高所、表面というこの3つの領域は、しかし第1次秩序、第2次組織、第3次配置とは対応しない。とりわけ高所を巡って、このような単純な対応関係が認められないことは小倉2018、鹿野2020が指摘する通りである。われわれはこの箇所でもストア派に関して指摘される混合の概念と、深層に対応する自然哲学者たちの混合概念とがどのような関係にあるのか、これが「寸断された身体」と「器官なき身体」とにどのように対応するのか、という点を明らかにする必要があるだろう。

註

1. 例えば Igor Krtolika, 2015.
2. 本邦においても鈴木泉 2000.は既に LS の言語論が身体的ノイズの次元までを含むことを指摘しているし、また千葉雅也 2013.は LS 後半部の議論を「シニフィアンを失った身体の哲学の一種」と明言している。
3. Swiatkowski, 2015.や鹿野 2020.を参照。
4. これらの語の含意に関しては地質年代とは別に、第 1 次産業・第 2 次産業・第 3 次産業という含意を見て取ることもできる。いずれにせよ、単なるナンバリングという以上の含意を認めて然るべきだろう。 *Le grand Robert de la langue française*, deuxième édition, 2001. tome 5, p.1196. 及び tome 6, p.287-288, p.1151.をそれぞれ参照。
5. Michel J.White, 2003, p.133.
6. 実際にものを規定する役割を担うのはロゴス＝神であり、「混合」はロゴス＝神が質料を規定する際の仕方である以上、「混合」が「事態」を規定するというドゥルーズの解釈は、やや特殊なものだと言えるだろう。
7. HP,55D 参照。
8. Bréhier, 1908, p.11-13.
9. Passoire とは水きり用のボウルのことで、調理器具としては「コランダー」などとも呼ばれるが、日本語としては「ざる」という表現が馴染むのではないか。 *passoire* の訳語に関しては http://blog.livedoor.jp/kay_shixima/archives/52297205.html が有益な考察を行っている(2019/12/06 確認)。
10. ストア派の論理学が扱う命題とは、S is P 式の言語表現に限定されず、呼びかけや占い、呪いの類までを含む。また普遍的真理に関する命題以上に、限定的で真理値の変化し得る命題が事例として選ばれる。Susanne Bobzien, 2003, p.87. 及び Katerina Ierodiakonou, 2006, p.510.を参照。
11. もっとも、ストア派において受動と能動は原理の形容であって、混合の形容ではない。ストア派における混合は、この 2 つの原理の混合を意味している。このような論点を整合的に解釈するためには第 18 セリーから第 21 セリーまでの、ストア派を含むギリシャ哲学を巡る議論を再構成する必要があるが、これは別稿に委ねる。
12. Antonin Artaud *oeuvres*, p.927 post-scriptum (l'arve et l'aume)ならびに p.1013 ,lettres de rodez a henri parisot 22, septembre, 1945.
13. ジゼラ・パンコフ,1970. p.114.
14. Swiatkowski, 2015. p.36-37.
15. Swiatkowski, p.47

参考文献

- Stoicorum Veterum Fragmenta, 1, 2, 3*, edited by Hans von Arnim, Irvington Publishers, 1903-05.
- A. A. Long, D. N. Sedley, *The Hellenistic Philosophers, Vol. 1; Translations of the Principal Sources, with Philosophical Commentary*, Cambridge University Press, 1987.
- Igor Krtolika, *Deleuze*, PUF, 2015.
- Michel J.White, *Stoic Natural Philosophy (Physics and Cosmology)*, in *The Cambridge Companion to the Stoics*, 2013
- Émile Bréhier, *La Théorie des incorporels dans l'ancien stoïcisme*, Vrin, 1908.
- Émile Bréhier, *Histoire de la philosophie ; L'Antique et le Moyen Age 2, Preriode Hellénisutique et Romaine*, PUF, 1967.
- Susanne Bobzien, *Logic*, in *the Cambridge companion to stoics*, edited by Brad Inwood, Cambridge university press, 2003

Katerina Ierodiakonou, *Stoic logic*, in *A companion to ancient philosophy*, edited by Mary Louis Gill and Pierre Pellegrin. Blackwell Publishing Ltd, 2006, p.510.

Antonin Artaud *oeuvres*, 1945.

Piotrek Swiatkowski, *Deleuze and Desire: analysis of the Logic of Sense*, Leuven university press, 2015.

ジゼラ・パンコフ『身体像の回復—精神分裂病の精神療法』岩崎学術出版社,1970

千葉雅也『動きすぎてはいけない—ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』河出書房新社、2013年

小倉拓也『カオスに抗する闘い ドゥルーズ・精神分析・現象学』人文書院、2018年

鈴木泉「ドゥルーズ『意味の論理学』を読む—その内的組み合わせの解明—」『神戸大学文学部紀要』27、2000、p.47-76

鹿野祐嗣『ドゥルーズ『意味の論理学』の注釈と研究—出来事,運命愛,そして永久革命—』岩波書店、2020年

【特集：『意味の論理学』を本質変形する】

動詞的になること

——『意味の論理学』におけるアイオーンの現在にかんする文法論的考察

平田 公威

はじめに

ドゥルーズの『意味の論理学』は、その表題のとおり「意味」について論究する書物であり、その主軸をなすのは、物体と非物体的なものの二元論である。この二元論は、ストア哲学にもとづくものであり、意味は、非物体的なもののうちに数え入れられつつ、出来事や幻影などさまざまな概念とともに論じられている。しかしながら、私たち自身は物体であり、物体だけが実在的であるとするストア哲学にならい、ドゥルーズもまた、非物体的なものだけを取りだし、そこに身を置くようなことはしない。あくまでも、物体の側に視座を置いたうえで、非物体的なものへの思考に乗りだすのである。そこで、非物体的なものの物体への実現が論じられるのだが、それだけでなく、純粋に非物体的なものの思考も展開されている。これは、物体の側から、純粋に非物体的なものを思考するという困難な試みである⁽¹⁾。

この論文では、こうした試みのなかで論じられる、アイオンとよきクロノスという異質な二つの時間に着目したい。端的に言えば、これらの時間は、純粋に非物体的な時間と、物的になった非物体的な時間である。ドゥルーズは、これら二つの時間にそれぞれ不定法と（直説法）現在形という文法モデルを与え、それらの両立不可能性を論じているのだが、それにもかかわらず、アイオンに属する第三の現在があるという。本稿では、アイオンとよきクロノスに文法的なモデルが与えられているように、この第三の現在にも対応するモデルがあると考え、文法論的な考察を試みる。結論から言えば、複合過去こそが第三の現在に相当するモデルであり、この時制において異質な二つの時間が複合されていることを示す。これにあたり、まずは、ストア哲学の二元論と時間の関係について確認し、ついで、時制が表わす時間への文法論的な考察を介したうえで、複合過去への分析を行いたい。

1. 物体と非物体的なもの、三つの時間について

ストア哲学では、原因になりうるものが物体として定義され、唯物論的な思考が展開されているのだが、その一方で、原因から

派生するが新たな原因になることのない結果＝効果（effet）として非物体的なものが論じられている⁽²⁾。たとえば、ある物体が原因となって私に作用するとき、私の精神のうちに、「カトーが歩く（Kato marche）」といったかたちでの認識が形成される。眼前の物体は、「歩く（marche）」という動詞により分節されることで認識されるのだが、この認識それ自体が原因となって物的に作用することはない。ここに、新たな原因になることのない結果＝効果として、非物体的なものが認められるのである。

こうしたストア派の二元論にならい、『意味の論理学』では、物体の運動と、非物体的なものの関係が論じられているのだが、ドゥルーズは、この関係を時間論として整理している。先ほどの「カトーが歩く（Kato marche）」という例で言えば、直説法現在形の動詞「歩く（marche）」は、物体の運動をひとつの行為として測定し、実際にその運動が継続する時間を表わす（cf. LS 190/上 283-284）。この「歩く（marche）」がなければ、近い過去と近い未来からなるまとまった時間、すなわち「時期（moment）」が形成されることはなく、ただ物的運動が次の原因へ次の原因へと送り返されるのみであり、その都度、「今（maintenant）」として示されるしかない「狂気-生成」があるのみである（LS 192/上 285-286）。『意味の論理学』では、こうした「測度＝節度（mesure）」をもたない時間が「悪しきクロノス」と呼ばれ、現在形の動詞により限定される時間が「よきクロノス」と呼ばれる。

これら二つの時間は、いわば、物的でしかない時間と、非物的に分節された物的な時間であるが、どちらも実在的な時間であるために現在と呼ばれている。これらに加えて、ドゥルーズは、「アイオン」と呼ばれる純粋に非物体的な時間を提示している。この時間は、「時間の空虚な純粋形式」（LS 194/上 288）と形容され、物体の運動に還元されることがなく、不定法の動詞によって表されるという。たとえば、「歩くこと（marcher）」は、純粋に観念的なものを表わしており、それを物的に捉えることはできない⁽³⁾。「歩くこと（marcher）」は、カトーの歩きや猫の

歩きといった実現の水準にある物体の運動とは本性を異にする何かを表わすのである。要するに、アイオンという時間は、非物体的なものであるために、現在形の動詞で表象されるよきクロノスとは同一視されず、不定法のようなかたちで表わされるのである。ドゥルーズは、よきクロノスとアイオンにかかわる認識の様態を区別して、同定作用としての「表象」と、同定不可能なものにかかわる「表現」に整理している (cf. LS 170/上 252)。「カトーが歩く (Kato marche)」という現在形の表象は、物体的に同定可能な対象にかかわっており、「歩くこと (marcher)」という不定法の表現は、そのように同定されることがない非物体的な何かを表わすというのである。

このように、アイオンとは、決して現在にならない純粋に非物体的なものである。しかしながら、ドゥルーズはアイオンに属する現在があると論じる。

クロノスの二つの現在、根底からの転覆の現在〔悪しきクロノス〕と形態への実現の現在〔よきクロノス〕のあいだに、第三の現在があるし、アイオンに属する第三の現在があるはずである。(LS 196/上 292)

この引用に続く箇所では、表現そのものと表象の本性的差異が指摘されながらも、「〔……〕表象はその縁で表現を包むことができる〔……〕」(LS 196/上 292)とも述べられている。現在化されるはずのないアイオンに属する現在や、異質であるはずの表現を表象が含むことなど、きわめて興味深い論点が提示されているのだが、ドゥルーズはその内実をあまり明らかにしてはいない。そこで、以下では、よきクロノスとアイオンが現在形と不定法という文法的なモデルによって説明されるように、第三の現在にも対応するモデルがあるとして考察を進たい。具体的には、ドゥルーズが第 22 セリーで取り上げている複合過去に、第三の現在が見いだせることを示す。すなわち、複合過去が、現在化されることのない非物体的な時間の表現としての過去分詞を要素にもつ、特殊な現在形であると論じる。しかしながら、ドゥルーズは、アイオンを表わす時制としては不定法に言及するばかりで、過去分詞にはほとんど言及していない。そのため、ドゥルーズが動詞の活用を論じるにあたって依拠している言語学者、ギュスターヴ・ギヨームの言語論を糸口として、複合過去への検討に入りたい⁽⁴⁾。次節では、この言語学者があまり知られていないこともあるため、その言語論を概略する。

2. 時間発生論について

ギュスターヴ・ギヨーム (1883-1960) は、言語の潜在的状態

から現働的な「語り (discours)」への移行に着目しており、その独特な文法理論では、実際の言語運用にあたっての話者の心的運動が記述されている。ギヨームによると、語はラングのままでは、いかなる品詞ももたないため、語りに入るためには、他の語と統合されつつ、特定の品詞を担わなければならない。そこでギヨームは、「活用」(conjugaison) という操作によって、話者が語に対して特定の品詞を与え、言語の潜在的な状態からの現働化がなされると考えており、とくに、語を動詞にする操作では、時間のイメージが付加されると論じている⁽⁵⁾。たとえばフランス語では、活用により付加される屈折語尾が、語に付加される時間に相当すると考えられている。そのため、形態論的分析は、言語操作により発生する時間のイメージを明らかにするとみなされるのである。

ギヨームによると、動詞の活用による時間イメージの発生、すなわち「時間発生 (chronogenèse)」には進捗があり、これは話者の心的運動の時間の長さ に比例する。ギヨームは、この時間発生 の段階に対応させて、フランス語動詞における「時制」を三つの叙法に分類している。その分類によると、操作時間の短い順(つまり時間発生が進んでいない順)に、「準名詞的叙法 (mode quasi-nominal)」(不定法、現在分詞、過去分詞が含まれる)、「接続法 (mode subjonctif)」(接続法現在、接続法半過去)、「直説法 (mode indicatif)」(直説法現在形、単純未来、仮定的未来(いわゆる条件法)、単純過去、半過去)と分類される。このうち、時間発生の最終段階に位置づけられる直説法において、時間のイメージは最も完成しており、この叙法だけが、実在的な現在という「時 (époque)」をもち、その現在をもとに形成される過去と未来という時もそなえている。ギヨームは、このような完成された時間イメージにもとづいて、各々の時制を説明するのではなく、それに至る時間イメージの発生を説明しようと試みている。

まず、準名詞的叙法の不定法であるが、これは、完了されていない過程(行為や状態変化)を表し、純粋な過程の「遂行 (accomplissement)」を表す。ここでは、過程の遂行は来たるべきものにとどまっており、過程の展開は開始されないままに表される。第二に、現在分詞においては、過程の展開はすでに開始しており、その完了は見込まれているが、その過程にはいまだ残りがあつたものとして表される(展開される行為や状態変化がイメージとして残っている)。そのため、過程の遂行と完了への見通しがともに表わされている。第三に、過去分詞は、過程の純粋な「完了 (accompli)」を表し、過程の展開が終わつたもの、完了しきつたものを表わす⁽⁶⁾。特に、過去分詞には遂行のイメージが全く残されていないため、ここから新たなイメージを引き出すことはできないとされる(以上、図 1 参照)。

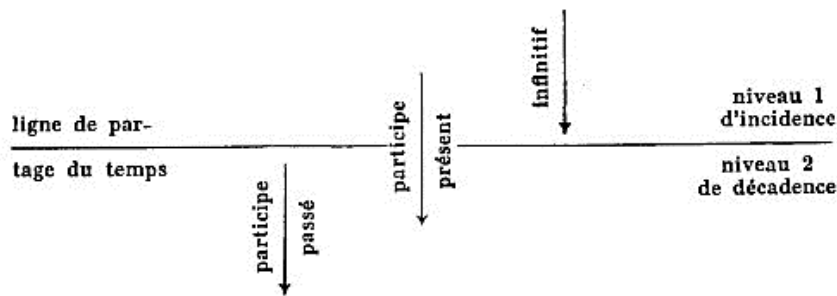


図1 (Époques, p. 255)

ギヨームによると、準名詞的叙法は、直説法現在形や半過去などの時制が表わす「時」に無関心であり、時としての資格をそなえていない。実際にフランス語では、不定法、現在分詞、過去分詞が他の時制に後続して用いられるが、これは準名詞的叙法が各々の時に無関心な過程を表わすためである⁽⁷⁾。つまり、この叙法で問題になっているのは、過程の遂行や完了にかかわるイメージだけなのである。とくに、不定法では、遂行ははじまってさえおらず、また、過去分詞にいたっては、動詞的な質が尽きてしまっているため、動詞としては「死んでいる」⁽⁸⁾とさえ言われる。また、現在分詞は、過程の遂行と完了の見通しをともに表わすのだが、人称が挿入されていないため、いかなる動作主もたず、いかなる具体的な表象も与えないのである。

次の叙法は、接続法（接続法現在、接続法半過去）である。ここでは、準名詞的叙法よりも時間発生が進んでおり、人称が挿入されることで、より具体的な仕方で過程が表わされている⁽⁹⁾。しかしながら、ここにもまだ「実在性 (réalité)」がないため、叙法

としては可能な過程を表象するにとどまっており、現在という実在的な時により区別される未来と過去という時も発生していない。この叙法では、準名詞的叙法で生じた二つの水準に親和的な、二つの時間の方向性（いわゆる未来と過去の方向）だけが表されるにとどまっている。すなわち、この叙法で生じるのは、「到来しつつあるが、まだ来てはいない (arrivant, non encore venu)」という到来が仮定されるものへ向かう「上昇する方向 (sens ascendant)」と「過ぎ去ってしまった s'en est allé」という実在的なものへ向かう「下降する方向 (sens descendant)」なのである⁽¹⁰⁾。このように、接続法では、これから到来するかもしれない可能的な行為（「彼が明日来るとは思わない Je doute qu'il vienne demain」⁽¹¹⁾）と可能であったかもしれない行為（「彼は私が M と知り合いになることを望んでいたのではなかったか N'avait-il pas voulu que je connusse Marthe」⁽¹²⁾）だけが表されるのである（以上、図2参照）。

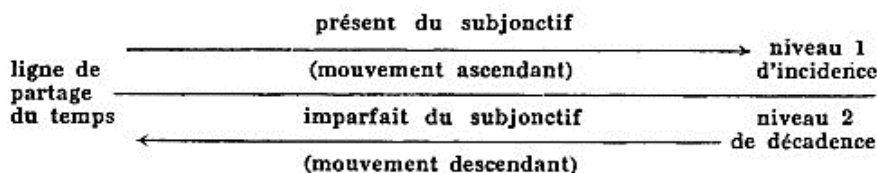


図2 (Époques, p. 264)

最後の叙法は直説法である。この叙法で、はじめて、現在という実在的で限定された時が挿入される。この現在は、その「位置 (position)」によって、直線的な時間のイメージを未来と過去という時に分割するのだが、そのさい、接続法で発生した二つの方向性が反映されている。また、ここで重要なのは、現在が、未来と過去の「小部分 (parcelles)」を要素としてもつという「構成 (composition)」の側面からも論じられていることである⁽¹³⁾。ギヨームの考えでは、現在とは、直線を区切る点のようなものではなく、未来寄りの現在 (クロノタイプ α) と過去寄りの現在 (クロノタイプ ω) という二つの水準をもつのである。この二つの水準は、準名詞的叙法から引き継がれたものである⁽¹⁴⁾。ギヨーム

によると、現在を位置と構成から捉えることで、未来と過去という時を表す時制がフランス語にはそれぞれ二つあるという事実を説明できるという⁽¹⁵⁾。すなわち、現在の位置により、直線的な時間が未来と過去という時に分割され、さらに、現在の二つの水準に応じて、各々の時が二通りの仕方で表されるのである（以上、図3参照）。たとえば、未来に近い現在からは単純過去が得られ、過去に近い現在からは半過去が得られる。未来に近い現在から構成される単純過去は、過去に本来的な実在性を表わすのだが、ここでは、ただ起こったという事実それだけ（遂行の実在性）が表わされる。これに対して、過去に近い現在からは、完了したことの実在性が表わされるのだが、ここでは、より実在性の増した

過去が表わされるのである（以上、図3参照）⁽¹⁶⁾。

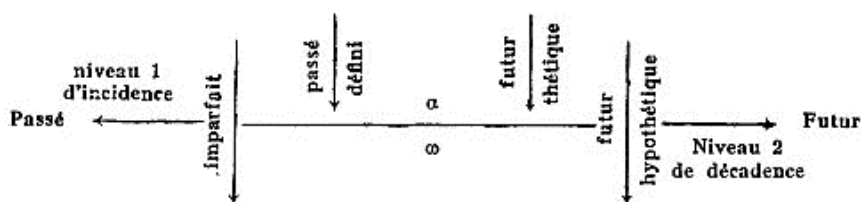


図3 (*Époques*, p. 267)

時間発生の進展は、おおよそこのようにまとめられるのだが、本稿の関心にしたがって言えば、このうち、準名詞的叙法は、ドゥルーズの言うアイオンに対応すると考えられる。すでに述べたように、この叙法に属する時制はいかなる人称ももたないため、主語となる物体の運動によっては表象不可能な過程が表わされる。ギヨーム自身が準名詞的叙法を「非人称的」⁽¹⁷⁾と形容しているのだが、そのことを文字通りに理解するならば、この叙法の時制（不定法、現在分詞、そして過去分詞）は、アイオンのように、物的な仕方では表象されることのない時間を表現するのである。とりわけ、不定法は、遂行以前の過程を表わすとされるため、動詞としての質を完全に保ったままであり、時間イメージの母胎とみなしうる。このことが理由で、ドゥルーズは不定法を特権視しているようにも思われる。とは言え、本稿にとって重要であるのは、過去分詞が、物的には表象不可能な完了そのものを表わすということと、それが、直説法に属する過去という時とは全く異なっているということである。次節では、『意味の論理学』における複合過去の分析を考察するが、そこで問題になるのもまさにこれらの点である。

3. 複合過去としてのアイオンの現在について

それでは、ドゥルーズは複合過去をどのように記述しているのだろうか。ドゥルーズは、当該のテキストにおいて、フィッツジェラルドやラウリーのアルコリズムを取り上げているのだが、それを物理的原因に起因する依存症とはみなさずに、次のように述べている。

アルコリズムは、快楽を探求しているのではなく、効果を探求しているように見える。その効果は、主として、現在が異常に硬化することである。だから、同時に二つの時間に生き、同時に二つの時期に生きることになる。{……} 同時的な二つの時期は、奇妙な仕方では複合される。すなわち、アルコール飲みは、半過去や未来を生きるのではなく、複合過去しか持たないのである。ただし、極めて特殊な複合過去である、

アルコール飲みは、酔いを材料にして、想像的な過去を複合する。まるで、柔らかな過去分詞が、固い助動詞現在形に結合しに来たかのように。私はもっている-愛したことを〔J'ai-aime〕、私はもっている-行なったことを〔J'ai-fait〕、私はもっている-見たことを〔J'ai-vu〕。(LS 184-185/上 274-275)

ドゥルーズは、作家フィッツジェラルドのアルコリズムが、非物的な結果=効果の探求であると捉え、アルコール飲みの実践を複合過去のモデルによって説明している。すなわち、アルコール飲みが酒を飲むのは、現に「飲んでいる ((Je) bois)」という状態に入るためではなく、「飲んだこと (bu)」という結果=効果を得るためだというのである。ドゥルーズにしたがえば、複合過去「私はもっている-飲んだことを (J'ai-bu)」が表わすのは、現在まさに飲んでいることでも、かつて飲んでいたことでもない。いくら飲もうとも「飲んだこと (bu)」は実現せず、「飲んでいる ((Je) bois)」という現在が「飲んでいた ((Je) buvais)」という古い現在になってしまうだけである。だからこそ、アルコール飲みは、かろうじて、その結果=効果を現在においてもつことしかできないのである。しかしながら、この試みも一時的な成果を収めることしかできず、たちまち、この結果=効果の時期としての現在それ自体が過ぎ去ってしまう。アルコール飲みが取り組んでいるのは、決して現在になることのない時間を生きるという困難な探求なのである。

こうしたドゥルーズによる分析は、明らかに、前節で確認したギヨームの時間発生論と論点を同じくしている⁽¹⁸⁾。すなわち、過去分詞は、半過去や単純過去のような時制とは全く異なる時間を表わしているのである。そして、本稿にとって重要なのは、現在になることのない過去分詞の時間が、助動詞の現在形と両立可能なものとして提示されていることにある。つまり、複合過去の形成において、アイオンの時間に属する現在が見いだせるのである。しかしながら、ドゥルーズは、複合過去の形成という文法的操作についての考察や、第三の現在の文法的なモデルを明示し

てはいない。そこで、ギョームの時間発生論を参照しつつ、アイオンの現在について文法的に考察しよう。

ギョームは、過去分詞を用いて形成される複合過去を、過去時制のひとつに数える伝統的な解釈に反対し、独自の解釈を提示している。すでに論じたように、時間発生論では、過去分詞は、過去という時ではなく、「完了したこと」という「相 (aspect)」を表わすと考えられている⁽¹⁹⁾。したがって、そのような過去分詞を用いる複合過去も、過去という時を表わさずに、ただ相としての完了を表わす現在形のひとつとみなされるのである。

重要な論点であるため敷衍しておこう。すでにみたとおり、準名詞的叙法に属する過去分詞は、純粹に行為の結果=効果を表わすだけであり、そこから過程のイメージを引き出すことができない⁽²⁰⁾。たとえば、「歩くこと (marcher)」の直説法半過去「私は歩いていた (Je marchais)」が、過去という時を表わすのに対して、「歩いたこと (marché)」は、すでに完了してしまったということのみを表わしている。複合過去は、かつて実在した行為を表わすのではなく、過ぎ去ってしまったという観念、「歩くこと (marcher)」の「観念的な帰結」⁽²¹⁾を表わすのである。このように、過去分詞には動詞としての質が残されていないため、これを動詞として用いるためには、その質を回復させる必要がある。そこで、過去分詞に、新たな動詞を付け加えるという操作がなされる。つまり、「もつこと-歩いたことを (avoir-marché)」というひとつの動詞が作られるのであり、その動詞が直説法現在形として活用されることになる。そのため、ギョームにしたがえば、複合過去は、「操作的に (opérativement)」現在に属しながらも、「結果的に=結果相として (résultativement)」過去を表現する時制なのである⁽²²⁾。

おそらく、ギョーム自身は複合過去を素朴に理解しているのだが、時間発生論では、過去分詞が特定の過去を表わさずに、完了そのものを表わすと理解されるため、そのままドゥルーズの記述と接続可能である。すなわち、複合過去とは、現在になることのない空虚で形式的な過去を、現在において表現しているのである。まさしく、操作のうえで、現在に属する複合過去は、ドゥルーズが言うところの、第三の現在としてのアイオンに相応しいだろう。

さらに着目したいのは、複合過去の形成にあたり、操作上、付加される動詞の形式性である。この動詞「もつこと (avoir)」のおかげで、現在化されることのない純粹に観念的な過去が表わされるわけだが、この動詞は、決して「私はリンゴを持っている (J'ai une pomme)」のような具体的な過程、動作を表象するものではない。つまり、かりに複合過去を形成する「もつこと (avoir)」がそれだけで実現されることがあったとしても、それは、物体的

に表象されることがなく、動詞を測度としてもつような現在、出来事の実現の時期としてのよきクロノスとは異なるであろう。あくまでも、「もつこと (avoir)」とは、操作上、形式的に必要とされるに過ぎず、動詞としては無-意味なのである（悪しきクロノスのような無意味ではなく、表現性をもつかぎりで）⁽²³⁾。このことは、たとえば、役者やパントマイム師にとっての動詞「演じること (représenter)」が、たとえ実現されようとも、具体的な事物の状態には無関心であることと等しいだろう。複合過去の形成にあたって、アイオンの時間の表現を可能にするまでに、動詞は抽象化され、形式化されるのである

そうであるからには、複合過去の形成という文法的操作は、その主語である「私 (Je)」もまた、特定の動作主のままにはしておかないだろう。つまり、「私 (Je)」は、出来事を実現している事物の状態として同定されるものではなくなるのである。というのも、過去分詞とそれに付け加えられる動詞は、どちらも特定の過程を表わすことがないためである。たとえば、「飲んだこと (bu)」の主語となる「私 (Je)」とは、「酩酊している ((Je) m'enivre)」ところの「私」とは区別されるべきである。もちろん、前者の表現的な「私」は、現に「酩酊している」私として表象され、特定の事物の状態と同一視されてしまう可能性はある（「はじめに」で述べたように、私たちはあくまでも物体でしかない）。しかしながら、複合過去における「私」とは、物體的な動作者には還元されないのである。準名詞的叙法の非人称的な時間を表わす「私 (Je)」は、接続法や直説法のように具体的な過程の表象を可能にする人称とは異なるものとして理解されうる。過去分詞に付け加えられる動詞「もつこと (avoir)」がそうであるように、主語の位置を占める「私 (Je)」もまた、あくまでも操作の上で必要とされるだけの形式的なものになってしまう。ちょうど、「雨が降る (Il pleut)」という表現において形式上挿入される非人称的な「彼 (Il)」のように⁽²⁴⁾。

おわりに

私たちは、日ごろ、表象を形成し、物體的に物事を同定することで認識している。本稿で考察した直説法現在形とは、こうした経験的な認識にかかわっており、実在的な時を表象するものである。すなわち、この時制は、「実在的な物理的時間に応じて、指示可能な事物の状態とかかわっている」(LS 215-216/下 21-22)のである。ドゥルーズは物体の側に名詞や形容詞を割り当てているのだが、そのことに鑑みると、直説法現在形とは、動詞の名詞的な表象と呼ぶべきものである。これに対して、本稿で取り上げた複合過去の形成にあつては、現在という実在的な時間が、アイオンとしての現在になってしまう。過去分詞は現在化されない

過去を表わすが、その非物体的な時間を表現するほどまでに、現在は形式化され、さらに、人称は非人称化される。まさに、「鏡ほどの厚さもない空虚な現在が、限りなき過去-未来を映し出す」(LS 176/上 261) ののであるが、そのとき、現在や人称は、もはや物体的な表象ではなく、「何か」と言われるしかないものの表現になってしまう。動詞というものが本来的に非物体的なものであることに鑑みれば、複合過去の形成という文法的操作によって、言語的表象は動詞的になるのである⁽²⁵⁾。

このように、言語的表象が動詞的になることで、非物体的なものがその純粹さにおいて表わされるようになる。非物体的なものは、物体の運動によって発生し表現されるが、本稿でみたのは、非物体的な仕方での表現を導く操作である。ここには、原因の「曲用」(déclinaison)ではなく、結果=効果の活用の方へとストア派の実践を展開していく『意味の論理学』の方角決定がある(cf. LS 19/上 25)。本稿では、この方向=意味の行き着く先を十分に辿ることはできないが、物体的な現在から出発して非物体的な現在を思考することの意義について、簡潔に考察して論を閉じよう。

これまで、本稿では非物体的なものの側面を論じてきたが、『意味の論理学』ではストア哲学の二元論が採られている以上、私たちはそもそも物体でしかありえない(動的発生の要点はここにあると言えるだろう)。「はじめに」でも述べたように、物体の側にとどまりながら、非物体的なものを思考することがあくまでも問題なのであり、物体的な原因性こそが、出発点であり到着点である。たとえ、「私は飲んだ」という表現が形成されるにしても、アルコールを摂取するといった物体的な原因性から出発するしかないのであり、さらに言えば、そのような操作がなされるからといって、「私は酩酊している」という物体への実現がなくなるわけでもない⁽²⁶⁾。むしろ、活用とは、こうした実現や、実現を導く原因との関係で捉えられるべきなのであり、端的に言えば、物体的な原因性を非物体的な原因性で二重化する操作として理解されるべきである。

すでに述べたことではあるが、非物体的な出来事は、物体のうち実現されることで表現される。不定法の動詞が現在形に活用されるように、それとしては空虚な形式である出来事が、物体の運動において変形されつつ実現されるのである。つまり、実現による出来事の表現は、物体的な原因性なくしてはありえない。そして、ここでは、非物体的なものは、物体の運動あるいは物体的原因性にしたがうことになる(cf. LS 198/上 294)。たとえば、アルコールを摂取するという原因により、「私は酩酊している」

が実現されるのである。これに対して、『意味の論理学』では、物体的な原因性にしたがわない仕方での、非物体的な仕方での表現も論じられている。ドウルーズが念頭に置いているのは、まずもってストア派による接続詞の分析であり、たとえば「明ければ、明るくなる」といった複合命題では、異なる二つの出来事の相互的な表現がなされているとみなされる。ドウルーズは、こうしたストア派の議論の延長上でライプニッツを解釈し、相互表現しあう出来事の間を「共立可能的」とみなし、その不成立を「非共立可能的」と定式化している(cf. LS 200-201/上 297-299)。そして、このような表現関係は、物体的な原因性から区別されて、「準-原因」と呼ばれることになる。このことに鑑みれば、複合過去の形成とは、物体的な仕方での表現と、非物体的な仕方での表現を相互表現の関係に置く操作として理解できるだろう。すなわち、物体的に実現される「私は酩酊している」に、「私は飲んだ」という非物体的な表現を伴わせるのである。私たちが物体的な原因性や実現という契機から離れることはありえないにしても、結果=効果の活用は、準-原因という別の秩序をもたらすのである。

まとめよう。活用という文法的な操作において、「私」は非物体的な表現の「操作者」として、準-原因との同一化を果たす(cf. LS 171-173/上 254-257)。しかしながら、そのときにも、作用し作用される物体的な原因性から離れてしまうことはできないし、むしろ、原因の連鎖こそが表現されるべき出来事を準備している(cf. LS 172/上 256)。要するに、「準-原因は創造せずに、「操作」するのであって、到来するものを意志するだけである」(LS 172/上 256)。問題なのは、物体的な原因性の連鎖に巻き込まれて、実現されるがままに出来事を引き受けるのではなく、非物体的な原因性によって、すなわち「精神的な意志」(LS 175/上 260)によって出来事を実現へ導くことなのである⁽²⁷⁾。本稿の議論に即して言えば、「私は飲んだ」を形成することは、この表現と「私は酩酊している」という表現を両立可能なものにするのであり、ほかでもない「私が酩酊している」ことを意志することにほかならないのである。このとき、原因により紡がれる連鎖に、準-原因が介入し、新たな仕方での実現が再開するのであり、第三の現在としてのアイオーンが、瞬間という身分で、「これまで」と「これから」を分かちにくる。動詞的になることとは、非物体的な表現になることであるが、それは、経験的な物体の世界を捨て去り、非物体的なものへと上昇することではない⁽²⁸⁾。私たち、地を這うものに翼は必要ない。ただ、地上という表面に生きる術を学ぶのである⁽²⁹⁾

* ドゥルーズの著作の参照にあたっては、次の略号を用い、「原文／邦訳」の順で頁番号を指示する。なお、引用に際して邦訳がある文献はそれを参照したが、一部表現を変更したものもある。また、〔 〕内は引用者による。

LS = Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969/ ジル・ドゥルーズ『意味の論理学』上下巻、小泉義之訳、河出書房新社、2007年。

註

1. この問題に取り組む研究として、「非物体的マテリアリズム」を論じる江川隆男「出来事と自然哲学——非歴史性のストア主義について」『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』所収、月曜社、2006年がある。この論文では、「意味されるもの」と「表現可能なもの」が批判的に区別されたうえで、言語の経験的使用、表象言語が退けられ、「ドラマの言語」が論じられている（cf. 同上、189頁）。そこでは、身体からの非物体的効果（「クリュシッポス効果」）が取り上げられているのだが、本稿では、言語活動の側からの表現の可能性を模索する。
2. たとえば、次の一節を参照されたい。「このように彼らは、精神のうちにある程度それ〔非物体的な性格〕を認めたが、実在的な存在者からはそれを排除したのである」（Émile Bréhier, *La théorie des incorporels dans l'ancien stoïcisme*, Vrin, 1908, p. 12/ エミール・ブレイエ『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』江川隆男訳、月曜社、2006年、26頁）。
3. 不定法により表わされる出来事と、現在形で表される物的に実現された出来事の違いについては、たとえば第9シリーズでの記述（LS 68-69/上 106）などを参照されたい。
4. 『意味の論理学』におけるギョーム受容については、拙論『『意味の論理学』における動詞と時間——ドゥルーズにおけるギョーム言語論の受容について』『フランス哲学・思想研究』第22号、2017年を参照されたい。なお、この論文の内容と、次節の記述がいくらか重なっていることを断っておきたい。
5. Cf. Gustave Guillaume, « Comment se fait un système grammatical », *Langage et science du langage*, Presses de l'Université Laval, 1964.
6. 以上については、Gustave Guillaume, « Époques et niveaux temporels dans le système de la conjugaison », *Langage et science du langage*, Presses de l'Université Laval, 1964, p. 270（以下、*Époques* と表記）を参照。
7. Cf. Gustave Guillaume, « La représentation du temps dans la langue française », *Langage et science du langage*, Presses de l'Université Laval, 1964, p. 192.（以下、*Représentation* と表記）
8. *Époques*, p. 267.
9. Cf. *Représentation*, pp. 194-196.
10. *Époques*, p. 264.
11. 朝倉季雄『新フランス文法事典』木下光一校閲、白水社、510頁、強調引用者。
12. 同上、511頁、強調引用者。
13. *Époques*, pp. 254-255.
14. *Époques*, p. 263.
15. Cf. *Époques*, p. 253.
16. Cf. *Représentation*, pp. 201-202.
17. *Époques*, p. 270.
18. 実のところ、ドゥルーズは複合過去を論じるにあたりギョームには言及していないのだが、しばしば参照がなされるエドモン・オルティグの著作では、内在相と超越相とともに、ギョームの複合過去の分析が紹介されているし（Édmond Ortigue, *Le discours et le symbole*, Editions Mouton, 1962, p. 133）、『意味の論理学』の第26シリーズで参照される *Époques* においても、複合過去が論じられているため、ギョームの分析が考慮されていると考えることは不自然ではないだろう（また、第22シリーズでは「avoir-eu-bu」のような複複合過去が扱われるが、これについても、ギョームが論じている）。なお、「複合過去」はフランス文部省においても直説法過去時制のひとつとみなされているのだが（cf. 朝倉季雄、前掲書、373頁）、

この点に鑑みても、ドゥルーズの複合過去は一般的なものでなく、特殊な文法理解を前提にしていると言えるだろう（また、同時代で最も影響力をもっただろうバンヴェニストは、助動詞の現在形が完了形に「変貌する」と論じており、ギヨームおよびドゥルーズの複合過去理解と異なっている（cf. エミール・バンヴェニスト『言語と主体——一般言語学の諸問題』阿部宏監訳、前島和也・川島浩一郎訳、岩波書店、2013年、第13章））。

19. *Représentation*, p. 189.
20. このことは、助動詞現在形と過去分詞から構成される受動態のことを考えればよく理解できるだろう。受動態は、過程を表すのではなく、その過程が展開された結果を表すのみである（cf. アントワヌ・メイエ『いかにして言語は変わるか——アントワヌ・メイエ文法論集』松本明子編訳、ひつじ書房、2007年、17-19頁）。
21. *Représentation*, p. 189.
22. *Époques*, p. 251.
23. 現在形のもつ本来の意味が失われることについてもメイエの議論が参考になる。メイエは、完了形などにおける現在形の動詞が助動詞になることで、avoirが「持っている」という表現的価値を失い、文法的価値を担うようになることを「文法化」として理論化している（cf. アントワヌ・メイエ、前掲書、17-19頁）。
24. 言語学的には、バンヴェニストによる人称への分析が参照できるだろうが、それとともに、ドゥルーズによるブランショへの言及を参照することもできるだろう。たとえば、出来事の実現不可能な部分とともに論じられる非人称性について、次の一節がある。「このヒト〔on〕は、日常の平凡な人とは大いに異なっている。それは、非人称的で前-個体的な特異性のヒト、雨の降るごとく死が降る純粋な出来事のヒトである」（LS 178/上 265）。
25. ドゥルーズは、ストア哲学を読みかえる仕方で、このような表現を把握する表象を「動詞的表象」（LS 286/下 124）と定式化している。動詞的表象について、初期ストア哲学の自然学の側から考察する論考として、江川隆男、前掲書を参照されたい。
26. 第三の現在が実現と相反するものではなく、むしろ共役関係にあるということについては、contre-effectuationにかんする議論を参照されたい（cf. LS 188-189/上 279-280）。この点については、拙論「出来事は必ずや実現される：『意味の論理学』における contre-effectuation 概念再考」『フランス哲学・思想研究』第24号、2019年も参照されたい。
27. 当時のストア派の人びとは「意志」という概念をもたなかったが、ドゥルーズの議論とは親和的に思える。たとえば、マルクス・アウレリウスの次の一節がある。「〔君の魂の〕支配的部分とは、己を目覚めさせ、わが方向を定め、意のままに己を形づくり、また、すべての出来事を自分の望みどおりの姿に、自分の眼に映じさせる、そういう部分である」（マルクス・アウレリウス『自省録』鈴木照雄訳、『世界の名著13 キケロ エピクテトス マルクス・アウレリウス』所収、1968年、第六巻第八節）。この点については、出来事を捉える表象と表象の様態としての意志の内的な関係から解釈して、意志された出来事だけが実現するのだと理解することができる（cf. André-Jean Voelke, *L'idée de volonté dans le stoïcisme*, PUF, 1973, p. 45）。しかしながら、魂も物体とみなすストア哲学は、このような意志も原因として捉えるため、物体には還元されない精神的な意志を論じる『意味の論理学』とは根本的な態度を異にしている。
28. エミール・ブレイエは、物体ではなく非物体的なものを志向する態度を「グノーシス主義」になぞらえ、物体にこそ重要性を見いだしていたストア派との相違を強調しているが（cf. Émile Bréhier, *op. cit.*, pp. 51-52/ エミール・ブレイエ、前掲書、85-86頁）、ドゥルーズは、物体とともに非物体的なものに賭け金を置く点で対照的である。こうした『意味の論理学』の態度については、拙論「ドゥルーズ『意味の論理学』における自由と実現主義について」『hyphen』第2号、2017年も参照されたい。
29. ドゥルーズは、ストア派に固有の哲学的なイメージを説明するにあたり、「大地の測量士」（LS 157/上 233）としてのヘラクレスを持ちだしている。これと同様に、『意味の論理学』の随所に見られるキリストにかんするモチーフにも着目されたい。たとえば、すでに言及してきた「受肉（incarnation）」に加え、静的発生にかんして言われる「穢れなき御宿り（immaculée conception）」（LS 118/上 177; 149/上 220）や、一義性について用いられる「〔御言葉＝御子〕（Verbe）」（LS 216/下 22）などがある。これらの語法に鑑みて、地上にもたらされた恩寵という論点について考察する余地があるように思われる。

【特集：『意味の論理学』を本質変形する】

〈批判／臨床〉の平面論——『意味の論理学』と一義性の思考について⁽¹⁾

江川 隆男

はじめに——問題提起

本日は、ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』（一九六九年）出版五〇周年記念に講演者としてお招きいただき、誠にありがとうございます。今回の私の論題の基底には、この『意味の論理学』に対するいくつかの批判的観点が含まれています。というのも、このことを介してこの著作の哲学上の位置づけを改めて提起したいと考えているからです。ここでは、いくつかの問題提起を通してこの著作そのものの〈存在根拠〉に迫っていければと思っています。ここで言う〈存在根拠〉とは、とくに哲学においてしか肯定的に思考されえず、また表現されえないような、むしろ脱根拠的な諸問題を構成する諸要素のことです。しかし、こうした事柄を従来の様式ではなく、どのような新たなスタイルで論じたり書いたりすればよいのでしょうか⁽²⁾——つまり、理由づけ、要約、追認、アナロジー、解答、注解、真理への意志、等々とは別の仕方です。哲学におけるスタイルとは、或る観念の対象に対する切り込み方そのもののことであり、その限りでそこにおいて問題の提起と構成と実現とが存立することだと言えます。

さて、『意味の論理学』の最大の特徴の一つは、たしかに「特権的なセリーはなく、セリーは収束せず、それらのあいだに意味が浮かび上がる」ことにあると言えます⁽³⁾。しかしながら、その最大の意義は、超越論的領域そのものの発生を身体の触発のもとで問題構成することで、事物一般の表面を実現することにあると言えます。これによって『意味の論理学』が、『差異と反復』（一九六八年）における超越論的経験論よりも超越論哲学の発生論として——とりわけ言語と人間精神にとって——は実質的に一歩進んでいるということはたしかでしょう。ところが、ドゥルーズは、そのためにいくつかの水準あるいは次元、諸層を行ったり来たりと、せわしなく経巡ります。それは、あたかも自分で「注釈者の偉大な弱点」を引き受けるかのようです。西洋哲学における超越論哲学は、いかなる形態のもとで思考されようと、やはり本質的には二ヒリズムを支持する言説の総体以外の何ものでもないでしょう。超越論哲学に対するこうした批判的遠近法を意識しつつ、一つの多様体として『意味の論理学』を考えていきましょう。この著作は、何よりも〈身体的なもの〉と〈非身体的なもの〉との

境界線を哲学史上はじめて明確に規定した初期ストア派の人々の考え方に依拠して展開されます。とりわけ次の言説は、本書の〈出来事の哲学〉——言わば超越論的出来事論——にとってもっとも基本的なものです。「すべての物体は、（それが別の物体に働きかけるとき）その別の物体に対して或る非物体的なものの原因となる」[強調、引用者]⁽⁴⁾。つまり、物体間の相互作用は、必然的に非物体的なものを相互に発生させ結果するということです。非物体的なものは、人間身体であれ他の物体であれ、それらの中の相互作用やそれによる混合が生じる限り、つねに生起しうるものなのです⁽⁵⁾。非物体的なものとしてのプラトンのようなアイデアも、実際にはこの産出に巻き込まれ、自然に内在することしかできないでしょう。ところが、こうした原因としての物体は、結果（あるいは効果）としての非物体的なものに出会うこと、つまり混合し合うことはありません。何故なら、両者はまったく次元を異にし、非物体的な諸結果はけっして物体のように他の物体に対する原因とはなりえないからです。それにもかかわらず、われわれは、自由にそれらの間を移行して、それらについて傍観者のように、言わば無差異な中立者のように論じることができます。それは、ドゥルーズが述べているように、あたかも注解者の最大の欠点であるかのようです。ところが、実はドゥルーズ自身が、そもそも『意味の論理学』をあえてこの立場から書き上げていると考えられるのです⁽⁶⁾。この限りでこの著作は、ドゥルーズ哲学における最大の弱みでもあると言えるでしょう。それゆえ反対に、これこそがこの書物の最大の魅力と意義でもあるように思われます——すなわち、この意味においてもっともドゥルーズらしい作品として。

『意味の論理学』における超越論哲学再考

われわれは、まず次のように問うことができるのではないのでしょうか——何故、本書が、〈意味の論理学〉ではなく、〈表現の論理学〉として書かれなかったのか、と。例えば、ドゥルーズが頻りに参照する、エミール・ブレイエの『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』においては、「一般的に言うところ、〈意味されるもの〉が一つの〈表現可能なもの〉であるとしても、われ

われには、あらゆる表現可能なものが一つの意味されるものであるかどうかまったくわからない」と述べられています⁽⁷⁾。『意味の論理学』における超越論的な発生論は、動的であれ静的であれ、その構成の側面において現実に運用されている言葉（あるいは事物の表面）の効用が過剰に目的論化されているように思われます。この著作のもっとも野心的な課題は、かなり古典的ではありますが、やはり超越論的領域そのものの発生を問うことにあるでしょう。そして、この領域の発生的要素がまさに身体が存在——第一次秩序と言われる深さの次元——にあることが明言されます。しかし、ここでの超越論的なものとはそもそも何であるのか。それは、きわめて限定されたもの、つまり第一に言語行為における諸作用を条件づけるもの、すなわち言葉の〈意味〉であり、第二にこうした諸々の〈意味〉からなる構造論的场所を配分する言わば絶対的位置としての〈無-意味〉である（第二次組織と称される高さの次元）。これらが、われわれの言語活動一般（指示、表明、意義）——第三次配置と呼ばれる表面の次元——を条件づける超越論的領域として定立されます。ところで、『意味の論理学』の前年に出版された『スピノザと表現の問題』（一九六八年）では、周知のように、表現の三つ組の論理——表現そのもの（属性）／表現するもの（実体）／表現されるもの（本質）——のもとに哲学の表現主義が探求され、またそこではこれを含めて表現の七つの三つ組が提起されています。あくまでも形式的な側面からだけですが、それらは、実際にはストア派以来の言語の三角回路（セーマイノン テュンカノン セーマイノメノン 意味するもの／指示されるもの／意味されるもの）が有する関係性の応用だと言うことができます⁽⁸⁾。このことは、スピノザには超越論的領域が存在しない以上、たとえ表現の論理における〈表現されるもの〉が表現の形相のうちには存在しないとしても言語の三角回路との決定的な違いはないと言わなければなりません。スピノザにおける表現の論理はつねに思考の極限において展開されているため、ドゥルーズのスピノザ論でさえ、そこからさらに遡行しうるような思考の余地はまったく存在しません。しかしながら、いかなる意味においても、言語モデルからの脱化の運動を獲得するなら、つまり実体が徐々に解体されて、神の二つの能力から展開される〈表現／内容〉の並行論、言い換えると、その非対称的総合の並行論が思考されることしかできないものとなるなら、表現の論理をめぐる非物体的なものの諸環境はまったく異なるものとなるでしょう。

『意味の論理学』における非物体的なものとしての〈意味〉は、言語活動の諸作用を経験的に条件づけるものとして、つまり超越論的条件として組織されます。そうだとすると、つまり〈意味〉がわれわれの言語活動における諸作用とまったく類似しないものとして定立されるとしても、この超越論的な組織体がつねにこ

れらの作用の媒介なしには理解されないということに変わりないでしょう。この限りで『意味の論理学』におけるこの超越論的経験論には実は〈複写術〉と〈媒介作用〉との後味が多分にあると言えるのではないのでしょうか。ところで、この著作と同じ年に、ミッシェル・フーコーの『知の考古学』が出版されています。前者は〈意味〉という超越論的位相、つまり言語活動における諸作用（指示作用、表明作用、意味作用）の条件を、また後者は〈言表〉の考古学的位相を、つまり言語における諸様態（語、文、命題、文法、等々）に先行する存在様態をそれぞれ明確に打ち出した画期的な著作であることに間違いありません。あるいはこうした基本的論点を改めて哲学史に位置づける仕方と言い換えるなら、例えば、前者はライブニッツ主義とその超克の哲学であり、後者はカント主義における言語以前の総合判断の諸機能と素材についての表現（言表）であるということもできます——すなわち、非共可能性の先鋭化と非汎通的規定性の根源性。いずれにしても、このように捉えていくなら、われわれは、カントのライブニッツ批判がいかなる点にあったのかをつねに意識し、またその再表現への努力を怠ってはならないでしょう。というのも、『意味の論理学』は、依然として超越論哲学を形成する諸問題とその意志のうちに存立していると考えられるからです。カントの批判は、端的に言えば、ライブニッツにおける認識の対象が物自体にとどまっているという点にあります。では、物自体とはいったい何のことでしょうか。現象の背後に想定される単なる基体のようなものでしょうか。物自体をより概念的に規定するなら、それは、〈存在するものはすべて汎通的に規定されている〉という考え方に依拠した対象性のことです⁽⁹⁾。これは、言わばカント以前あるいは以外の諸々の形而上学的思想が容易に感染しうるような物の実在的存在の基本原則の一つであると言えます。これは個体とは完全な規定性を有するものであるという考え方の基本であり、ライブニッツにおける対象性はまさに個体のこうした意味での完全性概念に帰着することになります。この点を超越論哲学の観点から言い換えると、対象が汎通的に規定されているなら、それについての判断あるいは認識はすべて分析的でしかないということになります。これに対して、われわれの認識あるいは経験は、つねにこうした物自体性として表象されうるような完結可能性を否定する特質を潜在的に含んでいなければ、けっして成立することはないでしょう⁽¹⁰⁾。カントにおいては、現象は、非汎通的規定性という根本特質のもとでのみ存立し、その限りにおいて非純粋でア・ポステリオリな総合判断の対象性となりうるのです。非汎通的規定性は、言わばこうした総合判断の積極的な存在根拠であり、その限りで現象の存在の認識根拠にほかならないでしょう。しかしながら、非汎通的規定性は、カントにおいては、最終

的には、つまり理念の水準ではまったく無化されてしまうこととなります⁽¹¹⁾。要するに、この非汎通的規定性は、カントにおいては、諸能力の発散的行使にまで至らず、また多様体としての理念そのものの特性にまで届かなかったということです（この問題に応答したのが、ドゥルーズの強度の感性論と理念の弁証論です）。

これと連関して、〈潜在性-十分な規定〉と〈現働性-完璧な規定〉との間の言わば様態の区別は、相互にどこまでも共可能的なままである。そうすると、意味の論理のもとで限定された超越論的領域は、必然的に根拠づけのあるいは目的論化された言語使用しか与えないものとなるでしょう。そうではなく、非共可能的な諸様態の間の齟齬や距離を肯定するもの、その条件が永遠回帰と言われるものの言表作用こそが問題となるのです。超越論的経験論——諸能力の発散と超越論的領域の非複写性からなる——は、たしかに諸能力の発散的行使を実現し、同一性に先立つ差異についての哲学的思考を可能にしましたが、意味の論理における齟齬や発散は依然としてきわめて限定的なままです。反-実現（脱-現働化あるいは非-表象化）は、超越論的領域あるいは第二次組織を困い込むだけでなく、その組織そのものを発散させようとする身体の触発から投射される表現形相でなければならないでしょう。或る語を形相とした身体の触発（叫び、氣息、等々）は、たしかに静的発生のもとでは事物の状態の一つになりますが、しかし他の隣接する諸帰結とはまったく異なるものとしての作用（実現）原因になりうるものでなければなりません⁽¹²⁾。現代の反時代的問題は、『意味の論理学』を形成する三つの次元の区別でも二つの発生の種別分けでもなく、むしろそれらの間を非共可能的にする諸要素が何であるのかを規定し、それを実践や戦略の言語にまでもたらすことにあるのではないのでしょうか。要するに、超越論と経験論との間そのものに共立不可能性という様相の介入をいかにして認めるのかあるいはどのように実現するのか、とわれわれは問わなければならないでしょう。それは、意味の論理に普遍性をもたらすために必要不可欠な問の仕方であると思われる。

ここまで述べてきたなかで、ドゥルーズにおける（とくに『差異と反復』と『意味の論理学』を中心とした）超越論哲学の意義を改めて哲学史のなかで言うとするれば、それは、カントにおける非汎通的規定性とライプニッツにおける共立不可能性との総合にあると言えるでしょう。それは、言い換えると、カントの構成説の根源にあるものとライプニッツの様式主義の先端にあるものとの非対称的総合です——あるいは理論の根源と実践の先端との結合、さらに言えば、非汎通的規定性のさらなる批判的な理論構成、非共可能的な出来事のプラクシス、あるいは発散する系

列のポイエーシス。ドゥルーズは、たしかに潜在的な〈判明で-曖昧な〉位相と現働的な〈明晰で-混雑した〉状態との間の或る種の逆説的關係を明確にしたが、しかしライプニッツにおいては現働的な諸様態が有する「不一致対象物」（例えば、右手と左手）を非対称的に総合する感性は存在しない（強度の問題）⁽¹³⁾。したがって、個体から個人へ、そして命題へと静的発生の過程を進捗させるなかでこうした非対称性は、たしかに命題の意味においては理解されるが、しかしながらけっして直観的には知覚されないこととなります。これを知覚可能にするのがまさに〈副-言〉の使命だと言えます。ドゥルーズにおける超越論的経験論は、何よりも強度の超越論的感性論として存立しなければなりません。この感性論は、まさに感覚されるものの非対称的総合を扱うこととなります。また、『意味の論理学』におけるライプニッツの超克、つまり非共可能性という様相を有する他のあらゆる様相（可能性、不可能性、現実性）の総合態——離接的総合——の肯定は、意味や無意味そのものを発散に追いやり、それらの形相一般を別の水準に送り返すことができます。この先端は、次のような根源に結合されるのです。カント哲学には言語論がまったくありませんが、それにもかかわらず、三批判書の本質には判断力があり、したがって判断の諸形式があります。こうした非言語的な判断が可能になるのは、超越論的観念論に限って言えば、現象という対象性が本質的に非汎通的規定性のもとに存立するからです。『純粋理性批判』におけるこの非言語性の構成を積極的に言い直すと、それは〈言表の認識論〉だと言えるでしょう。現象の多様体とは何か。それは、まさに言表の集積体だと言い換えることができます。つまり、この集積体とは、逆に言えば、物自体なき現象の多様体のことです。言表は、語、文、命題、文法、発話行為でもなければ、それ以上に意味、無意味をもたず、それらをむしろ自らの派生物とするような非カテゴリー的な機能であり、言語の外の機能素なのです。要するに、離接的総合の哲学は、カントにおける非汎通的規定性を非共可能性という様相のもとで再総合する力能を有するのである。それと同時に、ライプニッツに端を発した〈副-言〉は、カントにおける命題以前のあるいは言語を前提としない判断の力能に関わるまさに〈言表〉の位相との間での本質的な対応性を有するであろう。

表面のプラグマティック——浅さと低さを総合するもの／一義性の最小回路について

ところで、前ソクラテス期の思想はまさに深さの哲学であり、それは物の自然についての思想でした。これに対してプラトンは、高さの哲学者であり、自然を象徴する仄暗い洞窟から出で、〈太陽-イデア〉を希求するような、自然を超えた思考を開始しまし

た。言い換えると、前者の自然哲学には〈深さ-浅さ〉の差異の度合を有する運動の観念があり、また後者の形而上学（超自然学）には〈高さ-低さ〉の質的差異をめぐる道德の視座があります。さて、これらの考え方に対して古代ギリシア哲学においてもっとも偉大な初期ストア派の人々は、いかなる操作を施したのでしょうか。彼らは、こうした深さでも高さでもない、それらとはまったく異なる表面の知性を開示しました。言い換えると、初期ストア派の哲学者たちは、とりわけここで述べた〈浅さ〉と〈低さ〉を物と思考の同一の表面として、上昇と下降という二つの観念的運動とともに総合したわけです。浮上過程の〈浅さ〉はまさに事物の実在的屬性となり、また落下過程の〈低さ〉は命題の意味となつていきます。つまり、表面の一方にはつねにより浅い、つまり深さからの上向経路があり、他方にはより低い、つまり高さからの下向作用があるわけです。二つの観念的、しかし力動的な運動を総合する〈表面-速度〉の哲学においては、こうした事物の属性と命題の意味との同一性を問題提起することが最大の課題であつたと言えます。これは、後で述べるように、たしかに『差異と反復』では明確に論究されなかつた一義性の遠近法に帰属します。しかしながら、この本質的論点と同時に、『差異と反復』における強度空間に匹敵するような〈深さ／高さ／表面〉——その非対称的総合の意義——について思考することがなければ、もっぱら〈秩序／組織／配置〉という結果の構図に囚われた超越論哲学を、つまりその有機的な作品形成を跡づけ、また展開するだけになつてしまうのではないのでしょうか⁽¹⁴⁾。ここで言う〈有機的〉とは、〈秩序／組織／配置〉という諸水準の間の共可能的な〈堆積化〉という意味です。それらは、この〈可能的-現実的〉な目的論のもとに、あるいは超越論的図式主義のもとに依然として存していると言えます。これに反して、深さから浅さへの上昇過程と高さから低さへの下降過程とを必然的に含むような非対称性の表面の形成は、これと同じ必然性を以って表面から平面への脱-超越論化の諸観念を形成することになるでしょう。

ところで、プレイエは、すでにこうした一つの表面の二重性の論点を形式的には把握していました——「この両者〔事物の実在的屬性と命題の論理的述語〕は、〈カテゴリー〉という語によって指示され、またこの両者の表現を諸々の動詞のなかに見出す、これらはともに非物体的で非実在的である。実在の側面から言えば、活動を生み出す恒常的な存在者の実在性を増すために、〔逆に〕その活動の実在性はいわば軽減されたのである。また論理学の側面から言えば、属性は、思考上の概念的対象というその尊厳を奪われ、もはや一時的で偶然的な事実しか含まなくなる。したがって、そうした属性の非実在性において、そしてこの非実在性によって、論理的 アトリビュ 属辞 と物の アトリビュ 属性 は一致することができ

るのである」〔強調、引用者〕⁽¹⁵⁾。この言説は、ここでのわれわれの問題意識においては、次のように言い換えられるべきでしょう。第一に事物の実在性は、その深さにおいてはより増大するが、その活動＝行為というより浅さが増大する動詞的表現の方位においてはより減少するということ——深さにおける〈浅さ-非実在性〉。すなわち、動詞的表現とは、事物の深さから浅さへの実在性の減少を本質的に含むことなしには存立しえない形相だということです。言語における表面のプラグマティックは、言い換えると、高さ⁽¹⁶⁾と深さを嫌うということです。それは、深さを浅さへと、それと同時に高さを低さへと凝縮する作用を本質的に有するものなのです。第二の論理学の観点から言えば、初期ストア派の考え方を前提とするプレイエにとっては、事物の属性は概念の対象ではなく、偶然的事実としての出来事しか含まないということになります。しかし、出来事の超越論哲学の観点から言えば、高さから低さへの下降作用は、非物体的条件による条件づけられるものの静的発生の論理を本質的に有しています。高さから低さへの意味の論理の速度は、深さから浅さへのそれとは非対称的な運動を出来事化として共有していると言えます。つまり、それは、属性の非実在性を出来事化するわけです。非物体的なものの表面は、こうした意味での〈より浅い〉と〈より低い〉という生成の度合の位相差をつねに一つに総合するような存在の限界面なのです。

出来事の哲学を考えるなら、ここでは、ニヒリズムや弁証法における基本特性の一つである否定性の優位（同一性中心主義、矛盾の論理、等々）は発散し、それに代わって存在の一義性の思考（差異の肯定、副-言の非論理）が形成されなければならないでしょう（副-言の機能とは、ライブニッツ主義を前提として言えば、感性の形式なしに反対のものを非対称的なものとして理解し、それを言語表現にまでもたらすことにあります）。つまり、この思考における観念は、諸様態において非共可能化された無数の出来事からなる、あるいはそれらの差異の積極的距離からなる一義的〈非-存在〉を形成するのです⁽¹⁶⁾。差異の工手力は、『意味の論理学』のこうした〈出来事の哲学〉においてはまさに〈存在の仕方〉主義として展開されます——存在の様式あるいは実存の様態、すなわち様式主義あるいは様態主義。至るところで、アリストテレスの帰属主義に対してライブニッツの様式主義が提起され肯定されることとなります。初期ストア派の四つのカテゴリー（基体、性質、様態、関係）は、こうした思考を獲得するために必要な武器となりうるものです。つまり、これらのカテゴリーは、認識のための道具箱ではなく、まさに思考の武器庫となりうるものなのです。これらは、その限りにおいて非カテゴリー的思考に現前する機能素だと言えます（ガタリの『分裂分析的地図作成法』

における四つの存在論的機能素も同様に考えられるべきでしょう)。

出来事の哲学は、哲学史の流れを踏まえて言えば、実体主義でも関係主義でもなく、まさに〈存在の仕方〉主義である、とすでに申しました。それは、端的に言えば、〈存在〉について一義的に思考する様式そのもののことです。つまり、それは、〈存在〉を実体化することも最高類と考えることもなく、どこまでも存在の仕方としての差異を肯定する思考のことです。誤解を畏れずに、これについてわかり易い説明をしたいと思います——神は〈存在する〉、人間は〈存在する〉、蟻は〈存在する〉……、とひとは言うことができます。存在の多義性においては、こうした〈存在する〉の声は、実はその主語に影響されて異なって聞かれる、つまり同名(あるいは同音)異義として理解されます。というのも、神の存在は、例えば、完全に無限であるが、人間の存在は不完全で有限であり、蟻の存在はそれ以上に不完全で有限であり、等々。このように理解された〈存在者の存在〉は、存在者の優劣的価値評価の先行性のもとに、つまり価値の位階序列がもつ否定性のもとにとどまり続けるでしょう。では、これに対して存在者の間の差異を肯定的に理解するには、どうしたらよいでしょうか。こうした存在者のうちには、人間や無機物、植物や動物とともに神も含まれます。そこで哲学の思考は、一義性という観念を見出しました。それは、先ほどの〈存在すること〉を主語に依拠することなく、すなわち先行する存在者の優劣の価値序列に囚われることなく、つまりこれに抗して同名(同音)同義として聞き取り、理解することにあります。そうすると、思考のうちで何が変化し、また何が生起し始めるのでしょうか。人間、蟻、神、等々は、それぞれの存在の仕方のもとでしか存在していないことが理解されます。換言すれば、それぞれの存在者は、自らの差異の肯定のもとで存在するのです。存在の一義性においては、神とそれ以外の存在者との間に否定性が入り込む余地などまったくありません。

〈存在すること〉とは、こうした意味での存在者の観念についての、つまり存在の仕方あるいは差異の肯定について概念——存在者の存在、肯定の肯定——にほかならないのです。要するに、存在は、あらゆる差異について唯一同一の意味で言われるということになります。

『意味の論理学』の「第二五系列」は、存在の一義性についての考察に充てられています。ここでは、『差異と反復』における言わば超越論哲学の到達点としての〈永遠回帰〉の系譜学的原理が改めて出来事の哲学の一義的平面として再構成されていきます。では、何故、一義性の思考が出来事の哲学に必要となるのでしょうか。ここで提起されている一義性の諸規定を改めて見ていきましょう。(1)「存在の一義性が意味するのは、存在は〈声〉である

こと、存在は言われ、また存在が言われるものすべてのものについて唯一同一の「意味」で言われるということである。存在が言われるものは、まったく同じものではない。しかし存在は、存在が言われるすべてのものに対して同じものである」。(2)「一義性が意味するのは、〈到来するもの〉と〈言われるもの〉とが同じ事物だということである。すなわち、あらゆる身体のあるいは事物の状態の〈帰属可能なもの〉と、またあらゆる命題の〈表現可能なもの〉」。(3)「一義性は、ノエマ的な〈属性〉と言語的な〈表現されるもの〉との同一性を意味する。すなわち出来事と意味」⁽¹⁷⁾。(1)は、すでに『差異と反復』で言われていた〈存在の一義性〉についての言わば名目的定義の一つです。存在は、〈声〉である。つまり、存在は、つねに存在する(在る)と言われるもの——例えば、無限なものであれ有限なものであれ(スコトゥス)、実体であれ様態であれ(スピノザ)、反復であれ差異であれ(ニーチェ)——について唯一同一のものである。この場合の声は、動詞の不定法の声であり、不定法の形相に息を吹き込む声である。そうした声は、〈存在すること〉、〈表現すること〉、〈回帰すること〉といったように純粋な出来事としての内在性を徐々に獲得していきます。これは、無限に多くのノイズと言葉についての、言い換えると、無数の上昇と下降についての唯一同一の声だということですから。一義的〈存在〉は、ここでは〈声-非意味〉として存立します。このようにして、差異の存在あるいは存在の仕方を肯定するには、〈存在〉は必然的に存在が言われるものについて一義的でなければなりません。

これに加えて、(2)あるいは(3)は、まさに『意味の論理学』において提起された存在の一義性としての永遠回帰についての新たな意義であり、またその表現であります。これは、出来事の哲学の先端における存在の差異、つまり到来することと、存在の反復、つまり存在が言われることとの一義性を述べたものです。『差異と反復』における〈無差異の中立性/差異の表現/差異の実現〉という存在の一義性の三つの水準は、実は出来事の表面そのものを形成し、またそこにおいて絶えず変様しつつ反復されています。これは、言い換えると、永遠回帰における一義性の最小回路、つまりその無際限な感染経路のことである。〈到来するもの〉と〈言われるもの〉、つまり表面における出来事と意味とは、差異の肯定的な一義性のもとで無限に多くの最小回路を形成するものである。さらに言うと、このようにして永遠回帰において〈到来するもの〉と〈言われるもの〉は、相互に反転して実質的に一つのもの、あるいは決定不可能なものを形成しています。存在の一義性は、表面においては二重の多様な運動を折り畳むような、理念的な速度をもった最小回路として存立するわけです。しかしながら、たとえ超越論的領域が新たに定立されたとしても、表面

上の一方は単なる事物の状態というまさに〈帰属可能なもの-出来事〉であり、また他方は相変わらず命題の〈表現されるもの-意味〉であるといった事態にとどまっていることはたしかであろう。要するに、『意味の論理学』では言語活動あるいは言説的形成に関わる諸要素——主体、言葉、物、対象、文、命題、意味、無意味、等々——に先立つ存在の様態が、あるいはそれらを派生したものとす言表の機能が完全に見逃されています（後のガタリとの著作においては、「言表作用」という概念が重要な役割をもつ以上、その限りでこの基盤となる「言表」の不在についてこうした指摘をすることはそれほど間違っていないと思われます）。ここで私は、超越論的領域としての言表を提起したいわけではありません。つまり、私がこのように言うのは、超越論的条件としての言表の考察が欠如しているからではありません。ドゥルーズは、『フーコー』のなかで明確に〈言表可能なもの〉を実在的経験に対する超越論的条件の一つとして定立しています。しかしながら、言表をカント主義哲学における条件の一つの特性である自発性として考えるのは、〈比例性の^{アナロジー}類比〉を端初とした思考のうちにあることに間違いありません。言表は、むしろ人間身体の触発を含んだ外部の実在性を、つまり外の諸力を内含した多様体そのものであり、この限りで上述したような言語の他の諸要素を自らの派生物とするのです。超越論的に発生するものと基本様態の派生物とは、まったく異なるものであることに注意しなければなりません。あえて言うなら、前者がむしろライブニツツ的で、後者が実はカント的であるというのかなり皮肉なことです。例えば、『差異と反復』の第五章において、感覚されうるものの〈非対称的総合〉という感性論の言わば究極的論究が為された以上、そこから超越論的経験論の真に非-言語的思考について考察することも可能だったのではないのでしょうか。それにもかかわらず、何故その次の著作において出来事と意味についての言語的な超越論的思考に囚われていったのか。非-言語的思考は、例えば、カントにおける判断力論が可能となるまったくの非-言語論的な言表的基底といった問題を明らかにするものでもあります。そして、それは、後年のドゥルーズ＝ガタリにおける〈言表作用〉の構成要素をなす〈言表〉という同じ存在様態を作動させるものでもあります。

表面の超越論から平面の並行論へ

以上のように、『意味の論理学』においては、深さの〈上昇〉と高さの〈下降〉が平面の一義性を実質的に構成する思考上の二つの理念的運動であった。この上昇過程が超越論的領域を発生させるまでに浮上するのが動的発生の意味であり、これに対してこの領域による下降作用は浮上が超出していく表面を絶えず形成し

続けるという意味において静的発生である。ところで、それらは、まさに〈過剰-存在〉の真の機能素だと言えます。というのも、深さの浅さへの浮上は実際には平面に対していつのまにか落下が必要なるほどまでに上昇してしまい、また低いところへの下降は今度は表面を突き抜けてどこまでも落下し続けることになるからです——〈過剰-上昇〉と〈過剰-下降〉。永遠回帰としての平面は、つねに深さと高さに対してこうした齟齬と非収束という特性を有しているのです。平面なしには、この〈過剰-存在〉は不可知のままでしょう。現在でも参照されるべき『意味の論理学』の書評のなかでフーコーは、次のように述べています。「しかし、『意味の論理学』は、とりわけ形而上学概論のもっとも大胆なもの、もっとも傲慢なものとして読まれなければならない。——ただしそれは、またしても形而上学を存在の忘却として告発したりせず、今回こそ形而上学に〈過剰-存在〉を語らせるのだという単純な条件においてである。自然学、それは、物体、混合、反作用、外部と内部の機構をめぐる観念論的構造についての言説である。形而上学、それは、非物的なもの、幻影、偶像、模像の物質性についての言説である」[強調、引用者]⁽¹⁸⁾。プレイエが述べているように、初期ストア派の人々のカテゴリー論は自然学の問題であり、それゆえ非物的なものも自然のうちに内在するものです。したがって、たとえ表面が形而上学的と呼ばれるにしても、それは自然に内在する観念の運動のことであり、その限りにおいてその〈対象性〉(objectité)を有することになります。形而上学は、そこでは物体の表面においてのみ成立する非物的な〈出来事-意味〉の一つのトポスなのです。しかしながら、それ以上に形而上学それ自体がすでに錯覚の所産であることも事実でしょう。何故なら、錯覚あるいは幻影は、つねに真理とともにあるからです。正確に言うと、あらゆる意味での形而上学が成立するのは、何よりもその対象性ゆえに、われわれが真理と錯覚とを完全に混合して理解することによるとさえ言えます。形而上学とは物の状態の表面で成立する知であると言ったところで、それはこうした意義を有する限りでのことでしかないでしょう。『意味の論理学』では、精神分析だけでなく、形而上学もまったく無傷のまま、ただし発生論のもとで存続し続けることになります。『ペルクソニズム』のなかでドゥルーズは解のレベルでの問題提起をもっぱら〈偽の問題〉として扱いましたが、より本質的に言えば、それはむしろ〈悪い問題〉ということなのです。それは、冒頭で述べたように、結局は補完、再認、根拠づけ、注解、目的、追認、等々に還元されるような思考の仕方だからです。〈偽の問題〉とは、実際には問いなき問題であり、問いの力能のない形式と解答への意志からなるものことです。

自然の本性から必然的に生じるものは、自然法則という一般的

真理だけでなく、人間身体、芸術作品、文学言語、等々の存在過程も同じ必然性のもとで、しかし非-科学的な知を形成しつつ特異性の法則のもとで産出されるでしょう。ところで、それぞれの実在的な経験のもとでわれわれは、つねに真理の観念を希求しているのでしょうか。隠されていると考えられた真理ほど、実は愚鈍なものはないでしょう。というのも、真理が存在するとすれば、それは、むしろわれわれに内在し、またつねに現前しているはずだからです。スピノザは、真の観念はいかなる意味でも他の観念を媒介することなく、われわれに現前し内在すると言います⁽¹⁹⁾。しかし、この問題は、ここで扱うにはあまりに大き過ぎます。それでも、真理の内在性において哲学はいかなる過程を成立させるのか、という問いをここで提起することはできるでしょう。これは、端的に言うと、アナロジー（優越性、類似性、矛盾、多義性、等々）の思考が徐々に消尽する物質的過程であり、また存在と価値の位階序列における上層部の下向過程と、それに必然的にもなう下層部の上向過程との諸運動による一義性の平面の実現につながっています。表面のプラグマティックは、こうしたあらゆる位階序列の解体と平面化の創建につながっているのです。形而上学は、その対象性の〈存在-価値〉が下落したなかで、はじめてその価値の真価、つまり表面の構成要素としての真価が明確になるのだと言えます。いずれにしても、形而上学が表面の価値以外の何もかも有していないことが理解されるはずで、こうした意味において形而上学それ自体は、どこまでも行っても人間存在や人間精神の痛みや疲労の表出でしかない以上、これらの〈認識根拠〉にしかならないでしょう。というのも、それは、ニヒリズムの最大の派生物であり、人間精神における希望と恐怖の代替物にほかならないからです。それは、例えば、われわれの歯の痛み（あるいはその意識）が実際に歯の存在の認識根拠にしかならないのとまったく同様です。では、歯は、日々のなかで何を肯定する存在なののでしょうか。痛みなしに、すなわち否定性なしに、つまりこれらに先立ってその肯定的な存在根拠の観念を有すること、これが平面上への落下の意義です。それゆえ、歯の存在根拠とは、まさに落下の痕跡をともなった〈噛み砕くこと〉という肯定的な不定詞として、われわれの無意識を形成する多様な観念の一つとなっているものことです。こうした観念を対象性として現働的に思考すること、これこそが一義性の平面の哲学的思考であり、また自然のうちに内在する観念の機能なのです。精神分析は、こうした意味での人間精神の認識根拠における表面の科学あるいは芸術以上でも以下でもないものでしょう。では、人間精神そのものの〈存在根拠〉とはいったい何であるのか。問いの力能を有した〈一つの問い〉は、つねにこうした存在根拠の諸問題のために存するかのようなものである⁽²⁰⁾。

ここまで述べてきたいくつかの問題提起によって、どのような変形や触発が意味の論理において考えられるであろうか。この著作におけるもっとも〈悪い問題〉、それは、おそらく言葉の成立（第三次配置）を目的論化することにあるように思われます。『意味の論理学』では、媒介の思考や共可能性のもとでの諸地層（秩序／組織／配置）の間の移行の言説（動的発生／静的発生）が相互に基礎づけ合いつつもっぱら展開されています。自然が放った矢を捉えて、丁寧に磨くことは重要なことであるが、しかしそれはおよそ解を与えるための手段にすぎないでしょう。この矢の最大の行使は、問題投射することにあります。こうした論点も含めてまさに成立する思考の仕方、それが〈批判の問題〉なのです。それは、現行の意味にも無意味にも関わることなく、むしろ非物體的なものの変形やあらゆる価値の価値転換についての問いの力能を問題構成することにあります。では、これと同時に哲学における身体の問題、つまり臨床の問題はどのように考えられるべきでしょうか。それは、有機的身体が有する視点に先行するような非有機的な変容的遠近法がいかにして身体の変様のうちに存立しているのかという、非身体的変形や価値転換の発生的要素となりうる限りでの身体の強度的変様の問題なのです——すなわち、超越論なき並行論、〈深さ／高さ〉なき自然哲学、表面なき平面の内在性の哲学、ニヒリズムなき〈変形／転換〉についての倫理学。ドゥルーズは、次のように批判と臨床について規定しています。批判の問題——「無-意味が姿形を変え、カバン-語が本性を変え、言葉全体が次元を変える異なる水準の決定の問題」。臨床の問題——「或る有機体から別の有機体への地滑りの問題、前進的で創造的な脱有機体の形成の問題」[強調、引用者]⁽²¹⁾。これらは、必然的に一つの並行論を、つまりここで言われる決定と形成の問題を含んだ〈批判／臨床〉の平面論を形成することになるのではないのでしょうか。スピノザにおいては、まったく不確定のまま残された〈精神／身体〉の並行論における言葉の問題があります。これに対して『意味の論理学』においては、〈批判／臨床〉の平面論におけるとりわけ言語の同じ問題に対する具体的で異質な創造的な問いの諸要素が内含されているように思われます⁽²²⁾。こうした並行論は、まさに反転の一義性として存立しています——中立性から表現へ、そして実現から反転へ。ここでは〈到来するもの〉と〈言われるもの〉との同一性は、身体における強度の差異とその言表の様態機能とに発散していくものである。こうした一義性の平面論においては、語や文や命題を予め前提しつつ、それにもかかわらずそれらを超越論的に条件づけるという〈意味-無意味〉のア・プリオリ性に奉仕するよりも、むしろ言語のあらゆる様態や作用をもっぱら派生物とするような〈言表-言表作用〉に関する問題を構成することの方がより本質的であ

る。

最後に

さて、初期ストア派の、カントの、ガタリのそれぞれ四つのカテゴリーは、いかなる思考をわれわれに提起しているのでしょうか。これらは、すべて〈非物体的なもの〉の特性、非言語性、変形と転換の変革論につながるものです。かつてドゥルーズは、今や哲学は反時代的でなければ、歴史的でも科学的でも永遠でもありえないと言い、もはやこれまでのような仕方では哲学の書物を書くことはできないであろうと述べていました。皆さん、私は、ぜひこうした問題について真剣にかつ継続的に考えていただきたい

と思っています。哲学とは、ニーチェが言うように、そもそも反時代的——つまり、非現働的——でなければ存立しえない唯一の思考なのです。哲学あるいはその思考の発生的要素は、或る反時代的で非現働的なものにあるということです。この『意味の論理学』を通して、二〇世紀の現代思想的表層面だけでなく、より本質的で内在的な哲学の思考の様態を捉え、またこの著作を基にして、人間精神をその限界にまでもたらしような転換の仕方を作動させていただきたいと思っています。

本日の私の話は、以上になります。ご静聴、ありがとうございました。

注

1. 本稿は、ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』（一九六九年）出版五〇周年記念の特別企画——「『意味の論理学』を本質変形する」（二〇一九年一月七日、於 慶応義塾大学・三田キャンパス、主催：秋田大学教育文化学部小倉研究室、DG-Lab（ドゥルーズ・ガタリ・ラボラトリ）——での講演会を基に、その際の配布資料とともに再構成するだけでなく、新たな論考として成立させたものである。講演会では、フェリックス・ガタリの地図作成法におけるとりわけ〈非物体的なもの〉の機能素（U）についても話題にしたが、残念ながら、本稿では省略せざるをえなかった。
2. 「ひととはかくも長きにわたって哲学の書物を書いてきたが、そのように書くことがほぼ不可能になる時代が間近に迫っている。「ああ、古いスタイルよ……」（Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, PUF, 1968, p.4 [以下、DR と略記]（『差異と反復』財津理訳、河出文庫、二〇〇七年、上・一八頁））。
3. これは、この企画の当日に配布された資料、小倉拓也「導入——『意味の論理学』の地図作成」からの引用である。まさに「（……）表面には意味の論理学のすべてがある」、またそれは、「純粋な出来事の理論であり、線状のあるいは表層の凝縮の理論」である（G. Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969, pp.114, 209 [以下、LS と略記]（『意味の論理学』小泉義之訳、河出文庫、二〇〇七年、上・一七〇頁、下・一一頁））。最近、次の著作が出版された——鹿野祐嗣『ドゥルーズ『意味の論理学』の注釈と研究——出来事、運命愛、永久革命』（岩波書店、二〇二〇年）。本書は、ドゥルーズの哲学の基本特性の一つである分類の哲学としての意義や厳密性に徹底的に配慮して書かれた、『意味の論理学』についての特権的な研究書であると言える。これは、『意味の論理学』における諸概念とこれについてこれまで書かれた多くの言説とに対する言わば〈トポス論〉（カント的な意味で）の方法が発揮された成果であると言えるだろう。
4. セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』、第九巻、二一（『初期ストア派断片集 2』水落健治・山口義久訳、京都大学学術出版局、二〇〇二年、〔三四一〕、四五二頁）。「彼ら〔初期ストア派の人々〕にとってこの考え方の重要性は、つねに言語において動詞によって結果＝効果を〈表現する〉ということに向けられた彼らの関心を通して示される」（Emile Bréhier, *La théorie des incorporels dans l'ancien Stoïcisme*, Vrin, 1908, p.12 [以下、TI と略記]（エミール・ブレイエ『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』江川隆男訳、月曜社、二〇〇六年、二六頁））。
5. 諸著作を時系列的あるいは発展史的に、つまり有機的に読むことも拒否すれば、例えば、次のような平面は、まさにここで考察しているストア派由来の出来事の哲学に現前し、またこの哲学が取り入れるべき物体と非物体との並行論であろう——「内在平面は、〈思考〉と〈自然〉、あるいは〈精神〉と〈自然〉という二つの面をもっている。それゆえ、一方の回帰が瞬間的に他方を投げ返す限り、一方が他方のうちに取り込まれ、一方が他方のうちに折り畳まれるような多くの無限運動がつねに存在するのであり、その結果、内在平面は絶えず織り上げられる巨大な罫のようである」[強調、引用者]（G. Deleuze / F. Guattari, *Qu'est-ce que la philosophie?*, Minuit, 1991, p.41（『哲学とは何か』財津理訳、河出文庫、二〇

一二年、七〇-七一頁))。この言説は、後で述べるような、〈到来するもの〉と〈言われるもの〉との間の存在の一義性をより普遍化した平面上での反復を示している。

6. Cf. G. Deleuze, *LS*, p114 (上・一六九-一七〇頁)。
7. E. Bréhier, *TI*, p.15 (三一頁)。ところが、〈表現可能なもの〉についての誤った解釈が流布している。それは、物の属性、つまりその存在者が有する特質としての〈肯定されるもの〉が、つねに〈意味されるもの〉と同一化されるという解釈である。この〈表現可能なもの〉あるいは〈肯定されるもの〉を、例えば、スピノザにおける「積極的なもの」と考えるならば、この解釈の違和感はより明確に理解されることであろう(スピノザ『エチカ』、第四部、定理一、参照)。ブレイエは、この解釈が流布した理由を次のように述べています——「それは、アルニムが初期ストア派の人々に関する編纂書のなかの論理学に関する諸断片に「〈意味されるもの〉あるいは〈表現可能なもの〉について」という表題をつけることでこの解釈を正しいものとしたからである」(E. Bréhier, *TI*, p.15 (三一頁))。
8. ドゥルーズ=ガタリは、デンマークの言語学者イェルムスレウを「スピノザ主義的地質学者」と称している(G. Deleuze / F. Guattari, *Mille Plateau*, Minuit, 1980, pp.57-58 [以下、*MP* と略記] (『千のプラトー』宇野邦一・他訳、河出文庫、二〇一〇年、上・一〇〇頁))。ということは、あえてオランダの哲学者スピノザを〈イェルムスレウ的言語学者〉と言うこともできるであろう。そこで、実際にイェルムスレウにおける基本概念である〈表現/内容〉を適用してスピノザの『エチカ』を読解してみてもらいたい。ドゥルーズの表現の三つ組を前提にしたままで、この基本概念を適用していくと、つねにどこかで行き詰まり、また矛盾に陥り、それ以上まったく進まないことを何度も経験することになるでしょう。しかし、そのときはじめて、〈表現/内容〉で思考することの意義がどこにあるのかを真に思い知ることになるでしょう。つまり、問いの力能を有した諸問題としてはじめて〈表現/内容〉について思考できるようになると思われます。それは、まさに非カテゴリー的なアナロジーなき思考である。
9. イマヌエル・カント『純粋理性批判』、A573=B601、A576=B604 参照。
10. こうした超越論哲学においてもっとも本質的な論点に関しては、例えば、福谷茂「存在論としての「ア・プリオリな総合判断」」(『カント哲学試論』所収、知泉書館、二〇〇九年、一三一-一三七頁)においては、カントのライブニッツ批判が簡潔に論述されており、ぜひ参照していただきたい。また同様に、石川求『カントの無限判断の世界』(法政大学出版局、二〇一八年)においては、無限判断の特性を通して「汎通的否定」というきわめて重要な概念が提起されています——「否定が具体化するためには媒介が、あるいは共通の類が必要である。しかし、無限判断の主語と述語はそれをもたない。もたないがゆえに、無限判断の不定性は、数え切れない否定の集積すなわち汎通的否定となる」[強調、引用者] (六二頁)。
11. 『純粋理性批判』の「弁証論」のなかで、神は、排他的離接(選言)の三段論法(Sはpあるいはqである——Sはqではない——ゆえに、Sはpである)の原理として、つまり〈超論論的基体=S〉として定立されています。これによってカントにおいては、「各個の物の完全な〔汎通的〕規定は、この実在性の全体〔理念〕を制限することに基づく。すなわち、この物に或る実在性が付与されるが、他の実在性は、排除されるのである」(『純粋理性批判』、A575-577=B603-605)、と述べられることとなります。これに対抗する仕方、『意味の論理学』の「付録」として収録された「クロソフスキー、あるいは〈身体-言葉〉」においては、選言の三段論法の「悪魔的原理」としての強度的使用法が提起されています。ドゥルーズは、要するに、超越論哲学を脱出する思考法が言語と身体との並行論にあることを理解していたと言えるでしょう——「クロソフスキーの作品は、身体と言語活動との驚くべき並行論のうえに、あるいはそれら相互の反映のうえに構成されている」(G. Deleuze, *LS*, p.325 (下・一八五頁))。『意味の論理学』には五編の論文が「付録」として収録されています。これらは実はこの著作のほぼ四分の一以上の分量を有しており、この「付録」の意義は改めて考えられるべき事柄であろう。私がここで言えるのは、この「付録」は、まさに〈意味の論理〉に対する〈外の思考〉であり、また別の異なる非整数的で非対称的な強度空間を多様な方向性のもとで与える大気のような論文群であるということです。
12. 自己原因と作用原因に関してスピノザとはまったく異なる原因の一義性としての永遠回帰に関する論究は、拙著『存在と差異——ドゥルーズの超越論的経験論』(知泉書館、二〇〇三年、二三二-二三八、二四九頁)を参照されたい。

13. 「不一致対象物」については、カント『プロレゴメナ』、第一三節、参照。さらに、この問題の逆説性を強度の総合に接続する論点、またその非対称的综合と理念との関係については、G.Deleuze, *DR*, pp.298-299, 314-316 (一六九-一七〇、二〇二-二〇六頁) を参照せよ。
14. 「この『意味の論理学』でうまくいっていないことは何であったらう。たしかにそれは、まだ精神分析に対して無邪気で、罪深い愛嬌を振りまいていた。それを弁解するなら、こういうことである。つまり、それでも私は、実はおずおずとではあるが、表面的な存在者性としての出来事に関わる表面の芸術としての精神分析を提示しながら、これを無害なものにしようとしたのだ(……)。しかし、いずれにしても、精神分析の概念は無償のまま尊重されているし、メラニー・クラインもフロイトもそうである」[強調、引用者] (G.Deleuze, *Deux régimes de fous : texts et entretiens 1975-1995*, Minuit, 2003, p.60 (『意味の論理学』イタリア語版への覚書) 宇野邦一訳、『狂人の二つの体制 1975-1982』所収、宇野邦一監修、河出書房新社、二〇〇四年、八七-八八頁))。私が『意味の論理学』を〈有機的超越論〉とここで称するのは、ドゥルーズ自身が述べているような、この著作での「うまくいっていないこと」のとりわけ精神分析的部分についてです(このことはまた、この考察の冒頭で述べた注解する者の意志がもつ大きな弱点につながっているように思われます)。これに反して、『意味の論理学』には、例えば、非-有機的で脱-超越論的な言わば〈無機的並行論〉の思考の萌芽をむしろうまくいっている哲学的部分として積極的に見出し問題構成していくという課題が残されていると思われます。
15. E. Bréhier, *TI*, pp.21-22. (四〇-四一頁)
16. 〈副-言〉と不可分な〈非-存在〉の概念については、とりわけ拙論「現前と外部性——非-論理の革命的思考について」(『すべてはつねに別のものである——〈身体-戦争機械〉論』所収、河出書房新社、二〇一九年、一三-九八頁) を参照されたい。
17. Cf. G. Deleuze, *LS*, pp.210-211 (下・一三-一四頁)。
18. Michel Foucault, *Dits et Ecrits, Tome II, 1970-1975*, Gallimard, 1994, p.79 (「劇場としての哲学」蓮實重彦訳、『ミシェル・フーコー思考集成Ⅲ』所収、筑摩書房、一九九九年、四〇一-四〇二頁)。
19. スピノザ『エチカ』、第二部、定理四三、備考、参照。
20. こうした〈認識根拠〉(ratio cognoscendi) と〈存在根拠〉(ratio essendi) の違いについては、G. Deleuze, *Nietzsche et philosophie*, PUF, 1962, pp.198-199 (『ニーチェと哲学』江川隆男訳、河出文庫、二〇〇八年、三三四-三三七頁) を参照されたい。
21. G. Deleuze, *LS*, p.102 (上・一五四頁)。批判は第一に有限な肯定的作用であるが、ドゥルーズはこうした意味での批判作用をまさに総合的に実現した哲学者の一人である。ベルクソンやスピノザ、ライブニッツやニーチェについてのドゥルーズの論考は、すべてこうした批判によってはじめて思考され見出されるような肯定的な強度的部分からなる。ということは、こうしたドゥルーズの哲学について論究し、それを研究する場合、ひとは、やはり同様の批判作用を対象として、つまり諸観念の多様体を真に批判の問題として作動させる必要があるのではないのでしょうか。
22. こうした問題については、すでに以下の著作のなかで考察しているので、ぜひ参照していただきたい——拙著『スピノザ『エチカ』講義』(法政大学出版局、二〇一九年、三五三-三六九頁)、拙稿「〈身体-戦争機械〉論について——実践から戦略へ」(『すべてはつねに別のものである』所収、二四〇-二五九頁)。またドゥルーズは、こうした並行論をガダリとともに『千のプラトー』において、〈身体の機械状作動配列〉と〈言表作用の集散的作動配列〉からなる平面の脱領土性並行論として考察しています (Cf. G. Deleuze / F. Guattari, *MP*, p.112 (上・一八八頁))。

【論考】

初期ドゥルーズにおける精神分析への対応

財津 理

ドゥルーズの死後、ラブジャードによって編集されたドゥルーズのテキスト集『無人島』(2002)の「はじめに」の「注1」で、1989年ごろにドゥルーズによって作成された著作目録の計画の簡単な内容が紹介された。その後、その計画の詳細はやはりラブジャード編集の『ドゥルーズ 書簡とその他のテキスト』(2015)の「書誌の計画」のなかで明らかにされた。ドゥルーズは、この計画のなかで、自分の著作をテーマごとに分類している。他方、エリアス・サンバル宛ての書簡(1985年7月)のなかで、ドゥルーズは、また別の分類をしている。どちらも、厳密に出版年に従った分類ではない。⁽¹⁾

85年の分類は、これは分類というより著作一覧であるが、10冊の本を、ひとつずつ番号を付けて並べている。これについて、ドゥルーズは「ある種の一貫性を模索した」と書いてはいる。89年の分類は、85年の一覧とは異なり、11のテーマごとに著作を集めている。興味深いのは、以下のような並べ方の違いである。85年では、3番目に『アンチ・オイディプス』(1972)、4番目に『千のプラトー』(1980)が来て、9番目に『意味の論理学』(1969)、最後に『差異と反復』(1968)が来るという並べ方に対し、89年では、8番目に『意味の論理学』、9番目に『アンチ・オイディプス』、10番目に『差異と反復』、最後に『千のプラトー』が来るという並べ方の違いである。このような順序にどのような意味があるのかについては、ドゥルーズは何も語っていない、少なくとも、85年と89年で自分の諸著作に対するドゥルーズの姿勢が変化したということは推測できる。ドゥルーズ自身による証言がないので確かなことは言うことができない以上、今は、この二種類の分類の仕方は無視したい。

そこで、「哲学について」と題された対談のテキストを、やや詳しく見ていくことにしよう。ドゥルーズの数々の対談のなかでもとりわけこの対談は、本論のテーマの展開に資するところが多いからである。さて、ドゥルーズは『巽：ライブニッツとバロック』を1988年6月に刊行し、その年の9月、文芸誌「マガジン・リテレル(257号)」にこの「哲学について」と題された対談を掲載した。これは、『記号と事件』(1990年)に収録されている。この対談の冒頭で、質問者はドゥルーズに、彼の本格的な作品と

して処女作にあたる『経験論と主体性』(1953年)から『巽』までの著作活動の道程(itinéraire)を、しかもこの道程を以下のような3つの段階(étape)に区別して、たどり直すよう求めている。

その第1段階は哲学史の研究の時期であり、『ニーチェと哲学』(1962)で頂点に達した。その後、第2段階では、『差異と反復』(1968)が書かれ、さらにガタリとの共同作業において『アンチ・オイディプス』(1972)と『千のプラトー』(1980)が書かれて、まったくアカデミックではない文体で独自の哲学がつけられた。そして第三段階では、『ベーコン論』(1981)および『シネマ1』(1983)、『シネマ2』(1985)を書いた後、哲学へのより古典的な取り組みに回帰している。⁽²⁾

ドゥルーズは、質問者によるこのような道程の区分を一応は承認し、質問者の段階(étape)という語を、時期(période)と言い換えて、彼自身の哲学史的研究を説明し始める。だが『ニーチェと哲学』でドゥルーズの哲学史的研究が頂点に達したという質問者の考えは無視している。その代わりに、いきなり彼の哲学史研究全体の目標が提示される。それはスピノザ=ニーチェの大いなる同一性(la grande identité)である。⁽³⁾しかし今は、ドゥルーズの回答のうち本論にとって必要なところのみを問題にしよう。その必要なところとは、『差異と反復』までのドゥルーズの思索の歩みと、ドゥルーズ自身による『差異と反復』に対する評価である。スピノザ=ニーチェの大いなる同一性に関しては稿を改めて論じたい。

ところで、ドゥルーズの哲学史(l'histoire de la philosophie)すなわち哲学の歴史とは何か。それは、哲学のいわゆる通史ではない。それは、ドゥルーズ自身にとって何か共通点のある哲学者たち一人ひとりの精神と概念の肖像を描く技術=芸術(art)である。⁽⁴⁾そして、このような哲学史の仕事は、過去の哲学者が述べたことを繰り返すという作業ではなく、哲学者が暗に言っていた何かを言うという仕事でもある。その何かとは、哲学者が直接には述べていなかったことがらではあるが、それでも哲学者が実際に述べたことがらのなかに現前している何かである。

ドゥルーズは、質問者による区分通りに、ガタリとの共同作業

『アンチ・オイディプス』と『千のプラトール』)の段階を自分の著作活動の第2の時期とみなす。ただしドゥルーズは、この共同作業は協力することではなく、いわば二つの小川(ドゥルーズ並びにガタリ)が合流して「或るひとつの」三番目の川(ドゥルーズ・ガタリ)がつけられることであると言う。そして、この合流において出来上がった二つの作品『アンチ・オイディプス』と『千のプラトール』において、ドゥルーズとガタリは不定冠詞付きの哲学、つまり「或るひとつの哲学(une philosophie)」を試みたというわけだが、ドゥルーズは、その二つの著作のうち『千のプラトール』のほうを、概念を創造する哲学として強調する。

この対談の最後でドゥルーズは、「哲学とは何か」について一冊の本を書くことを予告している。そしてそれから3年後、それはドゥルーズの自死の5年前であるが、『哲学とは何か』(1990)が刊行される。そこから少し長い引用しよう。

「……ただ、哲学とは何かと問うべきときが、わたしたちに到来しただけのことである。だが、わたしたちは、以前そのように問い続けていたし、変わらぬ答えをすでに得ていた。それは、哲学とは諸概念を形成したり、創案したり、制作したりする技術である、という答えである。ただし、答えが問いを引き継ぐということだけでなく、さらに、答えが、問いの時刻、問いの機会、問いの事情、問いの風景と人物、問いの条件と未知の要素を決定するということまでも必要であった。」⁽⁵⁾

ところで、『哲学とは何か』を読んで、概念創造の必要性やその目的は何かという疑問をもつ読者は多いかもしれない。端的に言って、哲学における概念創造は、結局は通史としての哲学史の内部の問題ではないかという疑問が湧くのではないだろうか。質問者も、対談のなかでドゥルーズの「哲学の本領はつねに概念を創案するところにある」⁽⁶⁾という断言を聞いているので、以下のような疑問をドゥルーズにぶつけている。「それにしても、新たな概念を創造する必要はどこに由来するのでしょうか。……今日、哲学の責務、哲学の必要性、そして哲学の「プログラム」さえもがあるとなれば、あなたは、それをどのように定義されますか。」⁽⁷⁾

ドゥルーズは、この問いに対して質問者を満足させるような答えを出しているようには見えない。けれども、その代わりと言っては語弊があるかもしれないが、『差異と反復』と「思考のイメージ」と「概念創造」との関連を説明しており、この説明は重要である。思考のイメージとは、何かいっそう深いものであり常に前提となるものである。それは、或る種の座標系、潜勢的力動

(dynamisme)の系、方向設定(orientation)の系であり、要するに、「思考すること」とおよび「思考のなかで方向設定すること」を意味するものであって、いずれにせよ「ひとは内在平面のうに存在する」。⁽⁸⁾ 内在平面(plan d'immanence)とは、『哲学とは何か』における定義によれば、思考のイメージのことであり、「思考と自然」あるいは「ヌース(精神)とピュシス(自然)」という二つの面をもつものである。⁽⁹⁾

さて、思考のイメージは、思考の秘密のイメージでもあって、これが展開したり、分岐したり、変異したりすることによって、新たな概念創造の必要性を引き起こす。⁽¹⁰⁾ 要するに、思考のイメージこそが概念創造を導くものである。そして思考のイメージに関する研究は「ヌース論(noologie)」であり、これが『差異と反復』の本当の目的であるとドゥルーズは言う。⁽¹¹⁾ ドゥルーズはこの対談で、『差異と反復』の第3章である「思考のイメージ」の章を『差異と反復』の根幹とみなしている。それは、「『差異と反復』アメリカ版(1994)への序文」(この序文はすでに1986年にドゥルーズによって書かれていた)⁽¹²⁾の末尾で言われていたことでもある。ところが、『差異と反復』の第3章では「イメージなき思考」の重要性が説かれている。よく指摘されることだが「思考のイメージ」の機能が変更された、と見てよいのだろうか。これについては以下で少しばかり考察することにしよう。

ところで、この対談の質問者は『差異と反復』をあまり重要視していないようだ。それは、『差異と反復』(および『意味の論理学』)を支えている精神分析が、『アンチ・オイディプス』では打ち倒すべき敵になっているということを質問者が重要視しているからであり、また、『アンチ・オイディプス』が、六八年五月(革命)の情勢に関する最初の偉大な哲学書、その最初の真の哲学的宣言であったとみなしているからである。⁽¹³⁾ それに対して、『差異と反復』は、その出版は六八年だが六八年五月(革命)以前に書かれていたこともあり、具体的な社会革命の宣言書ではないからでもあろう。

さらに質問者は、概念創造の必要性の由来に関するドゥルーズの返答に満足がいかなかったのか、哲学者の政治的行動について以下のような質問をドゥルーズに投げかけている。「あなたは、フーコーと共に、GIP(監獄情報グループ)に所属しました。コリュージュ(毒舌で知られる有名なコメディアン、俳優)の大統領立候補に賛成する署名をしました。パレスチナを支持する立場を表明しました。ところが、「68年以後の時代」からはむしろ、あなたは、ガタリよりもはるかに「寡黙」であったように思われます。人権運動とは無縁のままであったし、法治国家の哲学とも無縁でした。それは、わざとそう決めたからなのでしょうか、故意の沈黙によることなのでしょうか、それとも失望があったから

なのでしょうか。社会における哲学者の役割というものがあるのではないのでしょうか。」⁽¹⁴⁾ この質問に対するドゥルーズの答えの末尾は、こう締めくくられている。「わたしたちが望むことができ、現代社会に完全に適した唯一のコミュニケーションは、アドルノのモデルすなわち投擲通信（海難者が手紙を入れたビンを海に投げ込む）か、ニーチェのモデルすなわち一人の思想家が矢を放ち別の思想家がその矢を拾うかのいずれかである。」⁽¹⁵⁾

もう少し積極的な姿勢をドゥルーズに示してほしいかと思う読者もいるだろうが、しかしこの対談の一九年前、『差異と反復』出版直後、そして『意味の論理学』出版直前に行われた、「ジル・ドゥルーズ哲学について語る」と銘打たれた対談の末尾では、「革命なるものの現在の問題、官僚制を伴わない或るひとつの革命の問題は、新たな社会的人間関係の問題であろう。新たな社会的人間関係とは、そこにおいて特異なものたち、つまり能動的な少数派が、所有地も囲い地もないノマド空間のなかに登場するような社会的人間関係である」⁽¹⁶⁾ と言われている。『差異と反復』を書きあげたとき、ドゥルーズはすでに、精神分析への対応は別として、『アンチ・オイディプス』の基本的なスタンスをもっていたと言えるだろう。（『差異と反復』における「ノマド」については別の機会に論じよう。）

私は、今は、上記の 1988 年の対談「哲学について」におけるドゥルーズの結論（アドルノのモデルかニーチェのモデルか）については何も言わないでおこう。そして、ドゥルーズの著作活動の第 3 段階つまり 3 番目の時期についても触れないでおこう。

∴

本論が問題にするのは、『差異と反復』までのドゥルーズにおける精神分析への対応である。まず、『差異と反復』のアメリカ版の序文で示された『差異と反復』の独特な位置を見ておこう。ドゥルーズはこう語っている。

「……私を襲い熱狂させたヒューム、スピノザ、ニーチェ、ブルーストを研究したあと、私は「哲学すること」を試みたのだが、その最初の著作こそ、『差異と反復』であった。その後の私の仕事はすべて、この書物に繋がっていた。ガタリとの共著でさえそうである（もちろん私は今自分の観点から語っている）。では、どうしてひとりの人物にしかじかの問題が結びつくのだろうか。たとえば、なぜ、私に取りついたのは差異と反復であって、それ以外のものではないのだろうか。しかも、差異と反復は、別々にではなく、結合したかたちで私に取りついたのである。もとよりこれに答え

るのはたいへん難しいのだが、ともあれ、差異と反復は、必ずしも新しい問題ではない。なぜなら、哲学史は、そしてとりわけ現代哲学は、つねにこの問題に取り組んでいたからである。……」⁽¹⁷⁾

ドゥルーズは、これを、『差異と反復』出版から 18 年後、自死する 9 年前の 1986 年、六一歳のときに書いた。彼は、このときすでに、『差異と反復』以後の大作のほとんどを刊行している。この序文は、ドゥルーズが晩年におのれの仕事を回顧して書いたものであろう。これによれば、『差異と反復』は「哲学すること」を試みた最初の著作であり、その後の彼の著作はすべて『差異と反復』に繋がっている。では、どのように繋がっているのだろうか。この「アメリカ版への序文」の末尾で、ドゥルーズはこう答えている。「……わたしたちが、樹木のモデルとは対照的なリゾームという植物的モデルを思考のために援用するときには、『差異と反復』の第 3 章こそが、それ以降のもろもろの書物にまで、しかもガタリとの共同研究にまでも、樹木的思考ではなく、〈リゾーム思考〉を導入しているように思われる。」⁽¹⁸⁾ こう語ったとき、ドゥルーズは『差異と反復』を『千のプラトー』の観点から捉え直しているように見える。しかしここではまだ、「概念創造を導く思考のイメージ」は登場せず、超克すべき「思考の古典的イメージ」の代わりに、「思考の或る新たなイメージ」あるいは「思考を投獄するイメージに対する思考の解放」⁽¹⁹⁾ が主張されているだけである。この序文を書いた 1986 年においては、思考の解放の観点から「思考のイメージ」が問題にされているだけだが、その二年後に行われた対談「哲学について」では、『哲学とは何か』の構想が熟しつつあり、『差異と反復』第 3 章が、「概念創造を導く思考のイメージ」の観点から捉え直されたと言ってよいだろう。しかも『千のプラトー』も『哲学とは何か』における概念創造の視点から捉え直されている。

「ヒューム、スピノザ、ニーチェ、ブルーストを研究したあと、私は哲学することを試みた」とドゥルーズは言うが、では「哲学を試みる」以前の、つまり『差異と反復』以前の諸著作と、『差異と反復』とはどのような関係にあるのだろうか。言い換えるなら、以前の哲学的研究は、『差異と反復』における「哲学すること」に生かされたのだろうか。たしかに、『差異と反復』はそれ以前の著作から多くの材料を集めている。これを詳細に列挙することは今はできないが、少しだけ例を挙げるならば、『差異と反復』第二章の冒頭は『経験論と主体性』を、第二章の純粋過去論は『ベルクソニズム』を踏まえた議論であるし、またカント、プラトン、ライプニッツと並んで同じように数多く何度も言及されるニーチェは『ニーチェと哲学』（1962）を踏まえて論じられている。

たとえば、「ドラマ化 (dramatisation)」はすでに『ニーチェと哲学』で論じられていた概念である。なるほど『差異と反復』を創造的に読むためには、それ以前のドゥルーズの著書を読んでおく必要はないだろうが、しかし以下で見ると、『差異と反復』に至るドゥルーズの問題意識、それも『アンチ・オイディプス』における反精神分析の声高な主張によって隠れてしまった『アンチ・オイディプス』以前の問題意識、これを明るみに出すことは無意味ではない。本論は、反精神分析の声高な主張によって隠れてしまったドゥルーズの問題意識、換言すれば精神分析の哲学的解釈に焦点を合わせるのだから、『差異と反復』以前のいくつかの著作におけるフロイト及びラカンへの言及を問題にしなければならない。ただし、前期ドゥルーズの諸著作における精神分析論だけでも、まとめれば全体としては膨大な量になる。また、『差異と反復』におけるフロイトへの言及は、その「序論」、「第二章」、「第五章」、「結論」で離散的になされており、ラカンへの言及は、フロイトよりもはるかに少なく、「第二章」に集中している。そして「第二章」の後半部では、時間論に即して精神分析理論が検討されているのだが、拙訳はラプラシユとポンタリスの『精神分析用語辞典』（みすず書房）の訳語に合わせてドゥルーズの精神分析に関する叙述を、正直なところ何とか日本語に転換したのであって、私が現在進めている『差異と反復』の改訳においてもっと精密な訳文をつくることのできたときに『差異と反復』における精神分析論に関して立ち入ったことが言えるだろう。これからドゥルーズの諸著作を見ていくのだが、したがって以下、やや表層的かつ形式的な考察にならざるを得ない。

だがその前に、ドゥルーズにおけるいわゆる八年の空白を考えなくてはならない。上記の対談「哲学について」のなかで、ドゥルーズはこう語っている。

「書誌的にして伝記的な基準で振り返ってみたらどうかということなら、私は自分の最初の本をかなり若い時に書き、それ以後八年間はもう何も書かなかったということがわかります。……それは、言わば私の人生における空白部 (trou)、八年の空白部のようなものです。それこそが、人々の人生において私に興味深く思われるもの、つまり人々の人生に含まれる空白部、ドラマティックなこともあれば、そうでないこともある欠落なのです。……おそらくこのような空白部においてこそ、運動がなされるのです。というのも、壁にぶつかって行き詰まらないためには、どのようにして運動をするべきか、どのようにして壁を突き抜けるべきか、これがまさに問題になるからです。それはおそらく、動きすぎないことによって、しゃべりすぎないことによっ

てなされることなのでしょう。それは偽の運動を避けるということ、記憶がもはや存在しないところにとどまるということです。……」⁽²⁰⁾ (この「記憶がもはや存在しないところにとどまる」とは、以下で言及する『ニーチェと哲学』における「忘却の能力」のこだまだろう。)

ドゥルーズの最初の本とは、もちろん『経験論と主体性』(1953年)であり、八年後の本は『ニーチェと哲学』(1962年)だろう。ドゥルーズは、『経験論と主体性』以後八年間は何も書かなかったと言うが、実際は、その間にベルクソンに関する二つの論文「ベルクソン 1859-1941」(1956)と「ベルクソンにおける差異の概念」(1956)を発表し、一つのベルクソン選文集『記憶と生』(1957)を刊行している。だが今は、これは無視してよいだろう。この八年の空白は、「壁を突き抜ける」ドゥルーズの苦闘の期間と見ることができる。こう推測させるのは、八年後に公開されたドゥルーズの著作群である。以下に列挙しよう。

『ニーチェと哲学』(1962)：フロイトに言及。

『カントの批判哲学』(1963)。

『ブルーストとシーニュ』(1964)：フロイトに言及。

『ベルクソニズム』(1966)。フロイトに言及

『ザッヘル=マゾッホ紹介』(1967)：フロイトとラカンに言及。

『差異と反復』(1968)：フロイトとラカンに言及。

『意味の論理学』(1969)：フロイトとラカンに言及。

『アンチ・オイディプス』(1972)：反精神分析宣言

ドゥルーズは空白の八年の後、ほとんど毎年のように本を出している。しかもほとんどの本が、多かれ少なかれフロイトに言及している。したがって、この八年の間ドゥルーズは、ベルクソンを研究する以外は悩むばかりで、八年経過してからあわてて精神分析に取り組んだとは考えにくい。あくまで推測にすぎないが、ニーチェやカントだけでなく、フロイト並びにラカンも読み込んでいたのではないだろうか。では、哲学史家として出発したドゥルーズは、自分の最初の本『経験論と主体性』を書きあげてから、フロイトに接近したのだろうか。だが、『経験論と主体性』には、早くもフロイトに、ただし簡略に言及している箇所がある。「連合諸原理によって説明のつくものは、せいぜい思考一般の形式であって、特異な思考内容ではない。……この点では、ベルクソンとフロイトほど異なった著者たちでさえも一致している。……どれほど控えめに言ったとしても、ヒュームこそそれを考えた最初の人である。」⁽²¹⁾ ヒューム論にベルクソンとフロイトを挿入しているということから、ドゥルーズは、若いころか

らベルクソンのみならずフロイトにも関心をもっていたことがわかる。フロイトへの接近は、後になってから思いつかれたことではない。さてわたしたちは、8年の空白の後に書かれた『ニーチェと哲学』と『ザッヘル=マゾッフ紹介』を見ることにしよう。この二つの著書は、フロイトを正面から扱っているばかりでなく、ともに『差異と反復』への助走と見られる部分をもっていると思われるからである。

ドゥルーズが立ち入ってフロイトを取り上げる最初の作品は『ニーチェと哲学』である。そこで、『ニーチェと哲学』の第四章「ルサンチマン（恨み）の原理」における意識と無意識の、そして能動と反動の複雑な関係を論じるドゥルーズの力業を見ることにしよう。ドゥルーズはここで、フロイトの『夢判断』（『夢解釈』）に基づいて局所論の仮説をニーチェのルサンチマンの思想に見いだそうとするからである。ドゥルーズによれば、フロイトの局所論は、「知覚可能な刺激を受けながらも、それを保存せずしたがって記憶をもたない心的装置の外的システム（意識）」と「そのシステムの背後にあって、その一時的な刺激を持続的痕跡（記憶痕跡）に変える別のシステム（無意識）」を区別する。ドゥルーズは、『夢判断』（『夢解釈』）から「われわれの思い出（souvenirs）は、本来無意識的である」そして「意識は記憶痕跡が中断するところで生まれる」という文章を引用する。⁽²²⁾ ニーチェも、『道徳の系譜』において、フロイトにおけるように、反動的装置（心的装置）の二つのシステムつまり意識と無意識を区別しているとされる。ということは、ニーチェにおいても、意識と無意識は反動的（反動的）であるということだ。まず反動的無意識は持続的痕跡つまり記憶痕跡によって定義されるものである。無意識における反動は記憶痕跡に対する反動だと言ってもよい。だが、環境への適応が可能になるためには、無意識とは異なる別のシステムつまり意識が必要になる。意識というシステムは、現前する刺激に対する、あるいは対象の直接的なイメージに対する反動である。ドゥルーズはさらに、ニーチェに、意識を支える或る能動的な力を見る。これは超意識的な「忘却の能力」とされる。心理学の誤りは、忘却を、ネガティブな決定作用とみなして、その能動的でポジティブな性格を見出さなかったところにある。忘却のニーチェ的定義は、「ものごとを再生させ、治療する、可塑的な力」である。こうして、意識においては反動の対象は刺激であるがゆえに、その反動は能動化させられるものに生成し、それと同時に、痕跡に対する反動は感じられないものとして無意識のなかにとどまる、とドゥルーズは言う。この忘却の能力は、能動的であるにもかかわらず、反動的な意識と無意識のもとに派遣されるものである。⁽²³⁾

ところが、この忘却の能力が衰弱するときには、意識は硬化し、

意識における刺激は無意識における記憶痕跡と混同され、逆に、無意識における痕跡に対する反動は意識へと上り、意識に侵入するようになる。こうして、無意識における痕跡への反動は感じられるものに生成し、それと同時に、意識における刺激への反動は能動化させられなくなる。痕跡が反動的装置つまり心的装置のなかで刺激にとって代わるとき、反動そのものが能動に取って代わり、反動は能動に対して優位に立つ。そして反動的装置の内部で、反動的諸力（意識と無意識）は能動化されることを互いに妨げあう。⁽²⁴⁾

ところで、ルサンチマン（恨み）を生じさせるためには反動だけでは不十分である。ルサンチマンを反動という力だけによって定義してはならない。ルサンチマンは、反動が能動に対して優位に立つというかたちで成立するからである。そして反動は、能動化させられるのをやめることによってようやく能動に対して優位にたつ。ルサンチマンの人間とは、「再-〈行動=能動化〉する（ré-agir）」のではない人間である。⁽²⁵⁾ こうして、ドゥルーズは、ルサンチマンとは、感じられるものになると同時に、能動化されなくなる或るひとつの反動（反作用）であると定義する。したがって、ルサンチマンにたんなる復讐の欲望や反逆と勝利の欲望⁽²⁶⁾を見るだけでは、以上のようなルサンチマンの位相的構造は理解できないことになる

では、ドゥルーズはフロイトに対して全面的に賛同しているのだろうか。『ニーチェと哲学』の長い原注で、ドゥルーズは一応、ジョーンズによればという前提で、フロイトはニーチェからの影響をはっきり否定したという点を強調する。（もちろん、フロイトの諸著作がニーチェに影響を及ぼしたことはその発行年からして不可能である。）けれども、フロイトが「局所論の仮説」と呼ぶ生の図式とニーチェの図式は一致する。だがそれでもなお、両者の差異はある。あくまで想像できるという話だが、つまりやや苦しいドゥルーズの議論ではあるが、ニーチェはフロイト風に考えたことがあるかもしれないにしても、それでもニーチェは、フロイトにおける心的な生についてのあまりにも「反動的な」考え方を、真の「能動性」に対する無視を、そして真の「価値変更（昇華）」を構想できないということを非難したであろう、とドゥルーズは述べる。⁽²⁷⁾ ここからわかるのは、ドゥルーズは、フロイトを手放しで賛美しているのではないということだ。

わたしたちはつぎに、『ザッヘル=マゾッフ紹介』（1967）を見ることにしよう。周知のようにドゥルーズは、この書で、フロイトのサド=マゾヒズム、あるいは自我に向かって反転したサディズムとしてのマゾヒズムという概念を批判し、マゾヒズムをサディズムから切り離してマゾヒズムの独自性を論じている。ところで『ニーチェと哲学』の5年後、ようやくこの書で、ラカンが

登場する。そして、ラカンに依拠しながらフロイトの「否認 (Verleugnung dénegation)」の重要性を指摘する。ドゥルーズは、フロイトの「否定 (Verneigung)」、「排除 (Verwerfung)」、「否認 (Verleugnung)」という概念の重要性を、ラカンが明らかにしてくれたと言う。そしてラカンの否認の概念にもとづいて、ドゥルーズは次のように語る。「おそらく、否認を、以下のような操作の出発点として理解しなければならない。すなわち、否定することでもなく破壊することさえもなく、むしろまさに、存在するものの正当性に対して異議を唱えるという操作、所与のあなたに所与ではない或る新たな地平をわたしたちに開くという作業に固有な一種の宙吊り (未決定状態) や中性化によって存在するものを変様するという操作である。」⁽²⁸⁾「マゾヒズムは、否認から宙吊りへ赴く。超自我の圧迫からおのれを解放するプロセスとしての否認から、理想を受肉するものとしての宙吊りへ赴くのである。・・・否認は、超自我を忌避し、そして、超自我から独立した、純粹で、自律的な「理想自我 (理想的自我)」を生まれさせる能力を母なるものにゆだねるのだ。」⁽²⁹⁾

フェティシズムも本質的にマゾヒズムに属している、とドゥルーズは語る。フロイトの『呪物崇拜 (フェティシズム)』から、ひとつの文章が取り出される「フェティッシュとは、女性のファルス (phallus) のイメージあるいはその代用物である。」⁽³⁰⁾ ドゥルーズによれば、フェティッシュとは、女性にはペニスが欠如していることを否認するひとつの手段である。フェティッシュによって、ペニスの権利上のつまり論理上の維持が可能になる。否認において、現実に関する認識は、宙吊りにされ中性化されるからである。

ラカンがその重要性を明らかにしたと言われる「否認 (Verleugnung)」の概念はこのように肯定的に論じられ、ラカンは称揚されるのだが、マゾヒズムにおいてまた、ラカンは批判される。ドゥルーズによれば、マゾヒズムはバウハーフエンに影響されて三つの女性的典型をつくりあげた。⁽³¹⁾ そして、この三つのタイプの女性 (母) はひとつの象徴的次元 (象徴界) を構成しており、その次元のなかでは、父ははすでに削除されている。ところが「精神分析が、そのもっとも進んだ探求 (ラカン) において、象徴的次元 (象徴界) の創設を「父の名 (nom du père)」に結びつけているのを見れば、驚くのは当然である。母は自然に属し、父が文化の唯一の原理であり法 (loi) の代表であるというのは、奇妙にもあまり分析的でない考えを維持することではないか。マゾヒストは、象徴的次元を、母相互的なものとして生き、この次元で母が法と一体化するような条件を定立するのである。」⁽³²⁾

ラカンがその重要性を明らかにした「否認」によってマゾヒズ

ムは、ドゥルーズから見れば、そのラカンは、ドゥルーズにとってはマゾヒズムにおいて相互女性的であるはずの象徴的次元を、法の根拠になる「父の名」に結びつけていることになる。

ところで少し回り道をするが、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』は、周知のようにマルクスがルイス・モーガンの『古代社会』から書き抜いた様々な抜粋に基づいて出来上がった書である。そしてその『古代社会』の副題が示す文明の進化の三段階 (from Savagery through Barbarism to Civilisation) が、『アンチ・オイディプス』第 3 章の題目として借用されている《SAUVAGES, BARBARES, CIVILISES》。さて、そのバウハーフエンが、「母権制」に関してモーガンに影響を与え、そのモーガンがマルクス、エンゲルスに影響を与えたことは、よく知られている。私が言いたいのは、『ザッヘル=マゾヒズム紹介』においてドゥルーズがマゾヒズムに関してバウハーフエンを取りあげてラカン批判をしたとき、すでにエンゲルスまで念頭にあった可能性があるということである。後に『アンチ・オイディプス』は「エンゲルスは・・・バウハーフエンの天才を讃えている」と書き、『家族・私有財産・国家の起源』から引用を行っている。⁽³³⁾ したがって、『差異と反復』に先立つ『ザッヘル=マゾヒズム紹介』において、『アンチ・オイディプス』につながる潜在的な線がすでに延び始めていたのではないだろうか。ガタリとの出会いによって、その潜在性が一見過激な形で現働化したとも言うことができるだろう。だが、これは状況証拠による私の推測でしかない。このような潜在性が現働化するプロセスを諸著作のテキストにそくして明らかにするのは、今後の私の課題でもある。

最後に、「発狂した概念創造の企て」である哲学史『差異と反復』における精神分析関係の議論を少しばかり見ておこう。少しばかりというのは、すでに述べたように、『差異と反復』を改訳中であり、特に精神分析関係の論述で使われているドゥルーズの用語、表現をどう訳すべきか、つまりどう解釈すべきかで多少の迷いがあり、また、『差異と反復』で重要視され引用も行われているラカンの論文「〈盗まれた手紙〉についてのセミナー」も翻訳中であり、そのとんでもない文体に悩まされている最中であるからだ。さて、精神分析の諸概念の検討は『差異と反復』のなかで離散的に行われている。繰り返す言うが、もっとも詳細なその検討は第二章の後半で遂行されている。第二章の前半で三つの「時間の総合」が展開され、その後半で三つの「時間の総合」それぞれに即して精神分析的諸概念の時間性が問題にされている。では「時間の総合」あるいは時間の「受動的総合」とは何か。これを第二章の前半の時間論において十分に解明しないことには、第二章の後半におけるフロイトの諸概念の時間的意味を説明することはで

きない。だが、ここで第二章の前半の時間論を詳述する余裕はない。したがって、今は外的な説明から始めよう。

『受動的総合』は、名称としては、フッサールの『デカルト的省察』第38節「能動的発生と受動的発生」、あるいはメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』第3部「Ⅱ 時間性、4 現前野、過去と未来の地平、作動的指向性」の記述から取られたのかもしれない。しかし、「時間の総合」という名称は、ハイデガーの『カントと形而上学の問題』第32節以下の論述から影響を受けていると見て間違いはないだろう。⁽³⁴⁾

ハイデガーは、カントの『純粋理性批判』第1版におけるいわゆる「三段の総合」、すなわち「1、直観における覚知の総合」、「2、構想力（想像力）による再生の総合」、「3、概念による再認の総合」に現在性、過去性、未来性をあてがっている。これに基づいて、カントの三つの「総合」が「時間の総合」と呼ばれることがあるようになった。けれども、ドゥルーズの「時間の総合」は、ハイデガーによるカントの「三段の総合」の時間解釈を引き継いではいないように見えるが、ドゥルーズを、ハイデガーと、そして上記のフッサール、メルロ＝ポンティと比較して検討することは無意味ではないだろう。

『差異と反復』第2章前半における三つの時間の総合：「時間の第一の総合」は、「生ける現在」を中心にして論じられる時間論であり、「経験的な受動的総合」と呼ばれる。ヒューム、ベルクソン、フッサール、とりわけフッサールの『内的時間意識の現象学』が参照されて、過去と未来は「生ける現在」の二つの次元であるとされる。；「時間の第二の総合」は、「純粋過去」を中心にして論じられる時間論であり、「超越論的な受動的総合」と呼ばれる。純粋過去とは「かつて現在であったことがなく、現在が過去になったのでもない過去」であり、その例として、ブルーストの『失われた時を求めて』のなかに登場するコンプレという町（忘却のなかに出現する即自）や、プラトンのイデアなどが挙げられている。；「時間の第三の総合」は「空虚な形式としての時間」を中心にして、未来がテーマとなる時間論である。ただし、これは「受動的総合」とは呼ばれていない。ニーチェに基づいて、未来は反復とされ、この反復が永遠回帰とみなされる。未来の反復としての永遠回帰は、過去も現在も回帰させず、絶対的な新しさつまり差異を生産する。

『差異と反復』第二章の後半では、『快原理の彼岸』（『快感原則の彼岸』）がテーマとして掲げられ、それが変奏されていく⁽³⁵⁾。

『快原理の彼岸』は、まず、ひとが快を「原理的に」追求するようになる価値を当の快はそなえていないということの意味しているのだが、そればかりでなく、快が実際に原理へと生成する諸条件を規定するというをも意味している。以下に使われる精

神分析関係の用語の詳しい意味については、ラプランシュとポンタリスの『精神分析用語辞典』を見ていただきたい。また、以下の文章は、ドゥルーズによる断定をたんに要約したものであって、その断定の妥当性は考慮に入れていないことをお断りしておく。

1、「拘束」された興奮の水準にしたがって、受動的で、部分的な、縮約する自我が、つまり局所的な自我たちが形成され、それらが「エス (Es Ça)」を満たす。そして拘束が遂行されるときに、それら局所的自我が「エス」に固有な時間を、すなわち生ける現在を構成する。興奮の拘束は、習慣という純粋な第一の受動的総合を意味しており、これが満足一般の原理の価値を「快」に与えるのである。⁽³⁶⁾ 2、ドゥルーズは、深化した第二の受動的総合において、全体化されえない「部分対象」が観照されるようになるという。この部分対象は潜在的対象でもあり、その例として、メラニー・クラインの「良い対象と悪い対象」、ウィニコットの「移行（あるいは過渡）対象」、ラカンの「対象 a」が挙げられている。「おのれ自身の現在と同時的であり、過ぎ去る現在に先立って存在しており、あらゆる現在を過ぎ去らせる純粋過去がそうした潜在的対象の質を表している。」⁽³⁷⁾ 第一の受動的総合（生ける現在）が、第二の受動的総合（純粋過去）に深化して、これが幻覚性の特殊なナルシシズムの満足を蓄え、そうした満足を潜在的対象の観照における満足とする。このとき、快原理は、二つの新たな条件を、すなわち「自己保存欲動」と「性欲動」を受け取ることになる。3、三つの「時間の総合」は、無意識の構成要因である。それは「快原理」の三つの彼岸でもある。第一の総合（生ける現在）は、時間の土台である。この土台が「快」に経験的原理の価値を与える。第二の総合（純粋過去）は、時間の根拠である。この根拠が、「快原理」を自我の内容に適用する。しかし、第三の総合（形式としての時間）は、「無底」を指し示している。すなわち、タナトス（ドゥルーズでは「死の本能」）が、エロス（生の本能）という根拠と、習慣という土台との彼岸において、「無底」として見出されるということだ。タナトスは、『快原理』と独特の関係を結んでいる。これは、苦に結びついた快というパラドックスにおいて表現されることが多い。⁽³⁸⁾

以上、急ぎ足で『差異と反復』第二章後半における精神分析概念の時間性を見てきたが、『差異と反復』では、フロイトやラカンに対する批判は顕著ではない。私は、以前は、『差異と反復』第二章前半の時間論の特異性を、フッサールやハイデガーの時間論から考えようとしていたのだが、そしてもちろん『差異と反復』の読み方は各人に任せられているのだが、今は、ドゥルーズの時間論は主にフロイト（『快原理の彼岸』）解釈へのかけはしでもあると考えるようになった。8年の空白の後、ドゥルーズは、『ニーチェと哲学』（1962）から『意味の論理学』（1969）に至るまで、

矢継ぎ早に著書を刊行し、そのほとんどでフロイトを扱っている。ところが、その3年後『アンチ・オイディプス』(1972)における反精神分析宣言である。あの1988年の対談「哲学について」において、ドゥルーズは、『アンチ・オイディプス』が「68年以後の時代」において重要な本になったとすれば、フロイト＝マルクス主義のあらゆる企てと手を切ったからだと答えている。そしてドゥルーズは、『アンチ・オイディプス』が精神分析を批判しようとするのは、この本で、良かれ悪しかれ、詳細に論じられている無意識という考え方に関連してのことです。」と語っている。⁽³⁹⁾ドゥルーズは、つとめて、『アンチ・オイディプス』は哲学書であると、すなわち、社会的であると同時に欲望的な生産を同一の平面に置いて論じようとする本であると主張し、この本の政治的プロパガンダの面には触れないようにしている。ドゥルーズは、実際のところ、『アンチ・オイディプス』以前のフロイトへの言わば長い自分の執着をどう考えていたのだろうか。それは知るよしもないことだが、私は、とりわけ『ニーチェと哲学』、『ザッヘル＝マゾッホ紹介』、『差異と反復』、『意味の論理学』におけるフロイト論は、決して過去の無駄な努力ではなく、わたしたちが新たに光を当てるだけの価値をもった貴重な哲学的精神分析論であると信じている。

追補：本論の冒頭で言及した85年におけるドゥルーズ自身による自著の分類は、ドゥルーズのテキスト集を作るための原案であった。ここでは、『ザッヘル＝マゾッホ紹介』から始まって、10冊の著書が並べられ、9番目に『意味の論理学』が置かれ、『差異と反復』で締めくくられている。これは出版年による分類ではないので、この分類の順序はドゥルーズ思想の時間的发展を表現しているのではないだろうが、『差異と反復』の翌年に出版された『意味の論理学』が『差異と反復』の前に置かれている点に注目してよいだろう。また、89年の分類では、85年のそれよりもはるかに多くの著作が11のテーマにそくして分類されており、本論で言及したように8番目に『意味の論理学』、9番目に『アンチ・オイディプス』、10番目に『差異と反復』、そして『千のプラトー』で締めくくられている。ここでもやはり、『意味の論理学』が『差異と反復』の前に置かれている。私は、この順序に加えて、『意味の論理学』の内容から考えても、『意味の論理学』は、『差異と反復』におけるいくつかの概念や論題の解説あるいは手引きではないかと思っている。『差異と反復』の改訳が完成したら、この点について詳論するつもりである。

注

ドゥルーズのテキストからの引用等については、既存の邦訳に従っていない場合がある。

1. 『無人島 1953-1968』河出書房新社、2003年、p7、p11。『ドゥルーズ 書簡とその他のテキスト』河出書房新社、2016年、p10-17、p134-137。
2. 『記号と事件』河出書房新社、2007年、p272。
3. 同書、p273。
4. 同書、p273。
5. 『哲学とは何か』河出書房新社、2012年、p8-9。
6. 『記号と事件』、p273。
7. 同書、p299。
8. 同書、p299。ただしこの箇所の原文の読みと解釈は『哲学とは何か』p68に従った
9. 『哲学とは何か』、p68、p70。
10. 『記号と事件』、p303
11. 同書、p301。
12. 『狂人の二つの体制 1983-1995』河出書房新社、2004年、p162。
13. 『記号と事件』、p290
14. 同書、p308。
15. 同書、p312。
16. 『無人島 1953-1968』、p306。

17. 『狂人の二つの体制 1983-1995』、p157-158
18. 同書、p162。
19. 同書、p161。
20. 『記号と事件』、p277-278。
21. 『経験論と主体性』河出書房新社、2000年、p161-162。
22. 『ニーチェと哲学』河出書房新社、2008年、p224。『フロイト著作集2』人文書院、1983年、p444参照。
23. 『ニーチェと哲学』、p224～227。
24. 同書、p227～228。
25. 同書、p223。
26. 同書、p233。
27. 同書、p415。
28. 『ザッヘル=マゾッフ紹介』河出書房新社、2018年、p45～46。
29. 同書、p191～192。
30. 同書、p46。『フロイト著作集5』人文書院、1995年、p392参照
31. 『ザッヘル=マゾッフ紹介』、p80～81。
32. 同書、p96～97。
33. 『アンチ・オイディプス 上』河出書房新社、2006年、p206。『アンチ・オイディプス 下』河出書房新社、2006年、原注41、p359。
34. 法政大学「法政哲学」第13号（2017）における拙論『『差異と反復』の解析と再構成の試み——1——』参照。
35. 『差異と反復 上』河出書房新社、2007年、p263～313。
36. 同書、p265-266。
37. 同書、p277。
38. 同書、308-309。
39. 『記号と事件』、p292～293。

【論考】

『ドゥルーズ 流動の哲学』と『ドゥルーズ 解けない問いを生きる』を読み直す ——合理性の観点から

得能 想平

二〇一九年から二〇二〇年にかけて、日本におけるドゥルーズ研究のメルクマールをなす、宇野邦一『ドゥルーズ 流動の哲学』、(以下『流動の哲学』)と檜垣立哉『ドゥルーズ 解けない問いを生きる』(以下『解けない問いを生きる』)の二著が改訂再版された⁽¹⁾。本稿は、これを機に改めて両著作に見いだされるドゥルーズ哲学の大枠と合理性の位置づけに関して論じてみたい。

ここでの合理性とは、社会が成立するために不可欠な言語的なものと大まかに定義しておきたい。元々二〇〇一年と二〇〇二年に相次いで出版された二著は、ドゥルーズ哲学における「感覚されることしかできないもの」としての差異を中心的主題の一つとして扱っており、この意味でドゥルーズの反合理主義的な側面を強調する著作である。われわれは後にこのような議論を差異の感性論として確認することになるだろう。ただし、両著作はこの差異に対する合理性の位置づけについての重要な示唆も行っているように思われる。本稿は両著作が示すドゥルーズ哲学の大枠を素描したのち、これらの示唆を拾い上げることで、ドゥルーズ哲学における合理性の位置づけについても考えてみたい。

二著の解釈には、差異の感性論以外にも共通点がある。それは、人間主体を、非観念論的なものと見なし、一種の実在的な領野としてとらえる考え方である。この意味で、両著作は、マルティン・ハイデガーやモーリス・メルロ＝ポンティに見られる場として主体の考え方を、ドゥルーズも一定程度継承するものと見なし得ると言える。ただし、これらの共通点にも関わらず、二著には相違点も多い。われわれはこのことについても触れることになるだろう。

第一節では宇野の解釈が、触発と表現行為に関わる「平面」として個体を捉えるものであること、さらに合理性に関する示唆を内在と絶対という二つの観点から見いだせることを確認する。第二節では、檜垣の解釈が「卵」における未決定性と環境の対として「私」を捉えるものであること、そしてこの対のおのおのが別の仕方でも合理性に関わることを確認する。最後にこれらの議論をまとめつつ、ドゥルーズ哲学における合理性の位置づけの問題に

ついて改めて考えてみたい。

第一節

われわれは、『流動の哲学』のキーワードの一つとして「触発」を挙げることができる(宇野 2020:7)。「触発」のモチーフはこの著作に頻出する。例えば、宇野はドゥルーズの「わかりにくさ」を問題にしつつ、次のようにドゥルーズの思想を特徴づける。

けれども、おそらくドゥルーズのわかりにくさは(そしてわかりやすさは)、その思想が哲学として展開されながらも、哲学とはあくまで異質なものに触れていることからくる。長いあいだ思考の理想的モデルを与えてきた哲学が、そのような傾向そのものによって哲学を他の認識のうえに君臨させ、かえってみずからを内部に閉ざしてきたとすれば、ドゥルーズは哲学を外部に開くために哲学するという逆説的な試みを最後まで続けたからである(宇野 2020:38)

ドゥルーズの思想は、「哲学」でありながらも「哲学とはあくまで異質なもの」に関わり、「哲学を外部に開く」ことにこだわる思想である。言い換えるならば、宇野は、ドゥルーズの思想を外部からの触発を肯定するものと特徴づけるのである。

外部からの触発を肯定するとは具体的にどのようなことだろうか。例えば、『差異と反復』のドゥルーズの到達点は、次のように記述される⁽²⁾。

反復、理念、強度をめぐるドゥルーズの思索は、そのように「感覚するのが難しいが、感覚するしかない」差異に直面し、そのような差異にしたがい、そのような差異を解放しようとする試みやエティカそのものである。だからこそ、言語について考えるとき、あるいは身体について、イメージについて、欲望について、あるいは社会、歴史、政治について考えるときも、決してドゥルーズは、差異と反復、理念と強度に

について、このように深めてきた思索を手放すことがないのだ（宇野 2020:160）

ドゥルーズの思想は、「[「感覚するのが難しいが、感覚するしかない」差異]を肯定し、この差異の観点から、他のすべての主題を再考するものと捉えられる。要は、外部からの触発を肯定するとは、合理性に帰着されない感性を認め、それを議論の出発点に据えることである。われわれは、このような特徴づけを差異の感性論と呼ぶことができるだろう。

興味深いのは、『流動の哲学』の結論部において、差異の感性論が表現行為と結びつく点である。宇野は、ラース・フォン・トリアー監督の映画『ダンサー・イン・ザ・ダーク』に影響されたものと付け加えつつ、次のように述べる。

たとえば、映画の中で、救いようのないほど不幸な、無一物の虐げられた女が、歌い始め、踊り始めるとき、それは夢想と音楽の中に、不幸の代償を求めたわけではない。あらゆる悲しみや悲惨が、音楽の中で歌い上げられて消化されるといってもいい。悲しみが歌の素材であるように見えても、歌うこと、その運動、振動、飛躍がじかに「喜び」を原理としていなければ、そもそも歌うことなどできない。

それは実に奇怪な飛躍だけれども、世界のざわめき、騒音、人々や機械や列車の些細な動き、光と闇の交替が突然あらゆる障壁を超えて共振し合い、自然と人間の闘が震えだし、すべてが渦を巻いて、ひとりの女の心身を駆け抜け、その周囲の時空を巻き込んでいく。悲しみが喜びに変化したわけでも、悲しみが喜びのバネになったわけでもなく、世界、風景、音、光、物質と精神、感情と思考、内部と外部が、あらゆる否定性や固着や闘を超えて、通じ合い、交感し合い、共振し合っている。

そのとき、そこには喜びしかないのだ。喜びは、悲しみよりも、非人間的に見える振動にみちている。喜びは悲しみよりも、非主体的である。そして、ある種の音楽的状态は、主体も身体も退けて「器官なき身体」のようなものにならなければ成立しえない(…)（宇野 2020:317-318）

まさにここで記述された「女」は、極限的な差異の肯定と表現行為の一致を体現した存在として描かれる。「女」は、「世界、風景、音、光、物質と精神、感情と思考、内部と外部が、あらゆる否定性や固着や闘を超えて、通じ合い、交感し合い、共振し合い」、主客の区別をなくすことで、「喜び」を原理とした「器官なき身体」へと生成する。このとき、歌や踊りといった表現行為は、差

異の完全な肯定としての「器官なき身体」に対応する。

差異の感性論、表現行為、これらを結び付けるものは、ドゥルーズのスピノザ解釈に見いだされる身体論である。宇野は、『スピノザ——実践の哲学』に見られる以下の箇所に注目する。

ひとつの体[論者注：身体]をスピノザはどのように規定するか。スピノザはこれを同時に二つの仕方で規定している。すなわち、一方ではひとつの体は、たとえそれがどんなに小さくとも、つねに無限数の微粒子をもって成り立っている。ひとつの体を、ひとつの体の個性性を規定しているのは、まず、こうした微粒子群のあいだの運動と静止、速さと遅さの複合関係なのである。他方また、ひとつの体は他の諸体を触発し、あるいはそれらによって触発される。ひとつの体をその個性性において規定しているのは、また、その体のもつこうした触発し、あるいは触発される力なのである。（SPP 165=宇野 2020:80）

身体は、それ自身で速さと遅さを持つ「無限数の微粒子」と、身体同士の触発し触発される「力」によって規定される。そしてこのような身体は、よい触発によって、力が増大しより多くの微粒子との構成に入り、反対にわるい触発によって、力が減少しより少ない微粒子との構成に入る⁽³⁾。先の例にしたがって述べるのであれば、「微粒子」が器官なき身体の構成要素としての差異に対応し、他方で「力」がそのような「微粒子」にしたがってなされる表現行為に対応すると言えるだろう。

身体は、このような意味で、触発次第で変形する力と微粒子によって構成される「平面」としてとらえられることになる。宇野はこの「平面」を絶対性と相対性を兼ね備えたものと見る。

人格的な特徴を根こそぎにされた神という実体は、あらゆる様態（個体）を、触発の関係を通じてひとつに結合する平面のようなものにすぎない。人間に少しも似たところのない神-実体とは、全自然のことでしかない。

そのような平面は、自然と人間を貫通するあらゆる差異の広がりとして、あらかじめ存在するともいえるし、たえず構成され、再構成される実在の平面であるともいえる。また、新たなエティカを通じて、新たに構築すべき平面であるともいえる（宇野 2020:85）。

力と微粒子の「平面」は、「あらかじめ存在する」ような「神—実体」ないし「全自然」であると同時に、たえず触発によって「再構成」され、「新たに構築すべき」ものとされる。このような「平

面」のあり方こそ、宇野がまさに「流動」と呼ぶところのものである(宇野 2020:84)。宇野がドゥルーズ哲学に見いだす大枠とは、次のような個体観であると言えるだろう。それは、絶対性と相対性を兼ね備えた、触発にしたがって変化しうる「微粒子」と「力」の平面としての個体である。

このような個体観のうちに合理性の位置づけを見いだすことは難しい。むしろ、理性や知といったものは、触発を妨げるものとして「徹底的な批判」の対象と見なされる。

「喜び」の哲学は、いくつかの観念や体制に徹底的な批判を向けた。あらかじめある、とみなされ、生成と流動を閉め出し固定しようとする傾向をもつ、主体や理性や知や表象にいつも抵抗し、それらと一体の道徳、政治、権力の〈神聖同盟〉に対抗しようとした(宇野 2020:316-317)

「平面」としての個体の哲学は、「道徳、政治、権力の〈神聖同盟〉」に関わる合理性の排除と結びつく。『流動の哲学』の大部分は、合理性をこのようなネガティブな仕方であらわしているように思われる。しかし、宇野の記述のうちに、あえてポジティブな合理性の位置づけを見いだすことができるならば、どのようなものかを考えてみたい。

われわれは、二つの観点からの合理性についての示唆を見いだすことができると考える。第一に、合理性は超越的なものではなく内在的なものとして捉えられねばならない、というものである。われわれは先に「「感覚するのが難しいが、感覚するしかない」差異」の観点からそれ以外のものが捉えなおされるという宇野の解釈を確認した。このことが合理性に関しても適用されるのであれば、合理性は「道徳、政治、権力の〈神聖同盟〉」に関わる超越的なものとしてではなく、力と微粒子の「平面」と表現行為に関わる内在的なものとしてこそ思考されるべきであるということになる。われわれはここに、平面の縮小を妨げ、拡大を助けることで、豊かな表現活動の維持を可能にするプラグマティックな合理性の示唆を読み取ることができるだろう。われわれは後にこのような合理性が檜垣の解釈において、環境ないし習慣という定式化を与えられるのを見るだろう。

第二に、合理性は表現行為そのものにその対応物をもつ、というものである。宇野は著作の終盤で次のように述べる。

それほどまでにドゥルーズは、絶対や理性や真理によって、この世界を決定し、支配しようとした哲学者たちの超越的思考には、徹底して抵抗したのである。(…)けれども、決してそれはひとつの相対主義や犬儒主義を提起するためで

はなかった。彼は相対的なもの、多様なもの、断片的なものに、ある〈絶対〉を発見し、それに対応する理性も自由も発見している。この〈絶対〉は、変化、多様体、振動、出来事、差異、逸脱(脱線)の運動と、どこまでも共存し、それらに〈内在〉したのである(宇野 2020:310)

宇野のここでの議論は、平面において与えられる「相対的なもの、多様なもの、断片的なもの」に「ある〈絶対〉」が内在しており、この〈絶対〉に「理性」が対応するというものである。宇野は、〈絶対〉に関して、自身の「存在の一義性」に関する議論を念頭においていたに違いない(宇野 2020:133)⁽⁴⁾。宇野によれば、「存在」は「無限の差異」を含み「個物としてじかに表現される」ものである。われわれはこのことを踏まえて、平面における「表現される」ものの側面、すなわち力ないし表現行為が絶対的なものであると理解することができるだろう。要は、個体そのもののパースペクティブとしての「微粒子」は、触発にしたがって可変的なものであり相対的なものであるが、この「微粒子」に対応する力ないし表現行為は絶対的なものであり、このことに対応する「理性」があるということである。われわれは、このような合理性を作品の合理性と呼ぶことにしよう。確かにわれわれは『差異と反復』の第四章において、このような表現行為と諸理念の関係が問題にされていることを確認することができる⁽⁵⁾。

ただし、宇野の解釈がこれほどまでに近づいていたにもかかわらず、合理性の問題は宇野を触発しなかったようである。続編である『ドゥルーズ——群れと結晶』では、外部からの触発のモチーフが、ドゥルーズの哲学だけでなく他の思想家にも見いだされることを示す点に力点が置かれ、触発に内在するプラグマティックな合理性や〈絶対〉の合理性は追及されない。これに対して、われわれは、異なる仕方ではあるものの、檜垣の解釈のうちに、合理性の位置づけに関してより明示的な議論を見いだすことができると考える。

第二節

宇野と檜垣のドゥルーズ解釈にはさまざまな違いがある。例えば、解釈に関する方法論を挙げることができるだろう。宇野の著作は確かに多くの哲学的議論を参照するものの、それはドゥルーズの哲学の整合性を明らかにするためでも、新たな哲学の構築のためでもなく、あくまでも読者の触発を目指すためのものである⁽⁶⁾。これに対して、檜垣のドゥルーズ解釈は、ドゥルーズ哲学を現代ないし当時の思想的文脈のうちに位置づける点に特色をもつ。檜垣によれば、現代とは、「根拠」、「基盤」、「絶対的基準」といったものが失われた「解けない問い」の時代であり、ドゥルーズ

ズはこのような課題に、同時代の哲学者であるジャック・デリダとともに向き合ってきた哲学者である。デリダは情報の観点からこの問いに向き合い、ドゥルーズは生命の観点からこの問いに向き合ってきた（檜垣 2019:14-33）。宇野の方法論が、哲学を哲学の外に向けて開くことを目指すものであったのに対して、檜垣の方法論は現代的な課題を踏まえた新たな思想の構築を目指すものであったとすることができるだろう。

ところで、見いだされるドゥルーズ哲学の大枠から考えるのであれば、宇野と檜垣の解釈の最大の違いは自己についての議論を認めるかどうかであるように思われる。宇野の解釈において、個体は「触発」によって変形する力と微粒子の平面として捉えられていた。しかし、このような解釈は、個体の識別可能性に関して曖昧な点をもつように思われる。例えば、もし〈全自然〉との一体化する二つの個体があるとしたら、その二つはどのように区別されうるだろうか⁽⁷⁾。宇野が想定する「全自然」のうちには、無限の「全自然」を有限化し、個体の個性性を保証する自己の議論が不足していたのではないだろうか。檜垣の解釈は、宇野が提示した「平面」として個体の理解を踏まえつつ、この自己の問題に取り組んだものと見なすことができる。後に見るようにこのことは合理性により明確な位置づけを与えることを可能にする。われわれは、以下でこのような檜垣の議論を確認していこう。

檜垣のドゥルーズ解釈のキーワードは「卵」ということになるだろう。

生成とは何だろうか。未分化な卵が果たす生とは何だろうか。私はそれを、〈かたち〉なき場面に〈かたち〉が生じてくるような、つまり〈すがた〉なき世界から〈すがた〉が現れてくるような、力のみなき場面であると描きたい。ドゥルーズにとって、まずもってリアルであることとは、卵から何かが生じてくるような、新しさの生成の現場なのである（檜垣 2019:44）。

「卵」とはすべてに先立って存在する「力のみなき場面」であり、そこから〈かたち〉が浮かびあがる「新しい生成の現場」である。われわれは檜垣の述べる「卵」とは、すべてを生み出す自然のあり方を比喩的に示すものであり、人間、動物、その他の事物がそこで生成消滅する生命的な場であると理解することができる。檜垣は、この「卵」に内在する人間の「私」のあり方に注目して論じることで、ドゥルーズ哲学の特徴づけを試みていく⁽⁸⁾。

檜垣は、「卵」において「私」が生じることと「卵」が二側面へと分化することを等しいものととらえている。

私は無限に流れ [=卵] へとひらかれている。そこで私は流れに内在している。内在していることを自覚するとき、私は私をとりまくさまざまなもののあいだで、私の位置を限定し、かくして私が何であるかを知る。そのときに私とは、流れとしての世界に触れる現在 = 根拠のようなものではない。なぜならば、流れから切り出される私は、流れに先立って存在しはしないからだ。そして流れに内在するとき、その流れは、原理的に無限の広がりを持ち、それゆえに未決定的なものでもあるからだ。

つまり、流れのなかに内在しながら自己の動きを決定していくこととは、無限に広がる世界の姿を俯瞰しながら、一種の跳躍のような賭けをなしていくことである。自己の視点という定点を消し去って流れに内在することそのものが、ただちに無限の俯瞰をなすのである（檜垣 2019:53-54）。

檜垣の解釈のポイントは二つである。1:「私」は、「卵」のうちで生成する「さまざまなもの」に常に伴われており、「私」のあり方は、この「さまざまなもの」との関係性を通して認識される。2: とはいえ、「私」は「さまざまなもの」に帰着されない「一種の跳躍のような賭け」としての側面も持っており、この側面は、「原理的に無限の広がり」をもつ「未決定的なもの」 (= 「無限の俯瞰」) として「卵」に内在している。われわれは、前者の「さまざまなもの」を環境と呼び、この環境に帰着されない「原理的に無限の広がり」への内在として捉えられる側面を未決定性と呼ぶことにしよう⁽⁹⁾。「私」を、「卵」において区別される二つのあり方（環境、未決定性）と同一視することは、檜垣のドゥルーズ解釈の重要なモチーフである。

このような「私」の考え方を具体化するために、さらに別の観点から補足しておきたい。檜垣は『瞬間と永遠』の終章において、「原理的に無限の広がり」をもつ未決定性と同様のものを「儀礼」をモデルにして説明している（檜垣 2010:151-155）。檜垣のここでの記述は要約を拒むところがあるが、以下のようにまとめることができるだろう。パステューユ襲撃を祝う「連盟祭」は、過去にその起源を持つものであるが、この起源を遡及的に捏造することで新たに反復されるものである (= 未決定性)。さらに「連盟祭」は「創造的喜び」を伴っており、ここには文化的なものだけではなく「身体 = 質料的なもの」を含む「自然史的」なものも関わっている (= 無限の広がり)。これらのことからわれわれは、檜垣が述べる「私」の未決定性とは、「卵」という領野のうちに現れる自然史的な射程をもつ集団的行為の主体性のことであると見なすことができるだろう⁽¹⁰⁾。

ところで、このような「私」の未決定性は、差異の感性論にお

いて感覚されるものとしても論じられる。檜垣は、「私」の考え方を『差異と反復』の時間論に重ねて論じている。一方で環境は、純粹過去を条件とする「有機的—組織的連携」であり、行為の対象を構成する習慣の現在に対応する。他方で、未決定性は、環境を突き崩す「未来」ないし「第三の時間」に関わるものとされ、次のように述べられる。

だから、第三の時間で描かれる状況をいいあらわそうとするならば、それは、ひたすらに見ること、ひたすら感じることにしか表現できないだろう。与えられるものに対して、刺激—反応系（＝習慣化された働き）に収まるような、適切な応答をとれないこと。そこで真偽も内容も描けない新しさを、ただ受動的に被ること。未来という時間性を切りひらくこの場面は、まさに受苦という訳語すらあてはめうような、パッション＝情動の位相なのである。

しかし、引き裂かれた〈私〉、直接流れにさらされてある〈私〉とは、まさに生成を引き受ける個体そのものことではないか。だからここで語られる情動とは、むしろ個体であることの内容を、積極的に表現すると考えるべきではないか（檜垣 2019:95）。

未決定性は、「ひたすらに見ること、ひたすら感じること」であり「新しさ」を「受動的に被ること」、「個体であることの内容」を積極的に表現する「情動」とされる。要は、「連盟祭」などの集団的行為の主体性は、理性や意志において現れるものではなく、一種の差異として感じられるものとされる。ここにおいて、檜垣の「私」の考え方は、宇野の解釈に見た差異の感性論に近づくことになる。

それでは、宇野と檜垣の解釈の違いはどこにあるのだろうか。宇野の解釈において、差異の感性論は、合理性を排除する「平面」の議論において捉えられていた。他方で、檜垣の解釈において、差異の感性論は、未決定性において成り立ち、合理性の位置は環境ないし習慣の側面に残されていた。檜垣の解釈は、「予見不可能な生成をひたすら肯定する」のではなく、差異の感性論と合理性の共存を明示した点において、宇野よりも進んだものと言えるだろう（檜垣 2019:99）。

檜垣はさらに二〇一九年版において増補された第二部において、『千のプラトール』におけるマイナーサイエンティストとしての「冶金術師」のあり方を論じるなかで、今度はこの未決定性の側面そのものに合理性が関わる可能性について示唆している。檜垣は、『千のプラトール』において、「私」の環境的な側面が「メジャーサイエンス」に、未決定性の側面が「マイナーサイエンス」にそ

れぞれ対応する点を指摘したあと、マイナーサイエンスの一事例としての冶金術師について、次のように述べる。

冶金術師たちの暗黙知は、鉱物があることこそにしたがう知として機能することになる。そうした秘密の知は、鉱物をみだしたあとでの、精錬の作業にも関連するだろう。純粹な金属の精錬や加工は、それ自身多くのテクノロジー的知を必要とする作業なのである（檜垣 2019:170）

ここで冶金術師の鉱物は、自然史的側面をもつ未決定性の象徴として捉えられる。そして、ここでの合理性は未決定性としての「純粹な金属の精錬や加工」に関わるものとして論じられている。要は、「未決定性」そのものを精錬するものとしての合理性の可能性がここで示唆されるのである。

檜垣の解釈に見いだされるこのような側面は、まさに第二の標語である「Be jellyfish!」に集約される（檜垣 2019:225）。ここでのクラゲとは、同じ世界に住むにも関わらず、「革命的連結」によって今ある人間とはまったく別の仕方環境に適応した生物の象徴である。人間は差異の感覚として与えられる集団的行為の主体性のうちで合理性を構築する生き物であるだけではない。人間は、感じられた主体性を習慣とは異なる別の合理性によって洗練させることで、「革命的連結」としてのまったく別の環境に生きるものとして生まれ変わることができるものとも見なされるのである。「私」の生成変化を進展させる契機としての合理性を示唆する点で、檜垣のドウルーズ解釈は興味深いものであると言えるだろう。

結論

われわれは、宇野と檜垣の二著が反合理主義的な差異の感性論をドウルーズ解釈の中心においていることを確認してきた。そのうえで宇野は、触発次第で変形する力と微粒子の「平面」として個体を捉えており、檜垣は、「卵」における未決定性と環境という二つの側面において「私」を捉えているのであった。

合理性に関して言えば、われわれは差異の感性論に関わる形で四つの合理性のあり方を確認してきた。第一に、差異の感性論が排除する「道徳、政治、権力の〈神聖同盟〉」に関わる合理性である。少し敷衍しておけば、ドウルーズは、前期の主著の一つ『差異と反復』のうちで、「これは机である」といった再認や指示を保証する同一的な合理性を、差異や反復を「道徳」に従属させるものとして批判しており、第一の合理性はこれに対応する。（DR 176）。しかし、現代社会はその維持のために不可欠なものとして言語的なものを保持していることは明らかであり、本稿はドゥ

ルーズにおけるポジティブな合理性のあり方を考えるために、宇野と檜垣の著作の細部に注目してきた。

第二の合理性は、差異の抑圧を試みる第一の合理性とは異なり、差異から出発してとらえられるプラグマティックな合理性である。これは、宇野の著作においては示唆に留まっていたが、檜垣の著作においては、環境ないし習慣の合理性として定式化されるものであった。ドゥルーズの哲学において、われわれの行為を可能にするこのような合理性は、つねに「感覚されることしかできないもの」としての差異に先立たれている。第二の合理性はそのような差異に内在する習慣の合理性である。

第三の合理性は、差異そのものを「精練」させる合理性である。感覚されることしかできない差異それ自身は、合理性によって完全に表現されないものであることは間違いない。しかし、この差異のあり方を変化させ、われわれに新たな環境を発見させる手段としての合理性が別に存在しうる。このような「秘密の知」は、すべての人にとって共通なプロセスとして提示することはできないであろうが、そこに何らかの形式を見いだすことは不可能ではないであろう。

第四の合理性は、〈絶対〉としての作品の合理性である。差異の感性論をその教説のうちに含むドゥルーズ哲学は、限りなく相対主義的な立場に近づくものである。しかし、われわれはまさにこの〈世界〉において、社会的な生活を営むのであり、その都度パースペクティブのうちに共通部分を持つものであることも間違いない。ドゥルーズは、そのような間主観性の契機をなす〈絶対〉を力ないし表現活動のうちに見いだしていた。さまざまな「平面」同士のコミュニケーションを可能にする〈絶対〉、ここにもある種の合理性が関わっていると考えることができるだろう。

このような四つの合理性をドゥルーズ解釈において共存させることはできるだろうか。このような問いは本稿の射程を大きく超えるものであるが、われわれはこのようなものを考えるために、少なくとも、次のように述べることができるのではないだろうか。それは、このような合理性の共存を考えるうえで、カント的な能力論的解釈格子は不十分ではないかというものである。ドゥルーズ哲学において、合理性は極めて多様な位置づけを持つことをわれわれは確認してきた。差異を従属させる合理性、差異に対して現れる合理性、差異そのものを变形させる合理性、差異そのものの可能性の保証する合理性、このような差異と合理性との不調和的調和は、一方で「崇高」などのカント的な美学的な概念において記述されるものとして理解されてきた。しかし、この点を強調することは、結局のところ差異と合理性の関係を解消不可能な感性と悟性の対立へと帰着させてしまい、ドゥルーズが合理性に与えた豊かな位置づけを檜垣が述べるように「予見不可能な生成をひたすら肯定する」凡庸なものにとどめてしまうのではないか。もし、このような合理性の共存が論じうるものであれば、カントの能力論的な語彙ではなく、ライブニッツの時間論的な語彙によるのではないか。

また本稿では十分に検討できなかったが、『差異と反復』には、再認や指示を逃れ、一種の相互関係として論じられる構造的な合理性の論点がある⁽¹¹⁾。この合理性は、「問題」「諸理念」「多様体」とも言い換えられ、「微分的で発生的な諸要素」としてドゥルーズのシステム論と密接にかかわるものである。こういった論点との関わりを含め、ドゥルーズ哲学におけるさまざまな合理性の共存を論じることは今後の課題としたい。

参考文献

※ドゥルーズ著作への参照は、以下の略号と頁数を示す。既訳がある場合は参照したが訳文が異なるものもある。またドゥルーズの講義の書き起こしに関しては、リシャール・ピナス(Richard Pinhas)のサイト (Web Deleuze, webdeleuze.com) およびパリ第八大学のサイト(La Voix de Gilles Deleuze, www2.univ-paris8.fr/Deleuze)、ドゥルーズセミナーズプロジェクトのサイト(The Deleuze Seminars, https://deleuze.cla.purdue.edu/)で入手できる。本稿では先例にしたがって講義が行われた日付によって参照を行う。例：(15 Apr 1980)

Différence et répétition, PUF, 1968 (DR)

Spinoza: philosophie pratique, Minuit, 1981.(SPP)

宇野邦一(2012). 『ドゥルーズ：群れと結晶』, 河出書房新社.

—— (2020) [2001]. 『ドゥルーズ 流動の哲学 [増補改訂]』, 講談社学術文庫.

小泉義之(2015). 『ドゥルーズの哲学：生命・自然・未来のために』, 講談社学術文庫.

檜垣立哉(2010). 『瞬間と永遠：ジル・ドゥルーズの時間論』, 岩波書店

—— (2019) [2002]. 『ドゥルーズ 解けない問いを生きる〔増補新版〕』, ちくま学芸文庫.

注

1. 本稿では両著作ともに新しい版を参照する。『ドゥルーズ 流動の哲学〔増補改訂〕』は、〈新実在論〉のノートなど「全体として一割くらい加筆」されたものの、その論旨に大きな変更があるとは言えない。『ドゥルーズ 解けない問いを生きる〔増補新版〕』は、二〇〇二年の版にはなかった第二部が追記され、以下でも確認するが、合理性に関して深まりが見いだせるように思われる。
2. この箇所の議論には、内在の観点からの合理性の位置づけを考える際に再度戻ることになる。また『シネマ』に関する議論においても同種の言い方を見いだすことができる。「たぶんドゥルーズが続けてきた哲学的思考そのものに、何か映画的なもの、映画のイメージに本質的に対応するような何かが含まれていた。言語によって、言語として、概念や知を構成する哲学の思考が、いつも非言語（身体、物、物質、イメージ、力）と交錯し、たえず知の外の動き（感情、欲望、無意識、知覚）に直面していることに、ドゥルーズの哲学はいつでも敏感であった」（宇野 2020:258）。
3. 「微粒子」と「力」の関係のとらえ方に関しては、明確に整理されていないものの、「力が損なわれ、微粒子の構成が解体されて、より不完全になるのは「悪い」ことである」との記述を参考にした（宇野 2020:83）。
4. 「スコトゥスもスピノザも「存在の一義性」について語っているが、決してそれは存在があらかじめ統一性や同一性をそなえていることをいうためでない。むしろ存在が類や種への分割を受けつけず、ただ無限の差異を含み、個物としてじかに表現される（同一性にしがたって表象されるのではない）ということを行うために、「一義性」というのだ。ノマド的な配分の哲学にとっては、世界はひとつであり、同時に無限の差異であり、そのあいだに表象や同一性などはなくていいのだ」（宇野 2020:133）。
5. 「一般に作品はつねに理念的物体であり、それ自身において、添加の理念的物体である。作品は命令から生まれた問題である。問題が問題として漸進的にますます規定されればされるほど、作品は一度でますます完全で全面的なものになる。したがって、作品の作者はまさに《理念》の操作者と呼ばれる」（DR 256-257）
6. 宇野のこのような態度を象徴するのは例えば次の箇所である。「要するに、高度な専門知識をどんなに寄せ集めても、それだけでは、この本〔『差異と反復』〕の核心に近づけないだろう。哲学の内部に深く分け入るのは、結局それを外部に向けて切り開くためである。精密な議論は、あくまでもその大胆なモチーフのためにある」（宇野 2020:126）。
7. すべての主体は「世界の全体性」を表現する。それならば「何がある主体を別の主体と区別するのか」（15 Apr 1980）。このような問いはまさにドゥルーズが自身のライプニッツに解釈において立てていた問いである。ドゥルーズの答えは「観点（point de vue）」こそがそのような区別を可能にするというものである。以下で見る檜垣の未決定性に関する議論は、この「観点」の議論に対応しているように思われる。
8. このことを逆に言えば、檜垣のドゥルーズ解釈は人間以外の個体の生成が、どのようにして以下のような未決定性と環境のカテゴリーのもとで考察されるかという議論を完全に省略したものと言えるだろう。この点に関しては、一九九〇年代の自然科学的知見を用いて、ドゥルーズ自然哲学の再現を試みた小泉(2015)のドゥルーズ解釈が大いに参考になる。
9. さまざまな仕方でもパラフレーズされるなかで、われわれは論述のために環境と未決定性という簡潔な表現を選んだ。「環境」という言葉は、檜垣がそれほど多くはないもの実際に用いているものであり、未決定性は多用される「未決定なもの」という表現に由来する。
10. 檜垣は、『瞬間と永遠』においてこのような主体性を「瞬間と永遠の結びつき」としての「自然の自己触発」と呼んでいる（檜垣 2010:155）。そして「瞬間」と「永遠」はまさにこのような自然史的な射程をもつ集団的行為の主体性において結びつくものとされる。

11. 本稿では、檜垣が「卵」のうちに見いだす「問題」の論点を展開することができなかった（檜垣 2019:65-87）。「問題」は習慣とは異なる仕方で「卵」において創造されるものであり、生命の生成に関わる「歴史」や未決定性からの環境の発生に関わるものと見なされる。ここに見いだされる構造的な合理性に関してはまた別の機会に論じたい。

【論考】

『ドゥルーズの自然哲学：断絶と変遷』合評会コメントへの応答

小林 卓也

はじめに

本稿は、2019年9月4日に、大阪大学吹田キャンパス人間科学部東館3階316講義室にて行われた拙著『ドゥルーズの自然哲学：断絶と変遷』合評会において、コメンテーターとしてご登壇いただいた小倉拓也氏と小泉義之氏によるコメントに応答したものである。拙著を丁寧に読みいただき、鋭利かつ適切なご指摘、ご批判をいただけたことは著者としてこれほど喜ばしいことはない。この場を借りてコメンテーターのお二方、合評会を主催いただいた大阪大学大学院人間科学研究科共生学系・共生の人間学分野の関係者の方々に感謝申し上げたい。

以下では、小倉氏と小泉氏から寄せられたコメントのうち、とりわけ、著者としては想定していなかった考えや、より掘り下げて考えてみるべき論点を選択して応答を試みたい。したがって、応答文ではあっても反論文のようなものを意図してはいない。また、応えたもの、応えられるもの、応えられないもの、応えるべきものの取捨に偏りがあることについては、紙幅の関係上というよりは著者の能力に起因することをあらかじめご容赦願いたい。

『ドゥルーズの自然哲学：断絶と変遷』概要説明

拙著は2013年に大阪大学人間科学研究科に提出した博士論文に修正、加筆を行ったものである。まずは本書の概要を説明しておきたい。

本書の企図は、ドゥルーズ哲学を概念単位やキーフレーズ単位で整理ないしそこに還元するのではなく、ドゥルーズ哲学の年代ごとの理論構成の変化と、これに伴う概念の変化を辿り、最終的に独自の「自然哲学」へと至るその思想的変遷を記述することにある。本書は第I部においてドゥルーズ哲学における思想的断絶を明示したうえで、前期と後期の区分を明確化し、第II部で前期のドゥルーズ哲学を超越論的経験論として特徴づけ、第III部において前期ドゥルーズの企図を完遂するものとしての自然哲学を論じるという構成をとっている。以下では、本書の各所における主張を記す（本書からの直接、間接引用については、引用文のあとの丸括弧内に半角数字で表記する）。

第I部：思想的断絶の明示

① ドゥルーズ哲学には1970年前後に断絶があること。（第一章）

本書ではドゥルーズ哲学の思想的断絶を、『意味の論理学』（1969）と『アンチ・オイディプス』（1972）における器官なき身体概念化の相違によって示した。器官なき身体は、『意味の論理学』では、メラニー・クラインによる幼児の発達段階論を参照軸とし、分裂病態勢から抑鬱態勢へと移行させ、自我を形成する発生要素として位置付けられている。これに対し『アンチ・オイディプス』では、部分対象を離散的に登録しあらゆる出来事や個体がそこで生起する場として概念化され、そこにおける「欲望する生産」の論理（流れ、部分対象、離散的総合）が取り出される。これは、『意味の論理学』における分裂病者の器官なき身体について、「分節化する器官を持たないという点（sans organes）」が強調され、〔注：『意味の論理学』の理論構成からすれば〕「言語的秩序や有機的体に対するその外部、あるいはその極限として実体化されている」（40）ことと対照的である⁽¹⁾。また、これにともない『アンチ・オイディプス』は、『意味の論理学』において採用されていたメラニー・クラインの議論を、全体-部分論的観点から批判しており、その位置づけが変化している。

② 断絶の要因はドゥルーズ哲学の理論構成の違いにあり、この断絶を境に、前期（1953-1969）と後期（1972-1993）に区別される。（第二章）

『アンチ・オイディプス』以前と以後を分けるという論点は、たとえば檜垣（2008）が提起する「個体化の議論の消滅」など、従来から指摘されている。本書は『アンチ・オイディプス』に見られる「人間と自然の同一性」という論点に着目し、これを自然という主題の前景化を拒む前期からの断絶点を示すメルクマールであるとするとともに、後期の自然哲学へと展開される起点であるとした。前期ドゥルーズの企図は、超越論的領野の探求、すなわち、個体発生を可能にする条件（言語的分節化、意味）の探求にあるのだが、その理論構成が、「人間と自然の同一性」という論点を肯定的に取れない要因となっている。本書から引用する。

哲学の脱人間化から区別しなければならない。

第Ⅱ部：前期の超越論的経験論

③ 前期ドゥルーズの超越論的経験論は、後期ドゥルーズの自然哲学を構成する概念や論理をすでに含んでいる（発生論、能力の超越的行使、感性（強度）論）。

1950年代から1960年代にかけてドゥルーズが行ったカント読解とベルクソン読解の帰結が、『差異と反復』で明示される超越論的経験論である。ドゥルーズは、ポスト・カント派由来の発生と超越の議論をカントの超越論哲学自体に読み込んでいるということを、講義『基礎づけるとは何か』（1956-1957）（ポスト・カント派由来の発生の議論）、「カント美学における発生の観念」（1963）（とりわけ、崇高論における諸能力（理性と構想力）の自由で未規定的な一致は、諸能力の超越的行使の発生のモデルである）、『カントの批判哲学』（1963）（目的論的判断における有限的悟性（悟性と直観の区別）の発生）の分析から論じた。

また、ドゥルーズは、ベルクソン哲学から直観と持続の脱心理化という論点を取り出していることを二編のベルクソン論（1956）と『ベルクソニズム』（1966）の比較から論じた（ベルクソンの直観、持続概念の脱心理化（Sauvagnargues 2009）、知性と物質（および空間の外部化）の同時発生、収縮と弛緩による持続と物質の連続性。リヨン、サン＝クルー高等師範学校で行われた『創造的進化』に関する講義（1960）には、知性と物質の同時発生の議論が見られる）。さらに、『差異と反復』においてドゥルーズは、カントにおける直観と概念（感性と悟性、受動と能動）の非連続性に、ベルクソンにおける持続の弛緩と収縮による連続性（質的多様体）を対照させることで、『純粹理性批判』「知覚の先取（予料）」の強度論を換骨奪胎する⁽³⁾、その帰結が超越論的経験論であると主張した。

超越論的経験論に見いだされる、能力の超越的行使、発生論、感性論といった論点が、前期と後期の断絶を超えて、後期の自然哲学を構成する論点となるとともに、前期において不十分であった（すなわち、人間と自然の同一性を肯定的に規定できない、分裂病を臨床的実体に落とし込む、脱人間化された自然の能動性を無差異や無底としてしか概念化できない等の問題がある）超越論的経験論の企図を真に完遂することになる。

第Ⅲ部：前期ドゥルーズの企図を完遂するものとしての自然哲学

④ 超越論的経験論における諸能力の協働が解体した状態（経験）、およびその対象を肯定的に記述するのが後期ドゥルーズの自然哲学である。（思想的断絶がありながらも、前期と後期を連続的に捉える理路を示す。）

『意味の論理学』において超越論的領野は、個体を構成すると同時に、それを取り囲む世界を構成する基盤となると述べられていた（中略）これはつまり、内部性と外部性、主体と対象、命題と事物の状態としての属性といったあらゆる二元性が超越論的領野において発生し、こうした根源的な二元性が成立したうえで、個体の人称性や、個体が帰属する環境世界（Unwelt）と、そうした複数の世界に共通の世界（Welt）がそこから派生するということである。（78）

個体の発生そのものが、同時に世界や自然から分離され、これらをその外部へと排除することになるのは当然である。（78）

〔こうした理論構成からすると〕『アンチ・オイディプス』が提起する人間と自然の同一性は、人間（個体）と世界（自然）を分節化する二元性が発生する以前の状態としてしか理解されないことになるだろう。すなわちそれは、個体と自然、人称と対象が依然として区別されていない未分化な深淵、あるいは、身体と身体が物理的に混交した分節なき全体性としてしか概念化されえないということである。（78）⁽²⁾

「自然と人間の同一性」をメルクマールとする断絶点を起点に、後期に向けて自然という主題が前景化される（『千のプラトー』（1980）、『スピノザ：実践の哲学』（1981）、『襞』（1988）、『哲学とは何か』（1991））。厳密に言うと、自然という論点はそもそも前期にも一貫してあった（『経験論と主体性』における人間本性、『カントの批判哲学』における人間的な自然、あるいは、エピクロスの自然哲学）が、前期ドゥルーズにおいて自然という主題の前景化を拒む要因が、「超越論的経験論」という企図そのものにあると本書では主張した。

超越論的経験論とは、とりわけ『差異と反復』（1968）において取り組まれ、カント哲学における諸能力の協働から各能力（感性、記憶、思考）を解放することを企図する。この意味でそれは「脱人間化」（déshumaniser）と形容することができる。しかし、諸能力の協働が解体した脱人間化の状態を『意味の論理学』の理論構成内で捉えた場合、それは言語的分節化以前の状態として捉えざるをえず、同様に、脱人間化された自然は、単なる無差異や底なしとして把握せざるをえない。逆に言えば、こうした脱人間化された人間のあり方、およびその対象となるべき自然の能動性や生産性を肯定的に捉えるのが後期ドゥルーズの自然哲学であり、この意味で、非人間主義的な（inhumain）哲学と呼んで前期

ドゥルーズ最晩年の文章「内在——ひとつの生……」には、依然として超越論的経験論という表現が見出されることから、ドゥルーズ哲学を超越論的経験論によって形容することは可能である。しかしそこにおいてドゥルーズは、超越論的経験論を、諸能力の超越的行使として理解していた『差異と反復』のように、人間的秩序の解体（分裂病）や脱人間化（めまい、薬理的経験）といった観点からは捉えていない。諸能力の超越的行使を人間性や人間的（言語的）秩序の瓦解として、いわば、単なる超越論的経験として解するのではなく、一切の人間的形象が介在しない非人間主義的な自然の運動性によってこれを捉えたものが、後期ドゥルーズにおける自然哲学である。本書では、脱人間化から非人間主義への問題構成の転回、これによる超越論的経験論という企図が完遂されるプロセスを記述することでこれを示した。

まず、『意味の論理学』でドゥルーズは、超越論的領野は、非人称的・前個体的であるとしながらも、「自己統合化の内在的な運動原理を享受する」と述べている。この観点から、『差異と反復』におけるカントへの批判、とりわけ、「純粹悟性概念の演繹」における意識の統一性（超越論的統覚）への批判を顧みたとき、ドゥルーズの本来的な企図は、超越論的主観の瓦解や消去ではなくその脱中心化であると考えることができる。カントにおいて客観的表象の統一が超越論的主観と相関しているからには、客観（すなわち自然）もまた脱中心化されることになる。

このように、脱中心化（脱人間化）された自然を未分化な深淵やカオスに陥らせることなく、カント批判から導かれた主観と自然（客観）の脱中心化の運動性を把捉するために援用されるのが、生態学（エトロロジー）的に解釈されたスピノザ（リズム、メロディ、リトルネロ）であり、これがドゥルーズの自然哲学を構成するものであると主張した。

評者によるコメントへの応答

小倉拓也氏コメント

小倉氏によるコメントは、ドゥルーズおよびガタリによる後期著作『哲学とは何か』における芸術と哲学の関係性から、拙著の議論構成や自然哲学を見た場合の齟齬や矛盾に焦点が向けられている。『哲学とは何か』においては、思考と感性は厳密に区別され、前者は哲学に、後者は芸術に帰属されている。ならば、「感性論の徹底が行きつく先は、自然哲学ではなくあくまで芸術哲学ではないか」というのが小倉氏の指摘である。当日の配布資料より引用する。（以下、評者のコメントの直接、間接引用については、引用文のあとの丸括弧内に評者名コメント、半角数字の順に表記する。）

このことは、超越論的経験論を能力論という観点から捉えた場合、「感性」と「思考」の関係をどう理解するかということに関わっている。評者（小倉氏）の理解では、後期ドゥルーズは、諸能力の協働の解体という前期の超越論的経験論のプロジェクトを徹底した結果、感性の領域と思考の領域を明確に区別するに至り、純粹感覚を芸術に関わるものとして、純粹思考を大文字の〈自然〉に関わるものとして区別し、対照しているように見受けられる。（小倉コメント：1）

小倉氏が指摘しているように、ドゥルーズの能力論を考えるうえで、感性と思考の関係をどう理解するのかという問いが重要となることについてまったく同意見である。『哲学とは何か』において哲学と芸術が、思考と感性に対照されているのもその通りである。さらに、超越論的経験論が諸能力の協働から感性を切り離し、感覚されうものの存在のみを感覚する能力の発生論（すなわち能力論）である限りにおいて、純粹感覚は、感性の超越的行使の延長上にあるし、その帰結が芸術哲学となるという筋が通っている。

小倉氏による指摘によってあらためて気づかされるのが、哲学、科学、芸術の領域区分を行い、各々に独自の領域を確定するという『哲学とは何か』という著作の企図のため、当然のことながら、哲学、科学、芸術を媒介する論点、とりわけ、感性と思考の連携（関係）という論点が『哲学とは何か』には欠けていることである⁽⁴⁾。本書における『哲学とは何か』の価値づけが低いのは、感性と思考の関係を思考することが自然哲学の主たる役割であると考えているからである。この意味で、拙著第六章「自然の感性論としてのドゥルーズ哲学」で論じたのは芸術哲学ではなくむしろ、カント的な美学（芸術）と感性論（哲学）の区別、分類を批判し、両者を架橋するのがドゥルーズの感性論であるということであり、自然哲学であるということであった。

さらに言えば、自然哲学の要諦は、感性と思考を区別したうえで、両者が相関するとともに、相乗的に相互に固有の存在様態を変容していく、そのプロセスを思考することにあると考えている。拙著同章の最終部分から引用する。

ドゥルーズの自然の感性論という観点からすれば、感性論か美学かという「カントの感性論によって分裂させられた二元論（Sauvagnargues 2009: 300）」はその妥当性を失うことになる。なぜなら、知性と感覚、悟性と感性、上級認識能力と下級認識能力を区別するカント哲学とは異なり、感覚そのものにおいて非人間的な知性が発生し、当の知性

のなかには人間的な意味においては感覚しえない諸感覚が包含されているということをドゥルーズの感性論は肯定的に示すからである。(258)

「感覚そのものにおいて非人間的な知性が発生し、当の知性のなかには人間的な意味においては感覚しえない諸感覚が包含されている」と書いてはいるが、非人間的な知性、そこにおける感覚しえない諸感覚が具体的に何を指すのかが示されていないため、あいまいな記述ではある。少なくとも引用文の意図としては、非人間的な知性、感覚しえない諸感覚、さらにそれらのあいだの関係性とその関係性の変様を思考するのがドゥルーズの自然の感性論であるということであり、そのプロトタイプは「ルクレティウスとシミュラクル」のエピクロス派に見いだされるように思われる(拙著第五章「前期ドゥルーズ哲学における自然の問題—『意味の論理学』におけるエピクロス派解釈について」を参照)。また、ドゥルーズおよびガタリの著作に限定して言えば、当の役割を担うものとしては、拙著で論じた生態学に加え、『千のプラトール』における地質学的議論を挙げることができる(小林(2017)を参照)。

次いで、小倉氏は拙著における超越論的領野についてこうコメントしている。

『差異と反復』も『意味の論理学』で「脱人間化」の結果帰結するのは、無差異の深層ではなく、前個体的で非人称的な超越論的領野では、無差異の深層から区別されるものとしての1960年代の超越論的領野は、すでに「非人間的」ではないのか。(小倉コメント：7)

「脱人間化」が諸能力の超越的行使を意味する限り、その帰結は、前個体的で非人称的な超越論的領野でなければならないし、『意味の論理学』においてドゥルーズ自身がカオスに陥ること(要するに無差異や深淵に陥ること)を避けるべきであると考えていたことも拙著において指摘した。小倉氏と著者の違いは、『意味の論理学』において脱人間化(の状態)に相当する器官なき身体 of 解釈にあるように思われる。おそらく小倉氏の解釈では、『意味の論理学』における「器官なき身体」に、善き対象の「形態」を与え、ノイズから「音」を構成する、その意味で未分化ではない構成的機能があると考えており、ゆえにそれは単なる無差異の深層ではない。しかし、拙著の理解では、『意味の論理学』の器官なき身体は、純然たる深淵、未分化な深層でしかなく、それ自体に構成的機能はない。厳密に言えば、器官なき身体それ自体に構成

的機能はないのだが、それが分裂病態勢に後続する抑鬱態勢から顧みられたとき、「すでに(つねに)失われてしまったもの」という事実的な規定とともに、充実ないし完全性の理念としてそれが規定可能となるとともに、そこから完全性と充実性が善き対象へと転写され(ということは、器官なき身体が位置する深層と善き対象の位置する高所は、抑鬱態勢を挟んで鏡の裏表のような関係にあると考えられる)、これによって脱性化と罪責感の継続を伴う第三次配置への移行が可能となる。いわば、器官なき身体 of 構成的機能は、事後的に付与されると著者は考えている。

この意味で、『意味の論理学』における器官なき身体は、超越論的機能を持たない。しかし『アンチ・オイディプス』や『千のプラトール』において、これが自然の問題と結びつくことで、すなわち、器官なき身体が、定型発達以前のあるいはそれから逸脱する「脱人間化」の文脈からではなく、欲望する生産や自然の運動性という「非人間的」文脈から解釈し直されることによって、前個体的で非人称的な超越論的領野に「格上げされる」というのが拙著の読み筋である。

さらに、『意味の論理学』における動的発生(分裂態勢からの表面、超越論的領野の発生)と超越論的領野との関係について、小倉氏はこう指摘する。

しかし、カオスに陥ることのない超越論的領野それ自体が、動的発生の成果物であるはず。本書序盤の動的発生の評価と矛盾しないだろうか。(小倉コメント：15)

『意味の論理学』における超越論的領野については、上記で記したように、それを発生させる動的発生それ自体に構成的機能がないという点を除いて、超越論的領野が動的発生の成果物であることに、小倉氏と著者とのあいだに意見の相違はない(発生の成果物であるにもかかわらず、構成的機能がないというのは語義矛盾のように見えるが、前者から後者への物理的、自然法則的、質料的な意味での因果関係がないという意味で著者は述べている。意味(すなわち超越論的領野)、出来事は、物理的領域における能動と受動の結果、効果であるが、それらが物理的領域から区別され、その非物体的な特性を維持、存続させるとともに内属させるには、別の因果性(形而上学的、準-原因)を要するという『意味の論理学』の議論を想定している)。小倉氏が矛盾とするのは、超越論的領野は動的発生の成果物であるにもかかわらず、『意味の論理学』における動的発生の議論をメラニー・クラインへの価値づけの変化とともに批判し、『アンチ・オイディプス』以降の動的発生の議論の欠如を主張する拙著の構図であると思われる。

拙著では、『意味の論理学』における動的発生のプロセスと、『アンチ・オイディプス』において動的発生に相当する欲望的生産のプロセスとのあいだに相違があると見ている。この小倉氏の批判（指摘）に従って述べるのであれば、『意味の論理学』の動的発生は超越論的領野を生み出すのに対し、『アンチ・オイディプス』における欲望的生産は、それ自体が超越論的領野であるとともにそれ自体における発生の論理（欲望する生産、離接的総合）によって自らを生産する。

そのメルクマールとなるのが『意味の論理学』と『アンチ・オイディプス』における器官なき身体の位置づけの違いであり、メラニー・クラインの議論への価値づけの違いであることを拙著では指摘した。具体的にどう違うのか。拙著では、『意味の論理学』と『アンチ・オイディプス』におけるメラニー・クラインの位置づけの違いを、部分と全体の関係から論じた。統合されるべき全体（抑鬱態勢）を前提としてその部分（器官なき身体、分断された身体）を論じる前者に対して、後者においては、全体も統合も前提としない部分（対象間）の接続と切断が欲望的生産として提示される。前者では乳房（部分）はいずれ母親（全体）のそれとして帰属しようという限定を被ることになる。これに対し、後者の乳房は母親に接続することもあるが、それもまた、あくまでも部分としての母親であり、口（部分）、搾乳機（部分）、牛（部分）など他の部分対象と同列におかれる（これを離接的総合と理解している）部分に過ぎず、部分対象間には従属ないし帰属関係が入り込むことがない。この違いがあると考えている。

自然哲学について

拙著のなかで自然哲学におけるリトルネ口を論じた部分について、これは、ある種の表現性や記号機能がいかにして派生するのかを論じたものであり、「まさに動的発生論の問題であり、純粹感覚（感覚の存在）の問題」（小倉コメント：15）であると小倉氏は指摘している。まったく同意見である。ただし、動的発生論が前期と後期において内実を変えているということ（繰り返すが、動的発生からの超越論的領野の発生ではなく、動的発生かつ超越論的領野である自然内部の運動性における発生の違い）はすでに指摘したとおりである。

小倉氏の指摘の思惑からは逸れるかもしれないが、表現性や記号機能が物理的運動や質料性から区別される限りにおいて、それは物理的対象（すなわち認知的、現象的対象）ではなく、「思考」の対象であると考えている。イエラムスレウの発想から言えば、そのような「思考」を形式とする実体としての「物理的運動」や「質料」が存在するし、さらにそこから派生する表現性である実体の形式を、先の思考とは異なる「思考」が把握するというよう

に、感性と思考が運動し、相乗していくことを想定しているのがドゥルーズの自然哲学であると著者は考えている。

小泉義之氏によるコメント

小泉氏のコメントは、拙著における感覚（感性）の位置づけにその重点が置かれている。小泉氏による読み上げ原稿より引用する。

感覚の超越的行使で感覚されるものは、感覚しえないが感覚することしかできないものですが、この言い方について、小林さんも、「感覚しえない」とはカント的で常識的な意味の感覚では感覚できないが、「感覚することしかできないもの」なので感覚されていると解していますが、そのように感覚に二義性を持ち込んでよいのかという疑問が立ちます。普通は見えないが、超越的行使で無理をしたらなら見える、という理解でよいのかということです。例えば、赤外線は見えませんが、暗視カメラを目に接続すれば見えます。そのようなことなのかといったことです。（小泉コメント：3）

小泉氏が指摘されている通り、拙著では「感覚しえない」とはカント的な意味（すなわち、感性が悟性、構想力など他の諸能力と一致、協働して機能している状態）においては感覚できないと解している。しかし、「感覚することしかできないもの」を（通常の意味での感性においてつねに、すでに）感覚されているとすることは、当の感覚することしかできないものを自然的知覚の対象に落とし込むことになると考えているので、想定してはいなかった。さらに、小泉氏が適切にも、小林（2019a）の論旨を掬い取っていただいたように、『差異と反復』における理念論-強度論と能力論の間の齟齬、すなわち、前者がカント的な超越論哲学における経験の基礎（根拠）づけの議論に収まるのに対し、後者は経験の脱基礎（根拠）づけを企図する限りにおいて両者には齟齬があるという観点からこの議論を顧みると、感覚することしかできない感覚対象のステータスも、またそれを感覚する能力のステータスも、それ自体何を意味するのかドゥルーズ自身が明言しておらず、実際にはよく分からないとも思っていた。いずれにせよ、拙著の問題は、感覚することしかできないものを感覚する感官、感性について積極的な記述を試みていないことにあるかと思われる。

とはいえ、小倉氏への応答部で述べたように、少なくとも、感覚することしかできないものを感覚する（感覚している）と言うとき、それは、常識的な意味での感覚しえないものを感覚する（感覚している）という場合の当の感覚（ないし感官）とは、別の感覚であると解するべきであるとは言えるだろう。

この点から改めて考えてみる。能力の超越的行使によって諸能力の協働から解放された感覚は、当の能力によってのみ感覚されるべきものを感覚する能力に生成するが、そこにおいて感覚されているのは、強度それ自体（すなわち自然的知覚として対象化された存在者）ではないと考えなければならない（そうでなければ、小泉氏が指摘するように感覚に二義性を持ち込むことになる）。そうではなく、感覚されることしかできず、感覚されるべきものとは、感覚可能なものと感覚不可能なものとの差異、経験と経験不可能なものとの差異ではないだろうか（拙著の注でも言及したが、江川隆男氏は適切に、超越的行使の対象は、「現実における所与とセンシビリア〔著者注：所与を感覚可能なものとして与えるもの〕における諸（力）との間の差異」（江川 2003：88）であると明言している）。この差異そのもの（それ自体における差異、それ自身のための差異）は、通常の意味（繰り返すが認知的対象としての）感覚の対象ではなく思考の対象であり、さらに、当の差異そのものを感覚する感性のステータスも思考の対象となるとすれば、『差異と反復』第三章における感性から（記憶を媒介するが）思考へとリレーするという議論とも整合的である。さらに、このときの思考もまた、思考することしかできないものを思考するからには、当の思考とは何かという問いによって、思考のステータスが再規定されうるものとして生起する、というように、感性を端緒として思考をさらなる思考へと駆動すべく連動すると考えることができるのではないだろうか。

自然哲学と脱人間化について

さらに、小泉氏は、拙著が提示するドゥルーズの自然哲学と脱人間化、非人間主義といったタームとの関係について次のように指摘する。

小林さんは、「超越論哲学」の「脱人間化」、「人間主義」からの「脱却」について、「脱人間主義的な議論の先に見いだされるべき自然」といった書き方をしています（87-88）。素朴に言いますが、自然哲学にあつて、人間が消えるわけはありません。というか、人間なる種・個体が存在していても一向に構わないはずで、端的に言えば、感覚する存在者、感性的存在者、形而上学的な感官が存在すればよいだけだからです。（小泉コメント：7）

小林さんの論法をもってするなら、人間と自然の同一性は、それを肯定的に自然哲学として語るには、どうしても主観だけでなく、人間そのものも絶滅した状態を考えなければ

ならなくなるのではないのでしょうか。人間、主観、それを引き裂きと言おうが、襲と言おうが、その類のものが残っていたのでは、あるいは、残っていなければ、カオスに、知覚のラプソディに陥るというわけです。深みに嵌るというのです。／この論の運びは、明らかに、カント的な枠内にあります。少なくとも、反カント的でベルクソンののではないと思います。（小泉コメント：8）

拙著の見立てでは、カント的な超越論哲学が前提とする超越論的統覚を、諸能力の協働からの能力の解放（これを前期ドゥルーズは超越論的経験論と呼んでいた）によって批判することを脱人間化と呼び、しかし、ドゥルーズによる批判の矛先は、超越論的統覚そのものの瓦解、消失にあるのではなく、その中心化、統合化に向けられているとした。ドゥルーズの企図は、むしろ、その脱中心化、分裂化する運動を担保したうえで、その運動性を自然内部における個物の運動性のなかに見いだすことにあり、拙著ではこれを脱人間化に対して非人間主義として規定した。その帰結に自然哲学があるが、カント的な意味ではないとはいえ、超越論哲学の一種である限りにおいて、それは、小泉氏が指摘する通り、カント的な枠内に収まっているといえる。

したがって、ドゥルーズの自然哲学において人間が消えることはない。むしろ、そのような非人間主義的な自然の運動性を捉えるためには、あるいは、自然内部においてそのような運動性を把握しうる、「感覚する存在者、感性的存在者、形而上学的な感官」とは何かを問うためには、ある種の人間的知性、人間と言って語弊があるとすれば、思考や学（science）そのもの（先の小泉氏コメント引用部における「形而上学的な感官」にあたるだろうか）が必要であると、拙著ではむしろ、人間や思考の存在を重視している。同様に、「人間そのものも絶滅した状態を考える」人間や思考はどこまで行っても残ると考えており、そこにこそ哲学（すなわち、自然哲学）が存続する価値があるとも考えている。

冒頭に述べたように本稿は、小倉氏と小泉氏にいただいたコメントすべてに回答することができず、あくまでも両氏のコメントをふまえ、現時点から拙著を振り返った限りで論じたものに過ぎない。両氏には、的確に拙著の趣旨を読み取っていただき、また建設的な批判、指摘をしていただいたことにより、拙著の議論をより明確に自ら把握することができたし、詰めるべきポイントもあらためて明瞭となった。両氏への感謝は、今後のさらなる仕事によって返していきたい。

参考文献一覧

- 江川隆男『存在と差異 ドゥルーズの超越論的経験論』、知泉書館、2003年。
- 檜垣立哉「ドゥルーズ哲学における〈転回〉について——個体化の転変」、小泉義之・鈴木泉・檜垣立哉編『ドゥルーズ／ガタリの現在』所収、平凡社、2008年。
- 小林卓也「ドゥルーズの自然哲学序説」、『フランス哲学・思想研究』第22号所収、2017年。
- 『『差異と反復』におけるトリガーとしての問いの存在論』、『ドゥルーズの21世紀』所収、河出書房新社、2019a年。
- 『ドゥルーズの自然哲学：断絶と変遷』、法政大学出版局、2019b年。
- 近藤和敬、野元達一「後期ドゥルーズ哲学における「脳」という問題設定についての試論」、『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』第86巻所収、2019年。
- 小倉拓也『カオスに抗する闘い ドゥルーズ・精神分析・現象学』、人文書院、2018年。
- Sauvagnargues, Anne., *Deleuze. L'empirisme transcendantal*, Paris, PUF, 2009.

注

1. 本書にて断絶が生じた時期を70年前後という曖昧な表現にしているのは、『アンチ・オイディプス』（1972）に先立ち、ドゥルーズとガタリがはじめて共同で執筆した、*L'Arc* 誌所収のクロソウスキー論「離接的総合」（1970）のなかに、精神分析家によるオイディプス化に対する分裂症化（schizophrénisation）という対立軸および、後者を「欲望する生産」の論理に繋げる論点が出ているためである。
2. ただし、小倉（2018）も指摘するように、『意味の論理学』においては、超越論的領野を未分化な深層から区別し、単なる無秩序やカオスに陥らないその固有のあり方をすでに論じていることを考えると、同書において超越論的領野から区別され、あくまでも深層に位置づけられていた器官なき身体が、『アンチ・オイディプス』にいたって、この超越論的領野に同一視され、いわば上昇したと解することができる。
3. 「感性の欠如として理解される強度ゼロとは、むしろそこにおいて感性が、経験的な感性（的直観）によっては感覚しえないものに直面し、直観の形式との協働が破綻する契機として肯定的にとらえられるべきである。それは、実在の否定 = 0ではなく、感性がカント哲学における諸能力の協働から解放される肯定的な極限として理解されるべきであるとドゥルーズは考えるのである。」（195）
4. とはいえ、『哲学とは何か』における脳についての議論が、哲学、科学、芸術を媒介するものにあたる解することもできる。しかし、後に論じるように、拙著の自然哲学の関心からすると、当該議論のなかに、哲学（思考）と芸術（感性）が相互に相乗的に関連しあい、各々の領域自体が相互的に変様するというプロセスを見出すことは困難であるように思われる。近藤・野元（2019）は『哲学とは何か』における脳概念が、哲学、科学、芸術を相互に接合することによって相互干渉を行うものであるとし、その特徴を的確に整理している。『哲学とは何か』において、とりわけ哲学がニーチェ哲学以降の「形而上学」を構想していること、ドゥルーズとガタリにおける「自然」がスピノザの「神即自然」の読み直しにあること、また、哲学における脳の議論が「知性の発生学」に関わるものであることについて、全面的に同意する。しかし、近藤・野元（2019）による卓抜な整理から、同書における芸術、科学、哲学の脳概念を媒介とした「接合」「干渉」関係について読み取られるのは、哲学における俯瞰と芸術における縮約の「平行関係」（87）、「感覚のための筏が「合成平面」であり、ファンクションのための筏が「指示平面」である」（96）、さらには、科学におけるファンクションが「他の〔著者注：哲学と芸術という〕二つの薄層にたいして干渉し、それらが己を維持するのに役立てられる」（89）というように、三領域の並行性とその強化であって、それらの相互的な変様という拙著における自然哲学の関心に応えるものではないことは明らかである。

【イベント報告】

『意味の論理学』出版 50 周年記念特別企画「『意味の論理学』を本質変形する」

小倉 拓也

DG-Lab は、2019 年 12 月 7 日（土）、慶應義塾大学において、『意味の論理学』出版 50 周年記念特別企画として「『意味の論理学』を本質変形する」を開催した。DG-Lab と、秋田大学教育文化学部地域文化学科国際文化講座小倉拓也研究室の共催によるものである。この特別企画の記録は、その全登壇者の原稿が、一部改稿の上『hyphen』本号に特集として収録されている。各登壇者の発表内容の詳細についてはそれをお読みいただくことにし、以下ではごく簡単な報告を行うことにしたい。

本イベントは、タイトルのとおり、ドゥルーズの『意味の論理学』（1969 年）の刊行 50 年を契機に企画されたものである。DG-Lab のメンバーである小倉拓也、内藤慧氏、平田公威氏に加え、江川隆男氏に講演者として登壇いただいた。イベント当日、東京はあいにくの雨で、また、事前準備の段階で会場に変更が生じたり、ポスターの作成が遅れたりしたこともあって、どれだけの来場者がくるのか心配していた。しかし、13 時の開始段階で会場はほぼ満席、開始後まもなく超満員となった。参加者は、北は秋田から南は沖縄にまでわたった。

イベントは、小倉による「導入——『意味の論理学』の地図作成」からはじまった。小倉の導入は、『意味の論理学』のドゥルーズの仕事における位置づけと、書物の内的構成についての図式化を行うものであり、続く発表、講演、質疑をとおして、タイトルのとおり変形され、捻じ曲げられることが意図されたものだった。

次いで、内藤慧氏の研究発表「海の原理とストア派——『意味の論理学』動的発生論のストア派的読み換え」が行われた。これは、「海の原理」といういまだ主題化されたことがないように思われる概念に注目することで、主に精神分析の理論装置を用いて展開される動的発生論のなかに、ストア派の哲学の重要性を、その混合概念の検討や、さらにアントナン・アルトーに紐づけられる「湿の原理」との関係の検討などをとおして見いだす、きわめて意欲的なものだった。

続いて行われたのが、平田公威氏の研究発表「動詞的になるこ

と——『意味の論理学』におけるアイオンの文法論的考察」である。この発表は、第 22 セリーでアルコールリズムなどに関連づけられて言及される「複合過去」の特異な時間性を、ドゥルーズのひそかな元ネタであるギュスタブ・ギヨームの時間発生論を導き、「第三の現在のアイオン」として、つまり現在を徹底的に逃れる空虚な形式がそれにもかかわらず現在に場を持つこととして、説得力ある仕方で明らかにするものだった。

最後に、江川隆男氏の講演「〈批判／臨床〉の並行論について——『意味の論理学』における一義性の思考」が行われた。先行する導入と研究発表が、形式的な図式化につとめるものであったり、特定の概念をめぐるテクニカルな議論であったりしたのに対して、江川氏の講演は『意味の論理学』のど真ん中を射抜くものだった。氏は、ドゥルーズの哲学が、否定性の優位に対する肯定の哲学であり、それが差異の哲学であるということを力強く確認するとともに、それをいかなる実体も関係も退ける苛烈な「〈存在の仕方〉主義」として論じた。ぜひとも『hyphen』本号に収録された論文を読みたい。ちなみに、私が最も衝撃を受けたのは、スピノザ的な必然性をめぐる私の質問に対する応答で、この〈存在の仕方〉主義が、徹底的な無-実体、無-様相の哲学であり、そこでは、ドゥルーズにおいて可能性を消尽するものとして肯定的に言及されるスピノザ的な必然性すらも消尽されると論じられたことである。江川氏の議論からは、個人的にも、集団としても、大きな力を得た。

導入に対しても研究発表に対しても、活発な質疑応答が行われ、講演後の全体討議ではとくに熱のこもった議論が交わされた。参加者にも恵まれたイベントだった。また、会場となった慶應義塾大学の教室は、DG-Lab の貴重な東京勢である内藤氏の尽力と、樋笠勝士氏の協力で利用することができた。ご協力くださった方々に、あらためて感謝申し上げたい。DG-Lab は、次に『アンチ・オイディプス』（1972 年）のイベントを企画しているが、果たしてどうなるか……。

執筆者紹介（あいうえお順）

江川 隆男 立教大学現代心理学部教授
小倉 拓也 秋田大学教育文化学部准教授
小林 卓也 大阪大学大学院人間科学研究科 招へい研究員
財津 理 思想研究家 法政大学名誉教授
佐原浩一郎 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程
得能 想平 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程
内藤 慧 東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程
平田 公威 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

編集委員（あいうえお順）

得能想平、内藤慧

掲載規約

本誌は、DG-Lab の 2019 年の活動報告、メンバーによる研究報告、そして関連イベントの報告（依頼執筆を含む）を収めている。掲載された文章はいずれも、DG-Lab におけるミーティングで合意された規約に則り、DG-Lab に投稿され、掲載が許可されたものである。掲載の許可は、掲載への反対がないかぎりにおいて DG-Lab のメンバーの総意にもとづくものである。

hyphen no. 5

2020 年 9 月 10 日発行

編集 『hyphen』編集委員

発行 DG-Lab

<https://dglaboratory.wordpress.com/>